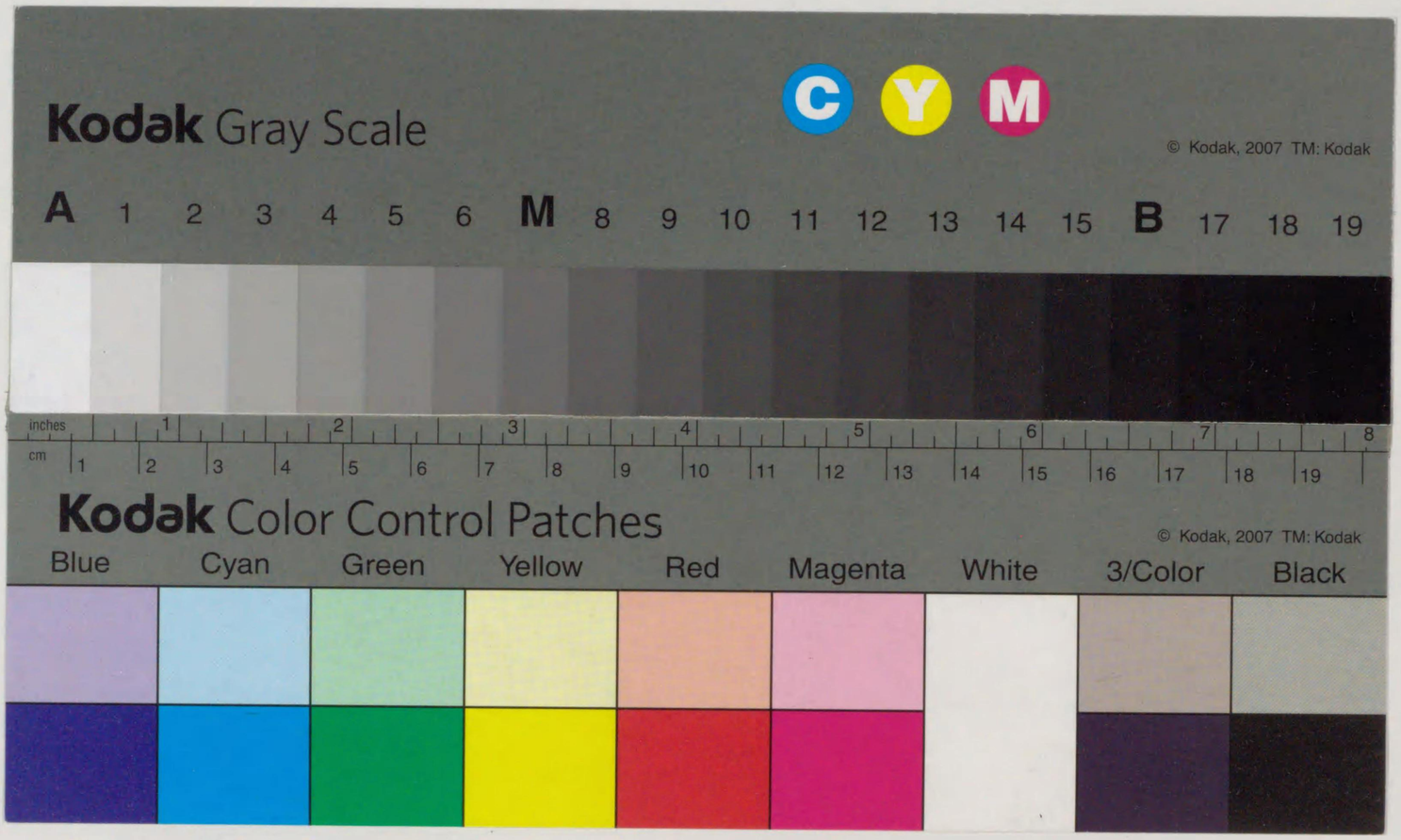

746 22

746-22
12005015929 82

85

勝鬘經講義

小林一郎述

東京　大乘佛教會版

昭和十三年　帝國圖書館

勝鬘經講義

小林一郎述

東京　大乘佛教會版

昭和十三年一月寄贈

746
22

序

勝鬘經は大乘佛教の根本精神を最も簡單明快に說かれたもので、攝受正法といふことが一經の中心となつて居る。攝受正法とは卽ち菩薩行である。菩薩行を勵んで怠らぬものは、佛の境界に到達し得べきである。勝鬘經は至て短い經であるけれども、之を精讀すれば己を佛にし、人を佛にする道が明かに示されてあることに深き滿足を感じ得べきである。聖德太子が多くの經論の中から特に此經を法華經及び維摩經と共に擇び出して、之を朝廷百官の爲に親しく講ぜられ、又之が義疏を作つて後世に遺されたのはまことに謂あることである。

太子は多くの寺を御建立になつたが、其の寺に於て種々の社會事業を經營せしめられた。それは此經の中に說かれたる『十大受』といふことに基くものと傳へられて居る。此の事は實に勝鬘經の所說が如何に實生活と密切なる關係を有するかを證するに足るものである。自分の拙い講述は此經の深き意義を發揮するだけの力の無いものであらうが、今の複雜極まる世の中に立つて、能く其の責を果し其の任を全うするために、信念の必要なることを感ぜらるゝ人々が、心を潛めて此經を讀まれたならば、必ずや大に得る所があるであらうと思ふ。自分が微力ながらに此經の講述を試みたのは實に之が爲である。

昭和十三年二月

小林一郎

勝鬘經講義

小林一郎述

序說

維摩經に就ての講述は極めて不完全なものであつたが、兎も角も前號を以て終りを告げたので、豫定の如く本號より勝鬘經に就て講述することになつた。淺學菲德の身を以て貴き大乘經典を講ずるが如きは、まことに僭越の甚しきものであつて、佛に對しても、又世間の人々に對しても相濟まぬ次第である。自分が此の事を能く知りながら、敢て僭越の罪を犯して悔ゐぬのは、一人でも多くの人に佛典に親しむべき緣を與へたいといふ念願に出るものである。維摩經の講述をはじめてから、之を終るまで凡て二年八ヶ月を要したが、その間に自分は一度も病に罹らず、いつも悅びに充ちた心をもつて筆を執つた。法華經の法師品には五種の修行が擧げてあつて、解說と書寫とが其の中に數へられてある。佛の貴い經典に就て、或は筆に、或は口に、

說明解釋を試むることが卽ち自分の修行である。此の有難い修行を積むべき機會を與へられたことは何より大なる悅びでなければならぬ。今は前の講述が一段落を告げ此より新なる講述に入るのであるが、自分は又一段の大なる悅びを禁じ得ぬものである。力の足らぬ身ではあるが大に自ら勵まして、此の新なる講述をも無事に終りたいと思つて居る。

勝鬘經は維摩經及び法華經と共に聖德太子が親しく朝廷の百官のために御講じになつたものであることは前に述べた通りである。太子は又此の三經の義疏を御作りになつて、後世に遺された。今より自分の試むる講述も主として太子の義疏に據るつもりである。此の經の漢譯は凡て三種あつたと傳へられて居る。其の一は北凉の曇無讖の譯である。(北凉は晉末の所謂五胡十六國の中の一つで、三代にして亡びた國である。吾が朝の仁德天皇の御宇から允恭天皇の御宇迄である。)其の二は宋の求那跋陀羅の譯である。(此の宋は南北朝時代の國で、八代にして亡びた。吾が朝の允恭天皇の御宇から雄略天皇の御宇迄である。此の國は劉裕の創むる所であるから、史上には劉宋と稱せられて居る。)第三は唐の菩提流志の譯である。此の三種の漢譯の中で第一の曇無讖の譯本は散佚して今に傳はらぬので、今では二種の譯本が存するのみである。支那の如く幾回も革命のある國は、國內の秩序が全く破壞せらるゝ場合が少からずあつて、貴い

經典なども屢々失はれてしまふのである。其等の事を思ふと、吾等は日本國に生れたことを深く感謝しなければならぬのである。さて今日に傳はれる二種の譯本の中で求那跋陀羅の譯が一般に行はれて居るし、聖德太子も此の譯本によつて御講じになつたのであるから、自分も之に據る事とした。併し唐の流支の譯も求那跋陀羅と同じ原本に據つたものと思はれ、大體に於てちがひは無いやうである。

此の譯者の求那跋陀羅(功德賢といふ意味である)は中天竺の人で、大乘の學に深きを以て世に摩訶衍と稱せられて居た。摩訶衍とは大乘といふ義である。元嘉十二年、四十二歲にして天竺を發し海路を經て支那の廣州に着いた。宋の文帝(二代目の帝である)は深く佛敎を信じ、豫てから求那跋陀羅の名を聞いて居たので喜んで之を迎へ、之にあつき保護を加へて大乘經典を譯せしめた。勝鬘經は其の一である。彼のために通譯の任に當つたのは寶雲といふ高僧であつた。此の人は曾て天竺に赴いて修行を重ね、又梵語に精通し、支那に歸つて後種々の經を譯した。又求那跋陀羅の說く所を筆受して、今吾等の讀む所の譯本を大成したのは慧觀であるが、此の人は維摩經の譯者なる羅什三藏の門下に於て英俊と稱せられ、博學無比として當時に推重せられた。求那跋陀羅は此等の人々の助けによつて此の勝鬘經の漢譯を成したのであるが、

其の後も續いて支那に止つて上下の歸依を受け、宋の明帝の太始四年正月、七十五歳を以て沒した。吾が雄略天皇の十三年である。

勝鬘經に解釋を加へたものが支那には幾種もあつたやうであるが、其の中に於て唐の吉藏の著はした勝鬘經寶窟が殊に優れて居るやうである。（此の人は嘉祥寺に居たので世に嘉祥大師と稱せられ、支那に於ける三論宗の祖である。武德六年に沒した。吾が推古天皇の御宇である。）併し前にもいふ通り聖德太子の御作りになつた勝鬘經義疏は太子獨得の御識見によつて、最も徹底的に經の深義を明かにせられたもので、これが今日まで傳はつて居るのは實に有難い次第である。又此の勝鬘經義疏は維摩經義疏と共に唐に傳はり、天台宗の明空といふ人が更に之に註を加へて世に弘めたといふ。當時は萬事支那を尊び、支那の人も吾が日本などよりも遙かに優越なる地位に在るものとして自任して居たのであるが、獨り太子の御著述に註を加へて世に弘めたといふは其の推重の念のいかに深かつたかを知るべきである。太子が推古天皇の御前に於て百官のために勝鬘經を講せられたのは三日間であつたといふから、先づ其の大體を說かれたに過ぎぬと思はれるが、法隆寺に傳はる太子の御像は、勝鬘經を講せらるゝさまを刻したものだといひ傳へられて居る。而して勝鬘經義疏は一々本文について解釋が加へられてあつて、尤も詳密なものである。

此の經は一般に勝鬘經といふ名を以て傳はつて居るが、委しくいへば『勝鬘師子吼一乘大方廣經』である。是れは勝鬘夫人が佛前に於て說いたことが主要の部分となつて居る經であるから、先づ勝鬘の名が擧げられてある。次に師子吼とは佛の說法のことである。佛は大衆の中に於て更に畏るゝ所なく、其の信せらるゝ所を說きたまふのであるから、之を師子吼に譬ふるので涅槃經には

師子吼とは決定說に名く。

とある。また僧肇の說明には

師子吼は無畏の音なり。凡そ言說する所群邪異學を畏れず。師子吼して衆獸の之に下るに喩ふ。

とある。勝鬘夫人は佛ではないけれども、其の說ける所を釋尊が稱揚せられて、能く佛の御心と一致したることを認められたから、之を佛說に準じて師子吼といつたのである。次に一乘といふは佛の自ら信ずる所を打明けて說かれたものをいふので、如何に多くの敎へがあつても結局は此の一つに歸着すべきに定まつて居るから一乘といふのである。此の經の中には此の一乘

の教へが如何なるものであるかを極めて明確に說いてある。是れが此の經の主眼ともいふべき點である。次に大方便とは佛菩薩が一切衆生を教へ導かるゝ方法の無量なることをいふのである。此の大方便は卽ち一乘の中より生み出さるゝ作用に外ならぬもので、究竟の理を覺り得たものは必ず限りなき活動力を具ふるやうになるのである。無量義經に釋尊のことを稱讃して

今自在の力を得、法に於て自在にして法王と爲りたまへり。

とあるのも卽ち此の事をいつたのである。次に方廣とは方正にして廣大なることで、眞の大乘の教へを說いたものを方廣經といふのである。此の名目を見たゞけでも、此の經の內容はほゞ推し得らるべきである。

此の經は勝鬘夫人の說いた所であるから、特に婦人の守るべき道が說かれてあるであらうと思ふ人も少くないやうであるが、少しもさういふことは無い。始めから終りまで大乘の深義を說かれたのみである。抑も菩薩の道を行じて佛と成るのに男女の別などのあらう筈はない。佛教に於ては婦人を輕く視て、男子と同等とは考へられて居ないといふやうに傳へられて居るけれども、佛教にも方便の說と眞實の說とがある。婦人を輕く視るとか乃至は婦人を罪惡の元であると說くとかいふのは、皆何れも方便の教へである。例へば

一切女人は皆是れ衆惡の所住處なり。

と涅槃經に說かれ、

女人の心は實を得べからず。

と智度論にあるが、其他にも此の類は多い。又法華文句に出て居る所によれば、阿難が「如來の滅後に於て女人に對して如何にすべきか」を問へるに對して釋尊は

與に相見ること勿れ。設ひ相見るとも共に語ること勿れ。設ひ共に語るとも當に專心に佛を念ずべし。

と仰せられたとある。此の如くに女人を輕視し或は危險視したやうなことを說かれたのには凡そ二つの理由がある。其の一は靑年の弟子が罪を犯すことを防がんがためである。たとへ貴い佛法を學んでも直ちに悟り得らるゝわけのものでは無い、最初のうちは心中の煩惱を打ち掃ふことが却々困難である。されば修行の初期に在る靑年の弟子等をして過失に遠ざからしむべき方便として、女人に近づくこと勿れと戒められたわけである。

今一つの理由は女人をして自ら反省して熱心に道を求めしめんがためである。何れの國でも同樣であるが、印度に於ても最初は男子の力によつて國が建てられ、婦人は男子の保護の下に暮

して居たのであるから、其後も男子の勢力は無論遙かに婦人の上に在り、社會の重要なる地位は皆男子の占むる所であつた。隨つて男子は概して婦人よりも重い責任をもち、其の責任を果す爲には相應な教養も必要である。斯る事情によつて、婦人は社會上の勢力に於ても概して男子に及ばず、又其の教養に於ても概して男子に及ばず、常に抑壓せられて日を暮る有樣であつた。其の爲に多くの婦人は自己を向上せしめやうといふ奮發心が無くなり、殆んど無意義に生涯を送るやうになつた。又常に抑壓を受くる者は兎角に其の心が僻んで陰險になり、嫉妬の念が強くなるものである。さうして自分より弱い者に對しては隨分殘酷なことを平氣でするやうになる。佛は此の如き境遇に置かれたる婦人の多數を特に深く哀愍せられ、彼等をして其の缺點を自覺して特に修養に力を用ゐしめ、斯る淺ましい狀態を脫出せんとの奮發心を起さしめんとて、其の反省を促すための訓誡を屢々與へられたのである。女人は罪惡の結晶であるといふやうな語がいつでも佛典の中には見出さるゝのであるが、それは皆佛の大なる慈悲心に出るものであると知るべきである。

併しながら『一切衆生悉く佛性有り』とは佛の明かに認めらるゝ所である。如何なる境遇に置かれ、如何なる罪過を重ねても、其の貴い佛性が失はれ盡すものでは決してない。されば充分の修養を積んで德を成し人を益したる女人も少からずあつて、其の事蹟は經典の中にも屢々見えて居る。勝鬘夫人の如きは其の最も著しきものである。尙ほ他の一二の例を擧げて見ると、寶積經には舍摩夫人の事が出て居る。優陀近王に二人の夫人があつたが、一は舍摩といひ深く佛法を信じて貞淑なる婦人であつた。一は帝女といひ諂佞にして妬嫉の念が强かつた。帝女は舍摩を除かんことを企て、王に讒言して『舍摩は佛法を信ずるに託して釋尊と非法の事を行つて居る』といつたので王は大に怒り、遽かに舍摩の室へ闖入し箭を以て舍摩を射たが、舍摩は慈愛三昧に入つて居たので、其の箭は之を傷くることが出來なかつた。(三昧とは心を一處に定めて寂然不動なることをいふ。唯だ慈愛の念にのみ專であつて、その心の不動なるを慈愛三昧といふ。その外にも種々の三昧がある。)王は續いて三度までも箭を放つたが、一も舍摩の身に中らなかつたので大に驚き、『汝は天か龍か』と問うた。夫人は之に對して『我は天にもあらず龍にもあらず、佛を信じて正法を聽き五戒を持てるものなり』といひ、なほ言をついで

今我王を哀愍するが故に慈愛三昧に入れり。王不善の心を生ずと雖も王の箭は我が慈悲の顏を傷ること能はず。

といつたので王は大に感悟して、夫人と共に佛の所へ行つて今までの一切の事を懺悔し佛弟子

となつたといふことである。

又維摩居士の女であつた月上女の事蹟をかいた月上女經といふものがある。此の婦人は非常に容貌が端麗であり、且釋尊の御弟子となつて大乘の敎へを學び父に劣らぬほどのシツカリした信仰をもつて居たのであるが、其の美しさにあこがれて結婚を申込んで來る若い男が非常に多かつた。其の中には公子とか豪族とかいはれる者もあつて『月上女をくれなければ汝の家を襲うて一切を破壞してしまふ』などゝいふ脅迫的の書面をよこす者もあつた。維摩は自分の一家に難儀のかゝるのは餘儀ないことであるけれども、之が爲に世間を騷がせ多くの人に迷惑をかけてはならぬといふので非常に心痛した。月上女は心に深く決する所があつて、彼の求婚者に書面を送つて、日を期して郊外に集らせ、自ら夫たるべき者を選擇しやうと通告した。其の當日は多くの青年が指定の場所に集つて月上女を待ち受けて居た。月上女はそこへ現はれて彼等の不心得を說き諭し、欲を恣にするの愚なることを力說し『速に諸欲を解脫せんと欲する者は我と共に釋尊の所へ往詣せよ』と勸めた。之を聞いて多くの青年等は深く慚ぢて立去り、中には月上女に伴はれて佛の所へ赴いて弟子となつた者もあつた。最初月上女が其の決心を父に打明けた時の言に

慈心決定すれば瞋恨なく、慈心竟畢すれば他を畏れず。我今此の慈心の念を起せり、世を護ること猶ほ身を護るが如きのみ。

とある。まことに是れは大乘の精神を言ひ悉せるものといふべきである。婦人の中からも此の如くに偉大な人が少からず出たものである。

勝鬘夫人も斯る貴き女人の一人であつた。夫人はまだ年の若い身でありながら釋尊の御心を以て吾が心とし、大乘の深義を信解し且實行したので、其の夫たる友稱王をはじめ國民全體を感化することが出來た。卽ち勝鬘經の終りの方には

具足して佛を念じたてまつり、還つて城中に入り、友稱王に向ひて大乘を稱歎し城中の女人七歲已上は化するに大乘を以てしき。友稱大王も亦大乘を以て諸の男子七歲已上のものを化し、國を擧げて人民大乘に向ひき。

とある。又夫人が釋尊の御前に於て說いた所は全く佛の御心と一致せるものであるから、釋尊は帝釋天に對して

汝當に此經を受持し讀誦すべし。

と命ぜられ、又長老阿難に對しても

汝も亦受持し讀誦して四衆のために廣く說くべし。

と仰せられ、重ねて帝釋に告げて

當に知るべし此經は甚深微妙にして大功德聚なり。

と仰せられた。勝鬘夫人の如き妙齡の婦人でも、一心に修行して怠らなければ、佛の御心を正しく知つて世を化し人を導くことが出來るのである。吾等も亦之を理想として自ら勵まなければならぬではないか。

維摩經を讀んで見ると、眞の佛法は吾對の日常生活を少しも離れたものでないといふことが明かに分る。山林に入り世間と絕緣して修行するには及ばぬ。最も大切なのは心一つの置きどころである。心一つが淨く正しくさへあれば、如何なる境遇に在つても常に淨く正しい行ひを續けて行くことが出來るのみならず、又自ら周圍の人々を化して共に淨く正しい生活に入らしむべき力をもつて居る。維摩詰その人の行ひが其の模範である。聖德太子が朝廷の百官のために維摩經を講ぜられたのは、此の事を充分彼等の心の中へ打ち込まれんためであつたに違ひない。其の後も此の經は大に重んぜられて、毎年奈良の興福寺に於て維摩會といふものが、營まれて居たといふが、其の精神は全く失はれてしまつた。その起りに就て傳ふる所によると、藤原鎌足が病氣に罹つて生命も危く見えた時に、百濟から來た法明といふ尼が鎌足の子の不比等にすゝめ、維摩經の中に問疾品といふのがあるから此の經を讀誦したら大臣の病も快癒するであらうといつたので、不比等は直ちに其の勸めに從つた。さて衆僧を集めて維摩經を讀誦せしめたところが鎌足の病は幾くもなくして全癒した。之によつて毎年維摩會を營むことになつたのであるといふ。あまりにも愚なことではないか。維摩が病臥して居たのは、一切衆生病むが故に自分も病むのだとある。而して一切衆生の病とは身の病ではなくて、心の病である。維摩經を讀誦して身の病が癒ゆるなどゝいふのは維摩を侮辱するの甚しきものである。藤原氏の榮えて居た間は毎年維摩會が缺かさずに行はれたが、彼等の心の病は益々甚しくなるばかりで、見苦しい勢力爭ひが絕えず繰返された。佛敎の方も亦其の渦中に捲き込まれて、佛の御精神が全く失はれてしまつた。經の精神を忘れて唯だ形式的に經を讀誦し講讃するのは、まことに愚なことである。

その事は暫く措いて、彼の維摩經は深く味へば味ふほど貴い經であるが、吾等には維摩居士の千百分の一の行ひでも果して出來るであらうかといふ疑惑が起らざるを得ぬのである。維摩

居士は非凡なる天分をもつて居て、而も非常に久しい間釋尊の教へを受け、又其の學び得たる所を日常生活の上に實行して、結局あの通りの高德の菩薩となつたのである。その通りのことが今の吾等に出來やうとは却々思はれぬ。然るに維摩經に續いて此の勝鬘經を讀んで見ると、大なる奮發心が起るのである。勝鬘夫人はまだ年の若い一婦人にすぎぬ。又其の佛法に就ての修行もそれ程に久しいものではなく、其の父なる、波斯匿王と、其の母なる末利夫人に勸められて佛法を學び、信解することを得たのである。此の事は吾等に大なる教訓を與ふるものである。必ずしも久しい歲月を費すを要せず、至心を以て法を學び道を求むる時は必ず得らるゝのである。唯だ憂ふる所は至心ならざることであつて修行の歲月の久しからぬことではない。世間の人の多くは久しい經驗によつて賢くなり得るものゝ如くに思つてゐるが、それは全く間違つた考へ方である。物事に就て深く考ふることなしに、漫然として世間に立ち、種々の經驗を積んで居る間に眼前の小い利害得失を打算することにのみ專になつて、眞實の道を求むる念は次第に失はれてしまふのである。世間をたゞ無事に渡ることだけが人生の目的ならば、久しい經驗によつて賢くなるともいはるゝであらうが、眞に人らしい生き方をするといふ點からいへば多くの人は久しく經驗を重ねて居るうちに次第に人らしい生き方に遠ざかり、次第に愚になつて行くとも見らるゝのである。勝鬘經を讀むものは其等の點に就て種々の教訓を與へらるべきである。

此の勝鬘經には大體如何なることが說かれてあるかといふに、先づ全體を三段に分けて見なければならぬ。これは前に維摩經の中でもいつたことであるが、何れの經でも之を大別すれば序分と正宗分と流通分との三つになる。序分といふのは其の經の說かるゝ時の事情を記して、此より貴い教への說き出さるゝ前序とするのである。次に正宗分といふのは卽ち其の經の本論である。全體の中で最も肝要なる部分である。最後に流通分といふのは、斯る貴い教へを能く信解し實行し、又之を世に弘むることが莫大なる功德であることを說いて、汎く之を世の人に奬むるのである。今此の勝鬘經の序分に於ては舍衞國の王なる波斯匿王と其の妃なる末利夫人とが、二人の女たる勝鬘夫人のことに就て語りあひ、「勝鬘は必ず佛の大法を信解し得べき素質をもつて居るから、之を誘導してやりたい」といふので、末利夫人が特に使を其の女に遣はして佛法の貴いことを懇ろに言ひ送られたことが記してある。それに續いて勝鬘夫人が深く佛法を信ずるやうになり、淸淨の心を以て佛を讃歎することがあつて、それで序分は終りとなる。

さて正宗分は古來之を十四章に分つて居る。此の經の終りに於て釋尊が、此の經の特色を十

六擧げて居らるゝ中で、特に重要と見らるゝものが十四ある。之に基いて十四章なる區別が立てられたものと思はれる。今其の名を擧げて見ると次の如くである。

(一)歎佛眞實功德章　先づ勝鬘夫人が言を極めて佛の功德を稱歎する。斯く佛を稱歎するのは卽ち佛法の貴いことが完全に分り、又此の貴い佛法を自ら實行しやうといふ決心のついた證據であるから、釋尊は夫人に對して授記せらるゝのである。授記とは『今のその心をもつて修行を續けて行けば後には必ず佛の境界に到達し得べきこと』を告げらるゝのである。

(二)十大受章　授記を得て大に歡喜したる勝鬘夫人は恭しく佛に對して十大受を說く。十大受とは此より大乘の修行をして行く間に必ず實行しやうと思ふことを十箇條に分つて述べ、其の實行を誓ふのである。

(三)三大願章　次に勝鬘夫人は三大願を說く。三大願とは次第に修行を積んで愈々佛の境界に近づくやうになつた時に、必ず實行しやうと思ふことを三箇條に分つて述べたものである。此の十大受と三大願とは大乘を學ぶ者の必ず心得て置かなければならぬことで、聖德太子御生涯の御事業も全く之に基いてなされたことゝ思はるゝのである。

(四)攝受正法章　前の十大受にも、三大願にも共に『攝受正法』といふことが其の終りに出て居る。攝受正法とは卽ち佛の正法を能く解し能く信じ、又能く之を實行することで、菩薩道といふものは要するに此より外には出ぬのである。故に勝鬘は更に進んで攝受正法といふことの內容に就て委しく語るのである。

(五)一乘章　正法とは如何なるものかといへば卽ち佛の自ら悟られた所を打明けて語られたものに外ならぬので、是れが卽ち大乘である。然るに佛の說きたまへる所には小乘もあり大乘もある。此の關係を明かにすることが佛法を學ぶ者に取つて極めて大切な事である。故に之を比較して各其の特色を明かにし、小乘なるものは要するに大乘に入るべき階梯であつて、小乘を學ぶのみで終つては切角に佛法を學んだかひが無いといふことを明かにし、必ず大乘を學ぶべきことを勸むるのである。此の一乘章は此の經の中心たる觀がある。

(六)無邊聖諦章　諦とは『徹底的に敎へられたこと』をいふのであるが、小乘に於て示されたる聖諦、卽ち佛の所說は未だ眞の聖諦とはいはれぬもので、眞の聖諦は大乘でなければならぬ。大乘の敎へは絕對の眞理を示すもので、此の敎への中に漏るゝものは何物もないのであるから之を無邊の聖諦といひ、其の無邊なる所以を此の段で委しく說くのである。

(七)如來藏章　其の佛の聖諦なるものは何を本として說かれたものであるかといへば、それ

は一切衆生の本來具有する所の如來藏を開發せんが爲である。如來藏とは佛性といひ、若くは眞如といふも同じことである。人々は斯る貴き本性を具へ居ることを自覺せず、煩惱に役せられて毎日を無意味に送つて居る。されば佛は人々をして自ら如來藏を具へて居ることを覺らしめんとして教へを說かるゝのである。此の段に於ては此等の事に就て徹底的に說かれてある。

（八）法身章　其の如來藏が充分に開發せられたものが卽ち佛である。此の事を說くのが卽ち法身章である。

（九）空義隱覆眞實章　されば佛は吾等が本來具有せる貴き本性を充分に開發し、眞に意義ある生活をすることの出來るやうにしたいといふ大慈悲心を以て教へを說かれたのである。此の佛の御本意を充分に了解せぬものが、世間の生活を離れて修行するのを佛法の本義であるかの如くに考へて居る。これは眞實の教への行はるゝのを妨げて居るものである。空義が眞實を隱覆するとはこの事である。

（十）一諦章　佛の說かるゝ所は種々無量であるが、要するに吾等をして正見を得しめんが爲である。正見とは佛の何者なるかを知ることである。吾等凡夫も皆佛性を具へて居る。今は凡夫でも修行を積みさへすれば終には佛と成り得べきものである。されば佛を知るのは卽ち自己の最も貴き性質を知ることである。此の正見を與ふることが佛の種々の說法の歸着點であるから、之を一諦といふのである。

（十一）一依章　佛は四諦を說いて吾等を教へらるゝのである。四諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦である。併しながら要するに滅諦の一に歸するのである。滅とは一切の差別を滅し盡した平等の理をいふので、これこそ凡ての者の依るべき所の最高の教へである。之を稱して一依といふのである。

（十二）顚倒眞實章　顚倒とは凡夫の見である、眞實とは佛菩薩の見である。其の異る所は如來藏を知ると知らざるとに在る。因て此の段に於ては更に繰返して如來藏を知ることの必要を說くのである。

（十三）自性清淨章　自性清淨とは卽ち如來藏のことである。吾等は皆自性清淨なのである。之を自覺せざるが故に種々の惑が起つて來るのである。能く之を自覺して清淨なる自性を遺憾なく開發し得たるものは、卽ち佛の境界に到達し得るのである。以上のことを勝鬘夫人が說き終つて、釋尊は其の能く佛の御心と一致したることを認められ、『如來を信ずる者は是の如き大利益あり』と稱揚せらるゝのである。

(十四)如來眞子章　勝鬘は更に三種の善男子善女人を擧げ、眞に佛の子と稱せらるべきは此の如き者であるといひ、更に邪法を習ぶ者をして其の妄見を翻さしむることの必要を說き、釋尊は之を嘉せられて『其の宜しきを得たり』と仰せられた。以上を以て此の經の正宗分を終るのである。

流通分に入つては先づ勝鬘夫人が釋尊の所を辭して其の國に歸り、夫なる友稱王と共に大乘の敎へを弘むるために力を盡したことが記されてある。それに續いて釋尊が帝釋及び阿難を召して、勝鬘の說ける所を普く世に弘むべきことを命せられ、更に此の敎への特色を十六點に分けて示さるゝので全體が終るのである。

以上は此の經の內容に就ての至て疎雜なる說明であるが、大乘の敎へに就て如何に徹底的に說かれてあるかをほゞ推知することは出來やうと思ふ。大乘の敎へは要するに『佛とはいかなるものであるか』といふことを明かにし、『吾等凡夫もまた佛の境界に到達し得べきものである』ことを明かにし、『然らば吾等は如何にして佛の境界に到達し得べきか』を明かに示すものである。併しながら此の如き敎へが說かれ、また信せらるゝまでには種々の徑路を經なければならぬ。今は宗敎の發達に就て委しく說かうとするのではないが、たゞ其の槪略を述べて見たい。

先づ最初に宗敎が起るのは、人々が自然の力の偉大なることに驚歎するからである。希臘の哲人プラトーンは驚歎によつて哲學の生るゝことを說いて居るが、宗敎も亦さうである。吾等は日月星辰の運行にも、風雨寒暑の變化にも驚歎する。高い山にも濶い海にも驚歎する。さうして日月を動かし風雨を起す者があると考へ、山を護り海を護るものがあると考へ、之を神として崇むるのである。又吾等は人生に死といふことの起るのを經驗して驚き且怖るゝ所から、人の死生を掌るものゝあることをも考へ、之を神として仰ぐのである。斯くして宗敎が世の中に起るのであるが、此の最初の宗敎は多神敎である。而して此の多くの神々は無論人間以上の偉大なる力を有するものと考へらるゝが故に、たゞ之を崇め之を尊ぶのみならず、之に祈つて其の助力を求むる。これは東西洋を通じて何れの國でも同樣である。

今日でも一般に『信心をする』といはれて居る人の大多數は此の程度の宗敎を奉じて居るやうである。併し相當に考への進んだ人は此の程度の信仰では滿足が出來なくなり、更に一段進んだ信仰が起つて來る。廣く世の中を見ると、如何に熱心に神に祈つて福を求め禍を避けんとしても更に幸福にならぬ人も多い。又少しも神に祈るといふやうな事をせずに、案外平和な生活を續けて行かれる人もある。此處に氣のついた者は『徒らに福を祈つても得らるゝものでは

無い』と考へて來る。併しながら平和を求め幸福を欲するのは人情の常であるから、たゞ『求めても得られぬ』と寂しくあきらめて居ることは出來ぬ。茲に於て吉凶禍福に就ての新なる解釋が生ずるのである。それは吉凶禍福を以て神より(支那の古代の人の語によれば天より)與へらるゝ賞罰と解することである。其の行ひの正しい者には賞として幸福が與へられ、其の行ひの正しくない者には罰として不幸が與へらるゝものであると解するのである。例へば

天は高きに處りて卑きに聽く。

といひ、或は

天道は親無し、常に善人に與す。

といひ、或はまた

天道は善に福し淫に禍す。

といふが如きは皆此の思想の現はれたものである。吾が國の諺に『正直の頭に神宿る』といふのも同樣の思想である。

此處まで進んで來ると、もはや普通の多神教ではいかぬことになる。神とか天とかいふものを人間の管督者若くは裁判官のやうに考ふるのであるから、其の管督及び裁判に統一がなければならぬのは勿論である。それ故に一神教か、若くは多くの神々の中に、最上位の一神を認むることになるのである。古のヘブリウ國民は天地の創造者たる唯一の神を認め、此の神が人間の賞罰を掌るものと考へた。舊約全書の創世記に神が大洪水を起して、ノアの一族以外の者を盡く亡ぼしたといふが如きは斯ういふ思想の現はれた適例である。又古代印度に於ては四天王が各分掌して人間の行爲を調べ、之を帝釋天に報告し、帝釋天は之によつて或は幸福を與へ或は禍を降すと信ぜられて居たが、是れは多くの神の中に最高の一神を認めたる一例である。斯く神より與へらるゝ賞罰のあることを信じ、自己の行ひを愼しんで神意に背かぬやうに心懸くるのは、福を神に祈る程度のものに比べて遙かに勝つて居るが、此の種類の信仰にも必ず行き詰りが起るのである。司馬遷は史記の伯夷傳の中に、伯夷が淸廉潔白の人であつた爲に終に首陽山に餓死したことを叙して深く之を悼み、又顏淵の如き賢人が非常に貧しくして且壯齡を以て死したことを擧げ、盜跖の如き大惡人が天壽を全うしたのと比較した末に、

余甚だ惑ふ。もし所謂天道は是なるか非なるか。

といつて居るが、此の如き歎息は隨分世間で能く聞くことである。

世間には方正廉直にして種々の禍にあふ人も決して少くない。又邪曲の行ひを續けながら天

罰をも受けず、安穩に世を渡つて居る者も少くない。斯ういふ例を澤山見ると、天道は是なるか非なるかといふ歎息も出る筈である。勿論申包胥の言に

人衆ければ天に勝つ。天定まれば亦能く人に勝つ。

ともあるが、多くの人は天の定まるまで待つことが出來ぬのである。斯る疑惑の中に於て大なる光明となるのは、生命の不滅といふ教へである。佛教に於ては三世を一貫したる生命に就て教へ、耶蘇教に於ても靈魂の不滅に就て教ゆるのであるが、若し吾等の生命が現世の五十年や六十年で終るものでなく、未來までも永く續くものであると知れば、

善惡の報は影の形に從ふが如し、三世の因果循環して失はず。此生空しく過ぎて後に悔ゆるも及ぶことなし。（涅槃經）

といふが如き教訓を守つて、專ら善根を積んで怠らず、其の報を急がぬといふ心にもなれるわけである。又儒教に於ては個人の生命の不滅といふことは教へぬが、祖先から子孫までを一貫したる生命と考へ、善惡の報が直接に自身に來ずとも、其の子孫に及んで必ず報が來ると教ゆるのである。卽ち易の文言に

積善の家には必ず餘慶有り、積不善の家には必ず餘殃有り。

とあるが如きは其の一例である。

斯くして一應の解決は出來るけれども、更に重大なる問題が未解決のまゝに殘つて居ることを考へなければならぬ。それは『吉凶禍福とは抑も何事を意味するのか』といふことである。言ひ換へて見れば『抑も如何なる人が眞に幸福であるか』といふことである。此の根本の問題に就て深くも考へずに、福を神に祈るのも愚なことであるが、又神より賞として福を與へらるゝのを待つのも愚なことではないか。世間の貧しい人の多くは富む者を羨み、自分にも富の與へらるゝことを求めて『富んだなら幸福であらう』と思つて居る。併しながら富によつて眞の幸福を得て居る人が果して天下に幾人あるか。多くの富む者は其の富によつて却て多くの累ひを增し、多くの苦を受けて居るではないか。賤しい者は多く貴い人を羨んで居るが、身分が貴くなつた爲に周圍の多くの人々に羨まれ妬まれ、其の爲に煩累が多くなつたり、危難に逢つたりする人が非常に多いではないか。雜譬喩經の中に記する所に依れば、昔一人の國王があつて、國を捨てゝ山中に入り茅屋に住んで獨り『樂しい哉』といつて大笑して居た。或人が之を聞いて大に怪しみ『榮華の生活を捨てゝ斯る貧家に獨り居ながら、何の樂しいことがあるか』と尋ねた。王は之に答へて、

我王たりし時憂念する所多かりき。或は隣王の我が國を奪はんことを恐れ、或は人の我が財物を劫取せんことを恐れ、或は人の爲に貪利せられんことを恐れ、又常に臣下の我が財寶を利して反逆時無きことを恐れたり。今我沙門となつて、人の我を貪利する者なし。快み言ふべからず。

と語つたといふが、是れは頗る穿つた話と思はれる。凡そ世の中の劣敗者は輕んぜられ侮らるゝので皆不平であり不滿であるが、優勝者はまた羨まれ妬まれ惡まれて、何時如何なる危害が襲うて來るか分らぬから、常に不安であり勞苦が多いのである。何處にも特に羨むべき境界といふものがあるわけではない。

此處まで考へて來て、初めて眞の宗教なるものが起るのである。其の境遇によつて眞の幸福が與へらるゝものでないと知るならば、萬事は心一つの持ち方によつて定まるといふことに思ひ到り、此の心一つの持ち方に就て工夫するやうになる筈である。貧しくて苦しむ人は富んでも樂むことの出來ぬ人である。貧しくても苦しまぬ人が富めば、初めて其の富によつて世のため人のために盡し、自身も平和の生涯が送り得らるゝのである。彼の維摩詰の如きはまことに其の好き例であつた。孔子は疎食して水を飲み肱を曲げて枕としても、其の中に樂みがあるといつたが、其の數人の弟子と共に陳蔡の間を旅して非常な苦みにあつた時に、弟子等を慰めてやりたいと思つて態々「吾が道非なるか、又何すれぞ此に至れる」といふのを顏淵が側で聞いて

夫子の道は至て大なり、故に天下能く容るゝなし。然りと雖も容れられざるも何ぞ病まん。容れられずして然る後に君子を見る。

といつた。孔子は其の時油然として笑ひ

回や爾をして財多からしめば、吾爾が宰と爲らん。

と戯れたといふ。宋の蘇東坡は之を周公旦が富貴にして苦勞の多かつたのと比較して、

夫子の與に共に貧賤なる所の者皆天下の賢才なり。則ち亦與に此に樂むに足れり。

といつたが、金聖歎は之を評して「妙論我をして慨然たらしむ」といつて居る。要するに心一つの持ち方が根本である。

靜かに吾等自身の心を調べて見ると、種々の惑を以て充されて居るけれども、此の心の奥底には眞實なるものを求め、美しきものを求むる所の貴い性質が潛んで居る。此の事は多くの經論の中に說かれてある。例へば大集經には、

一切衆生の心性は本淨し、煩惱の諸結も染著すること能はず。猶ほ虛空の玷汚すべからざるが如し。

とあり、入楞伽經には

心則ち濁亂を離るれば我心を說きて佛と爲す。

とある。又華嚴經には

心と佛と及び衆生と是の三差別無し。

といつてある。此處に衆生といふのは道も敎へもよくは分らぬ凡夫のことである。卽ち吾等の心は佛とも成り得るものであるが、又凡夫の淺ましい生活に沈倫してしまふこともあり得るので、それ故に敎へといふものが必要なのである。心地觀經に

三界はたゞ心を以て主と爲す。能く心を觀するものは究竟の涅槃を得、觀ずること能はざれば沈淪す。心は猶ほ大地の五穀を生ずるが如く、菩薩及び佛位を生ず。故に心を地と名く。善友に親近し、心地の法を聞き、理の如くに觀じて法の如くに修行し、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

とあるは實に此の事である。究竟の涅槃とは卽ち眞の悟りのこと、阿耨多羅三藐三菩提とは、卽ち佛の具へたまふ所の智慧のことである。斯る貴い智慧をも得らるべき本性が吾等にも本來具はつて居るので、之を稱して佛性といふのである。

佛性は何人にも皆具はつて居るけれども、之を養つて長ぜしめなければ、大なる力となり大なる光りを發することは出來ぬ。譬へば美しい草花の種は小くて黑い粒である。此の小い粒の中から芽も生じ葉も生じ、美しい花も開くのであるが、此の種をいつ迄眺めて居ても、唯だ小くて黑い粒にすぎぬ。此よりして美しい花を咲かせるのには、此の種を軟かなる地の中に埋め、之に淨き水を注ぎ、又之を暖かい日光に當てなければならぬ。眞の宗敎なるものは實に吾等の具有する佛性を育てゝ伸して行くために土となり水となり又日光となるものである。吾等は自己の具有する佛性を開發せしめて、一切の惑を離れ一切の苦を離るゝと共に、又他の多くの人々を誘うて共に其の具有する佛性を開發せしむるやうにしなければならぬのである。華嚴經の中に

願はくば衆生と共に大道を體解して、佛種を紹隆したてまつらん。

といひ、又

願はくば衆生と共に深く經藏に入りて智慧海の如くならしめん。

といひ、更に又

願はくば衆生と共に大衆を統理して、一切無礙ならしめん。

といつてあるのは吾等の共に念願する所でなければならぬ。斯ういふ念願の充分に達せらるゝのは吾等に取つてなほ前途遼遠の感がするけれども、常に努めて止まなければ一歩より一歩とそれに近づいて行けるであらう。

佛も吾等も共に佛性を具へたものであるが、此の佛性を遺憾なく長養開發せしめ、絶大の智慧と無限の慈悲を與へ全く憂ひもなく惱みもなくなられたものが佛である。而して佛は吾等が切角に此の貴い佛性を具へて居ながら之を空しくして、種々の惑に惱まされ種々の苦を受けて居るのを深く哀愍したまふにより、其の久しく苦を冐し難を凌いで覺り得たまへる所を少しも惜まず吾等のために說き示され、吾等を皆佛と同じ道に入らしめんとせらるゝのである。吾等は佛の大恩に深く感謝しなければならぬ。併し吾等自身が佛性を具へて居なかつたならば、如何に貴い敎へが與へられても、其の敎へを解することも信ずることも出來ず、況して之を實行することなどの出來やうわけは無い。されば又吾等は自ら貴い佛性を具へて居ることを深く感謝しなければならぬのである。蕪村の句に

燭の火を燭にうつすや春の夕

といふのがある。大名邸の大廣間か何かで春の夕方に酒宴を催してゐるさまであらう。一本の蠟燭の火を第二第三と順々に他の蠟燭にうつして、やがて廣間全體が眞晝のやうに明るくなり、そこで種々の藝なども演ぜらるゝのである。佛の敎への世に弘まるのもそれと同じ有樣と思はれる。佛の自ら覺りたまへる所を其の貴い敎へを通して吾等に傳へられ、吾等が之によつて修行して自ら本來具有する佛性を次第に長養開發せしめ、心に大なる悅びを感ずるやうになれば、世間に未だ此の如き敎へを知らず、此の如き悅びを知らぬ者の多いのに對して、深く哀愍の情を起す。それで此の貴い敎へを世に弘め、此の深き悅びを凡ての人々に頒つが爲に力を盡すことになる。斯くして吾も人も共に惑を除き苦を離れて、末には此の地上が光り輝いたる淨土となるべきである。

さらば一切衆生が皆佛性を具へてゐるのは何故であるか。此の地上に美しい淨土のやがて實現することを吾等が理想し得るのは何故であるか、更に深く考へて來ると、斯んな貴いことがたゞ偶然にあり得るとは思へぬのである。それで結局世の有らゆるものが一の洪大無邊なる

力に護られて存在するのであるといふことを信じなければならぬやうになるのである。孔子が天といつたのも此の唯一絶對の力をシカと認めたに外ならぬであらう。昔の哲人プラトーンや近世の哲人カントが唯一絶對の神といつたのも亦此の事であらう。或る學者が宇宙の本體といひ、或る學者が絶對と名けたのも、亦此の力の現はれたる種々の事實を深く研究した結果に外ならぬであらう。科學者がエネルギーと稱するのも亦其の現はれたる一面のことであらう。佛教に於ては三世に亘つて十方世界に數限りなき佛の出現せらるゝことを說くけれども、それは唯一絶對の佛が其の時、其の所に應じて種々に身を現せらるゝに外ならぬものと知るべきである。此の唯一の佛を或は毘盧遮那（びるしやな）と呼び或は盧遮那（るしやな）と呼ぶのであるが、毘盧遮那とは『遍一切處』といふ意味、盧遮那とは『淨滿』といふ意味である。吾等は今之を『本佛』と呼ぶのであるが、釋尊が此の娑婆世界に御出現になつたのも此の本佛が吾等を憐み、吾等を教へ導かんために人の身を取つて現はれたまへるものと考ふべきである。

今日では佛教の中にも種々の宗派が對立し、又佛教以外に耶蘇教もありマホメット教もあり、儒教も道教もあるので、やゝともすれば其の間に爭ひが起り、皆自分の奉ずる教へを眞の教へと思ひ、他の教へを僞りの教へと評し去る風がある。併し此の事に就て互ひに深く考へて見なければならぬ。謂はれなき爭ひはつまらぬものであるが、さりとて良い加減に妥協して置くといふ考へも間違つて居る。『人は一時に二人の主人に事ふることは出來ぬ』といふはまことに正しい語である。信仰するといふ以上は、其の信仰の中心は一つでなければならぬ。勿論其の信仰を助くるために多くの人の說を研究するのは良いことであるが、自ら信ずる所は必ず何れかの一つでなければならぬ。自分などは孔子の說も老子の說も又耶蘇教のバイブル等も常に喜んで讀むけれども、何を信じて居るかと問はれたら明かに大乘佛教を信じて居ると答へる。其の他の答へをすれば實に自ら欺くことになる。併し自分は耶蘇教や儒教や道教が僞りの教へであるといふやうな考へはもたぬ。自分は大乘佛教が完全なる教へであつて、他の教へは大乘佛教に比べて足らぬ所のあるものと思つて居るのである。孔子は『天が吾をして王道を明かにせしめんが爲に此の世に下したのである』といふことをシッカリと信じて教へを說いたにちがひ無い。耶蘇は『神が此の地上の凡ての者を救はんがために吾を下したのである』と深く信じて居たにちがひ無い。斯る眞實の心が現はれて其の教へとなつたればこそ、何千年といふ久しい間多くの人の心を支配する力があつたのである。僞りの教へが何千年も世間に勢力をもつて居たなどゝ思ふのは、人間を侮辱するの甚しきものである。孔子のいふ所の天も、耶蘇のいふ所の

神も、吾等の仰ぎ見る所の本佛も同じものであるに違ひない。誰でも眞に利害得心を超越した
る心をもつて、靜かに究め深く思へば必ず唯一絶對のものゝ實在を知るべきである。

唯だ其の唯一絶對なるものゝ性質作用等に就ての考察若くは說明に多少の差があるので、佛
教とか儒教とか道教とか耶蘇教とかいふものが對立しなければならぬのは已むを得ぬことであ
る。併しながら之を唯だ已むを得ぬ事として冷やかに視て居ることは出來ぬ。吾等は其等の種
々の教への中に就て、最も正しく且完全なりと信ずるものを擇んで、吾等の心身一切の作用を
之に托すべきである。而して自ら完全なりと信ずる教へを奉じて、之に深き悅びを感ずる以上
は、未だ之を知らぬ多くの人々に對して哀愍の念を生ずるのは自然のことである。之を深く哀
愍するのあまりに、『君の信ずる所の教へは完全なものでは無い。それよりも完全なものがある
から、君の信仰を改めて此の完全なものを信ずるやうにせられよ』と熱心に之に勸むるのが卽
ち佛教でいふ所の折伏である。されば折伏は階段を上つて堂上に達した人が、いつ迄も階段の
中途に立つて居る人に向つて『何故そんな所に立止つて居るのか。早く此處まで上つて來るが
よい』といふのと同じ心持なのである。其の人を階段の下へ推し落さうとするのではない。其
の劇烈なる呵責の聲は美しい慈悲心の現はれたものなのである。

併しながら各種の宗教が對立して居ると其の間に鬪爭的の氣分が強くなるのは事實上避け得
られぬことである。それは如何に教へを受けても、煩惱を掃ひ去ることの出來ぬものが多くあ
るためといふより外はない。殊に佛教に於ては執著を固く戒めてあるのであるが、佛教各派の
中に極めて强い執著心を以て、其の一宗一派の勢力擴張のみを謀り、他宗他派に於て教ゆる所
は一切僞りの教へであるといつて、嚴しく之を排擊する習はしがあるのは眞に歎ずべき次第で
ある。甚しきに至つては信仰の衝突の爲に戰爭が起り、多くの人が相殺戮するといふ淺ましい
例さへ屢々ある。斯くては神意にも佛意にも一致しやうわけが無い。吾等の理想をいへば全世
界の人が唯一つの教へに歸依するやうにならなければならぬ。是れは決して空想ではない。絶
對の眞理が二通りも三通りもあらう筈はないから、如何に多くの教へがあつても終には一に歸
すべきである。併しながら此の理想の實現せらるゝまでにはなほ多くの曲折を經なければなる
まい。今日のところ種々の宗教が對立して居るのは已むを得ぬことであらうから、吾等は自ら
一つの教へを深く信ずると共に他の教へを奉ずる者をも決して輕んぜず、又敵とせず、自分の
誠心の續く限り之を勸めて、やがては自分と同じ教へを奉ずるやうにしてやりたいといふ態度
で行くべきであらうと思ふ。唐の妙樂大師は

禮樂前に駈せて眞道後に啓く。

といつた。禮樂は儒教に於て教へらるゝ所である。佛教が支那に入る前に久しく儒教が行はれて、禮樂を教へて居たのであるが、其の禮樂の教へが佛教を學ぶべき準備的の役をして居たので、佛教が行はれ易かつたとの意である。眞道とは卽ち佛教のことである。妙樂大師は斯く儒教の價値を認めて、而も儒教を學べる者に對して更に深入りして佛教を學ぶべきことを勸めたのである。吾等も之を範として世の人に接すべきであらう。尙ほ吾等佛教を學ぶ者として特に心得て居なければならぬのは、佛教を常に佛の御精神の通りに解し且信ずることである。世間では『佛教』といふ名を冒しながら、佛の御精神と相背くやうなことが隨分說かれて居るのであるから、此處に充分注意しなければならぬ。

梵網經の中には大乘戒五十八種が說かれてあるが、其の最後に自破內法戒といふのがある。是れは佛弟子たる者が佛の御心と一致せぬやうな行ひをして、內部よりして佛法の衰微する原因を作ることを嚴しく戒められたのである。卽ち其の文には

師子身中の蟲の自ら師子の肉を食むが如し。外道天魔の能く破壞するにあらず。

とある。佛教は何れの教へに比べても遙かに優れて居るものであるから、他の攻擊によつて破壞せらるゝことは斷じて無い。唯だ恐るべきは佛教內部に佛の御心に違背するやうな者が多くなつて佛教を衰微せしむることである。獅子は最も勇猛であるから、如何なる獸も恐れて近づかぬけれども、獅子の身中の蟲が獅子の肉を食むのである。釋尊はそれを佛弟子の不心得なものに譬へられたのである。佛教は前から段々述べて來た通り、最も高い程度の宗教であつて、其の所詮とする所は佛の教へによつて吾等の心を根本から立て直し、淨い心になつた人と人とが集つて此の地上を悉く淨土にすることであるが、斯る貴い佛教が其の精神を失つて、極めて劣等なる信仰となつて世間に流布して居る例を屢々見るのは、眞に哀しむべきことである。釋尊も常に戒めて居らるゝ通り、佛の教へを世に弘むるといふことは極めて大任である。此の大任を果すためには絕えず自ら省みて、佛の御心に背かぬやうに努めなければならぬのである。然るに斯る大任に當つて居る人の中に往々にして名利を求むるの念が强くて、自分は佛の化導を贊くべき身であることを忘るゝ者がある。既に名を求め利を求むることに專になれば、世間多數の人の意を迎へて說くことが主になつてしまふ。佛の御心に一致するかせぬかを顧みるよりも、世間の人氣に投じ得るか得ぬかを主として顧慮するやうになる。

然るに世間で『信心をする』といはれて居る人の大多數は專ら福を祈るがために信心をする

のであつて、自己の心の中の煩惱を掃はんが爲などゝいふ考へではない。或はそれよりも一段進んだ程度のものでも、罰を恐れて行ひを慎むといふ程度より以上に出るものは甚だ稀である。此等の程度の者を漸次に教へ導いて、眞の佛法に歸依せしめなければならぬのであるが、それは非常に困難なことである。それには非常なる努力を要する。時としては正しい教へを說いた爲に聽く人の感情を害し、之がために種々の迫害を受くることさへある。若し世間の人の意を迎へて、彼等の喜びさうな事を說いて居れば迫害などは全く受けず、利益を得たり名聲を博したりすることが出來る。此の如き事情の下に佛教が次第に墮落して行くのは是非もないことである。法華經の勸持品に

利養に貪著するが故に白衣のために法を說きて世に恭敬せらる。

とある通り、いつの時にも斯ういふ僧が多いのである。されば今日でも佛に對して一身一家の繁昌を祈ることが頻りに行はれて居るが、これは宗教發達の順序からいへば其の初期に屬するものである。又今日でも一部分の人は神罰とか佛罰とかを恐れて身を慎むのであるが、これは宗教として發達の第二期に屬するものである。所詮此等の程度の信仰では、人生を淨化すべき力などは得られぬのである。

又一概に佛教といつても、佛教の中には小乘もあり大乘もあり、方便の教へもあり眞實の教へもあることを忘れてはならぬ。釋尊御一代に於て說かれた所は千差萬別であるけれども、釋尊は人々が其の淺い教へを聽いて、纔かに凡夫の列を離れ得たのでは決して滿足せられず、人々が皆淺きは卽ち深きに入るの始めであると知つて、益々修行を勵み、後には皆共に佛の境界に到達すべき理想をもつやうになることを望まれたのである。法華經の法師品には

譬へば人有りて渴乏して水を須ゐんとして、彼の高原に於て穿鑿して之を求むるに、猶ほ乾ける土を見ては水尙ほ遠しと知る。功を施すこと已まずして轉た濕へる土を見、遂に漸く泥に至りぬれば、其心決定して水必ず近しと知るが如く、菩薩も亦復た是の如し。

とある。若し高原を掘つて乾ける土を見た時に、水がなほ遠いと思つて、更に深く掘ることを止めてしまへば結局水を得ること無くして終るのである。小乘の教へを以て足れりとする者が終に佛の境界に到達し得られぬのもそれと同じことである。『功を施すこと已まず』といふのは小乘を以て足れりとせずして、更に進んで大乘の教へを學ぶのに譬へたので、『漸く泥に至る』

といふのは所謂菩薩行が段々と出來るやうになつたのに譬へたのである。『水必ず近しと知る』といふのは卽ち自分等も努めてやまなければ、後には必ず佛の境界に到達することが出來やうといふ自信を得たことである。此の自信を得てこそ佛も『切角敎へたかひがある』と悅ばるべきである。それは法華經の方便品に

一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。

とあるによつて明かである。されば佛敎に就て學ばんとするものは佛の御心の在る所をよく知つて、大乘の敎へを體得するまでは努力を止めまいといふ覺悟をもつべきである。

併しながら是れは決して容易の業ではない。科學や哲學とはちがつて、宗敎は實行を旨とするものである。如何に多くの事を知つても、之を其の身に行ふこと無ければ、知つたかひの無いわけである。

多聞ありと雖も若し修行せざれば不聞と等し。人の食を說くも終に飽くこと能はざるが如し。（楞嚴經）

とあるは誰も皆心得なければならぬことである。然るに佛の大乘の敎へは佛の御心を打込んで說かれたものであるから、たとへ其の一言一句と雖も深く之を味へば味ふほど極めて深遠なる意義を含んで居る。之を能く解し能く信じ、又能く之を吾が身に行ふことは實に容易でない。併しながら如何に困難でも吾等は決して此の困難を厭ふべきではない。吾等は之によつて未來永劫の苦を離れ平和安樂の生を享くべきものであるから、吾等は喜んで有らゆる努力を積むべきである。唯だ深く戒むべきは大乘經典の一部分を讀んで、僅かに其の字句に通じたのみで既に凡夫を離れたもの丶如くに自ら許すことである。

自ら眞の道を行ずと謂ひて人間を輕賤する者。（勸持品）

といふは眞に適切なる批評である。日々に大乘の經典を讀誦して自ら菩薩道を行ずるものと稱しながら、實際の行ひに於ては無智無學の者に劣れる人も決して少くない。それでは千萬卷の書を讀んでも何のかひも無いことである。吾等は常に高い理想をもつて、而も自己の凡夫であることを忘れず、決して急がず又怠らず一歩より一歩と佛の境界へ向つて進んで行くやうに努力すべきである。此の勝鬘經に於て敎へらるゝ所は此等の點に就て、まことに懇切周到である。此より本文に就て順を追うて說明を加へて行かう。

勝鬘獅子吼一乘大方便方廣經

勝鬘夫人は阿踰闍國の國王なる友稱王の妃であつて、其の父母は舍衞國の波斯匿王及び末利

夫人である。此の舍衞といふは元來都の名であるが、國の名ともなつたのである。此の國の元の名は憍薩羅といふのであるが、南方にも同じ名の國があつたので、それと區別するために此の國は專ら舍衞を以て呼ばるゝやうになつた。舍衞とは『聞者』とか『豐德』とかいふ意である。波斯匿王といふのは梵授王の子で、波斯匿とは勝光といふ意味である。之に就ては次のやうな事が傳はつて居る。

梵授王人に告げて曰く、我が子生るゝ時光明殊勝にして普く世間を照せり。應に我が子に名を與へて勝光といふべしと。（毘那耶雜事）

又譯して『明光』とも『和悅』ともいふ。此の王は釋尊と同日に生れたといふことであるが、後に至つて釋尊に歸依し、佛法を世に弘むるためには大に力を盡した。又末利夫人はもと微賤の人で末利園を守つて居た。末利とは鬘の意である。華鬘を作るべき花を培養する所であるから末利園と名けられたのである。一日釋尊が城中に入つて食を乞はれた時、夫人は（其の時の名は黃頭といふのであつた。）佛の端嚴なる相好を見て信心を起し、食を佛に奉つた。其の後幾くもなく波斯匿王は遊獵に出たが、あまりの暑さに避易して彼の末利園に暫く休息した。その時に黃頭女は王を凉しい所へ案內し、懇ろに應接した。王は其の言語擧動によつて極めて聰明なる婦人であることを知り、迎へ入れて夫人と爲し、末利園に居た緣によつて末利夫人と稱せしめた。夫人は是れ全く佛に供養したる功德であると知り、此より夫王と共に佛法の流布のために常に力を盡した。此の夫婦の間に生れた女兒は母の名に因んで勝鬘と名けられたが、姿も至て美しく心もまた美しかつたので、望まれて阿踰闍國の友稱王の妃となつた。阿踰闍とは『不可戰』といふ義である。其の國はいつも能く治まつて國民能く一致し、又城壁も至て堅固であつて、之を攻むるとも勝つべき見込みがないので、周圍の國々の人が之を稱して『不可戰』といつたといふことである。此の勝鬘夫人が佛前に於て其の信ずる所を說いたのが本經の重要なる部分となつて居る。以下本文をあげて、次に其の字句に略解を施し、又各段の大意を說くこと略ぼ前の維摩經の例に依るつもりである。但し今回よりは漢文の經文を略し、和譯文のみを出すことにした。

是の如く我聞きにき。一時佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住したまひき。時に波斯匿王及び末利夫人、法を信ずること未だ久しからず、共に相謂ひて曰く、勝鬘夫人は是れ我が女なれども、聰慧利根通敏にして悟り易し。若し佛を見たてまつらば必ず速かに法を解して心に疑ひ無きことを得ん。宜しく時に信を遣は

して其の道意を發さしむべしと。夫人白して言さく今正に是れ時なりと。王及び夫人勝鬘に書を與へ、略して如來の無量の功德を讃し、卽ち內人の旃提羅と名くるものを遣はす。使人書を奉じて阿踰闍に至り其の宮內に入り、敬みて勝鬘に授けたてまつる。勝鬘書を得て歡喜し頂受し、讀誦し受持し、希有の心を生じ、旃提羅に向ひて偈を說きて言く、

我聞く佛の音聲は世に未曾存なる所なりと。言ふ所眞實ならば、應に供養を修すべし。仰ぎて惟みれば世尊は普く世間の爲に出たまふ。亦應に哀愍を垂れて、必ず我をして見ることを得しめたまふべしと。

卽ち此の念を生ずる時、佛空中に於て現じて普く淨光明を放ち、無比身を顯示したまふ。勝鬘及び眷屬、頭面に足に接して禮し、咸く淸淨の心を以て佛の實の功德を歎じたてまつる。

此の一段が卽ち序分である。此の段に於ては波斯匿王と末利夫人とが、其の女なる勝鬘夫人に佛の貴いことを知らせ、信心を起さするために特に使を遣はし、勝鬘夫人が父母の敎へによつて信心を起し、佛を禮拜して其の功德を讃歎し奉ることが述べられてある。此の段に於て特に貴く感ぜらるゝのは波斯匿王と末利夫人との其の女に對する慈愛の念である。凡そ人の親として其の子を愛せぬものはない。併しながら單に其の子を愛して之を養育するといふだけならば、如何なる動物も皆之を實行せぬものはない。人の親としての道は單に其の子を愛するといふだけで無く、其の子を能く敎へ導いて、眞に意義ある生活を送らしむることを主としなければならぬ。司馬溫公の勸學の歌に

子を養ひて敎へざるは父の過なり、訓導して嚴ならざるは師の惰なり。父敎へ師嚴にして兩ながら外なきも、學問成ること無きは子の罪なり。

とあるは至て平凡の語であるが眞實のことをいつてある。佛敎に於ては勿論人の親として其の子を敎へなければならぬといふことが丁寧に說かれてある。其の一例を擧ぐれば六方禮經には

父母の子を視るに五事あり。一には惡を去りて善に就かしむ。二には書疏を敎ゆ。三には經戒を持たしむ。四には婦を娶らしむ。五には家中の所有を給與す。

とある。斯く數ヶ條の事が擧げられてある中に於て、特に重きを置かれてあるのは之に敎ゆるといふことである。子を敎へて淨く美はしき生涯を送らせてこそ、眞に慈悲心深き親といふべ

きである。此の波斯匿王と夫人とは佛法に歸依してまだ歳月が淺いといふのに、既に佛に對して深き歸依の念を生じ、之を其の女に傳へて其の女をして同じ信に入らしめんとしたのは、まことに模範的なる父母と稱すべきものである。此の父母の情によつて勝鬘夫人が大乘の教へに歸依し、其の說いた所が此の勝鬘經となつて、永く後世の吾等にまで貴い教へを遺して居る。これ一に波斯匿王と夫人との賜といはなければならぬ。

○祇樹給孤獨園　祇園精舍として知られて居る。此處はもと波斯匿王の子なる祇陀太子の所有の地で、ことに美しい樹木が多かつた。然るに舍衞國に須達長者といふ富豪があつて、仁愛の心あつく、常に多くの孤獨の者を扶養することに力を用ゐたので、世間で之を給孤獨長者といつて尊敬して居た。此の長者が釋尊に歸依し、精舍を建てゝ釋尊を請ぜんことを思ひ立ち、祇陀太子の所有の園林をゆづり受けて所謂祇園精舍を建立した。因て世間では此の園を呼ぶに太子の名と長者の名とを併せて祇樹給孤獨園といつた。此の事に關して一條の美談があるが、それは後に至つて別に說かう。○法を信ずること未だ久しからず　釋尊に歸依してから未だ日が淺いのである。併しながら其の女の勝鬘に非常に大なる感化を與へたのを以て見ると、短い間でも既に徹底したる信仰をもつて居たに違ひない。○聰慧利根　智慧明かにして能く善惡正邪を聽き分けて違はぬのを聰慧といふ。敎へを聽いて能く其の意の在る所を知り、其の理を明かにするのを利根といふのである。○通敏にして悟り易し　通敏といふ意は聖德太子の義疏に『表を聞きて裏に達する之を通といひ、善く聽くの致す所照了深明なるを敏といふ』とあるので能く悉されて居る。勝鬘夫人は此の如くに優れたる天分をもつて居るから、必ず佛法の深意を悟ることが出來やうと父母共に考へられたのである。○心に疑ひ無き　佛の敎へを信じて疑ひが無ければ必ず之を其の身に實行し、又他の多くの人を敎化することも出來るに違ひ無い。○信を遣はし　書信をもつて勝鬘に信心を勸めやうといふのである。○略して如來無量の功德を讃し　略してといふも決して疎略の意ではない。佛の功德を稱ふるためには如何なる語を用ゆるとも足らぬのである。されば此の書には父母が誠心を打込んで書かれたにちがひは無いけれども、なほ言ひ盡せぬから『略して』といふのである。○讀誦し受持し　讀とは文に就いて讀むこと、誦とは文を離れて暗誦することである。讀誦すること漸く熟して、其の深意が能く解せらるゝのである。受とは心に深く之を信ずることである。持とは其の信を持ち續けて決して忘失せぬことである。受持の中よりして實行の力が生み出さるゝので、受持は凡ての善行の本といふべきである。○希有の心　未だ曾て經驗せざる深き悅びを感じたのである。此の悅び

は佛を正しく知つた爲の悅びであるから、他に之と比すべきものは無い。○佛の音聲は　佛の教へは聲を以て說かるゝが故に佛の音聲といつたのであるが、實は音聲のことでは無く佛の說かるゝ教への內容をいふのである。○世に未曾有なる所　唯だ佛のみが絕對の理を悟られたのである。故に世間に如何ほど多くの教へがあつても、佛教に比すべきものは無いのである。○供養を修す　花を供へるとか香を焚くとかいふのは形に現はれたる供養である。其の教へを實行するのが心の供養である。之を自ら實行し又之を普く世の人に勸むるのが最上の供養であつて、之を法供養といふ。其の委しいことは維摩經の終りの方に說かれてある。○普く世間の爲に　世間には善人も惡人もあり、智者も愚者もある。佛は其等の凡ての者を敎化せんが爲に世に出られたのであつて、凡そ世間の一人として佛の化導を受けられぬものといふのは無いのである。而して何人も皆佛性を具有するのであるから、佛の教へを信じて修行を積みさへすれば、遲速の差はあつても必ず共に佛の境界に近づき得らるべきである。○哀愍を垂れて　勝鬘はまだ年若き女人であつて、且佛の貴いことを今知つたばかりであるが、佛は決して自分を隔てはなさるまいといふ自信を得たのである。○空中に於て　佛の姿が空中に見えたといふのは佛が平等の心を以て一切衆生に接したまふことを表はすのである。空は何物をも蔽はぬといふことは無い、佛も亦その如くである。○無比身を顯示　佛の具へたまへる德が自ら其の形にあらはれたものが所謂三十二相である。何人も佛の如き端嚴の姿を有するものは無い。○頭面に足に接し　自分の頭を他の人の足元につけて禮するのが古代の印度に於ける最敬禮である。

勝鬘夫人が釋尊に歸依したのは釋尊が祇園精舍に居たまへる時のことである。祇園とは祇陀太子の所有せる園林のことであるが、そこに精舍が建立せられたのである。精舍とは佛が教へを說きたまふ所をいふので、卽ち今いふ寺院のことであるが、此處は精心の徒の集る所であるから精舍といふのである。精心とは一切世間の名利の念をすて、專ら教へを受くることのみを念とすることである。慧苑音義に

舍の精妙なるを以て名けて精舍と爲すにあらず、其の精錬なる行者の居る所なるを以ての故に之を精舍といふなり。

と說明してある。釋尊は印度の各地を巡つて說法せられたから、處々に精舍があつたのであるが、其の殊に有名なものが五ヶ處あつて、世に之を五精舍といふ。其の中に於ても此の祇園精舍は普く世に知られて居る。此の精舍の建立は須達長者の發願に依るものであるが、長者は至て慈悲心の深い人で平生から多くの人に敬愛せられて居た。此の長者は釋尊に歸依するに及ん

で、何とかして舍衞城に一の精舍を建立し、釋尊を請じて說法を願ひ一般の人に聽聞させたいとの望みを起し、之を御弟子の舍利弗に相談した。舍利弗は大に其の志を嘉し、是非その事を實現するやうにと奬勵した。長者は舍利弗に其の精舍を建立するのに適當な地を選定することを請うた。舍利弗は舍衞城の內外を具さに觀察した末に、祇陀太子の所有の園林を最も適當な所であると考へ、

祇陀の園林は近からず遠からず、多く泉池に饒にして好林樹あり、花果鬱茂し清淨閑豫なり。此の處は最勝なり、精舍を安立すべし。

と答へた。長者は大に喜んで祇陀太子に其の園林を讓り受けることを交涉したが、太子は之を讓り渡すことを惜んで『若し其の地面に滿つるだけの黃金を敷くならば、讓つてもよい』といつた。長者は直ちに其の庫を開いて黃金を取り出し、彼の園林に敷き始めた。太子は大に驚いて『あれは戲れにいつたのである』といつたが長者は肯かず『太子は將來王位を嗣ぐべき方である、王者には戲言などのあるべきものでは無い』と、黃金を續いて運ばせ、園林は黃金を以て埋めらるべき有樣であつた。太子は之を見て長者の熱心に感じ入ると共に、此の長者をして斯くまで熱心にならしめた釋尊の御德の洪大なることに感激した。太子は長者に向つて『モウ此より以上に黃金を運ぶには及ばぬ。今まで運んだ黃金を以て此の園林の全部をゆづり渡さう』といひ、其の佛法を弘むることに熱心なのを心から稱讃した。長者は太子の好意を深く感謝し、其處に精舍を建立して釋尊を請じた。舍衞城の人々は長者の志の篤きに感ずると共に、また太子が長者を助けて其の大善事を成さしめたのを德として、此の園林を稱して祇樹給孤獨園といつた。此の須達長者の如きは眞に佛敎信者の範として永く仰がるべき人である。

法を說き法を弘むることは卽ち佛の化導を贊くる所以であるから、之に勝れる聖業はないわけであるが、說くべき機會が與へられなければ說くことの出來るものではない。故に法を說くべき機會を作り、多くの人に勸めて法を聽かしむる功德も亦莫大なるものといはなければならぬ。法華經の序品に釋尊の御身より光りを發して東方萬八千の世界を照したといふことがある。大衆は此の奇瑞が何を意味するかを知らず唯だ思ひ惑ふばかりであつた。因て彌勒菩薩は衆に代つて之を文殊菩薩に問ひ、文殊は過去の世の日月燈明佛が斯る奇瑞を示して後に法華經を說かれたことを語り、

是を以て知んぬ今の佛も法華經を說かんと欲したまふならん。今の相は本の瑞の如し、是れ諸佛の方便なり。今の佛の光明を放ちたまふも實相の義を助發せ

んとなり。諸人今當に知るべし、合掌して一心に待ちたてまつれ。佛當に法雨を雨らして道を求むる者を充足したまふべし。

といつた。玆に於て諸人は非常なる期待をもつて釋尊の說法を待ち、釋尊は安詳として起つて法華經を說かれたのである。文殊が斯くして大衆に注意を與へ、釋尊の貴い說法を聽聞すべき用意を爲さしめたのはまことに善い事であるが、若し彌勒が問はなかつたならば文殊も答へなかつたであらう。故に天台大師は此の一段を說明して『彌勒は慈悲のすぐれた人であるから、衆の爲に疑ひを決せんとして文殊に問うた。文殊は智慧のすぐれた人であるから、能く佛の御心を忖度して之に答へた。彌勒と文殊との功德は同等である』といつた。まことに佛の正法が世に弘まる爲には、種々の人々が種々の方面に於て力を盡し功德を積むことが必要である。佛のことは申すに及ばぬが、佛の化導を贊くるには文殊や彌勒や舍利弗迦葉の如き人も必要であるが、又須達長者や波斯匿王の如き人々も必要である。吾等は各その分に應じて力を盡すべきである。

次に波斯匿王夫妻が其の愛女たる勝鬘を導いて佛法に歸依せしめたことも、まことに吾等の範として仰ぐべき行ひである。此の夫妻は佛に歸依してよりまだ日が淺いといふことであるが、佛を信ずること既に極めて深く、隨つて佛の恩に感ずることも既に極めて深かつたと思はれる。智度論には

佛法は行を貴び不行を貴ばず。但だ能く勤行すれば縱ひまた寡聞なるも亦先ちて道に入る。

とあるが、此の二人の如きも正しく其の人であつたであらう。既に佛恩に感ずる所が深ければ如何にもして此の恩に報せんことを思ふべきであるが、佛恩に報ずるの途は佛の正法を世に弘むることに力を盡すより外に何もないのである。佛はたゞ一切衆生を敎化して共に凡夫の境界を離れ、共に佛の境界に近づかしめんことをのみ念とせらるゝのであるから、佛法の世に弘まることに貢獻するのが佛の最も悅びたまふ事であるに違ひない。故に釋尊は御入滅に際して

我が滅後に諸の弟子相傳へて、自利利人の法を行すれば、如來の法身は常に在りて滅せざるなり。（佛遺敎經）

と遺命せられた。自利とは自ら佛法の正しき意義を知り、之を心に信じ之を身に行つて一步一步と佛の境界に近づくことに努むるのである。利人とは多くの人に此の貴い法を傳へて、之を信ぜしめ又之を其の身に實行せしむることである。自利利人の法が卽ち所謂菩薩道である。菩

薩道を行ずるものが多くさへなれば、佛の御力が永く不滅なのであるから、佛はそれで滿足せらるゝわけである。

されば佛法を信ずる者は共に『一切衆生をして盡く佛法に歸依せしむること』を理想として進むべきで、法華經に

願はくば此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん。

とは實に此の意を表はしたる語である。併しながら物事には皆順序がある。近きよりして遠きに及ぼすべきである。吾が家を齊ふることを得ず、吾が子を敎ゆることを得ずして天下國家に貢獻せんとしても、それは到底出來ることではない。孟子は

人恒の言有り、皆曰く天下國家と。天下の本は國に在り、國の本は家に在り、家の本は身に在り。

といつたが、佛敎に於ても常に同じやうな精神で敎へが說かれてある。其の一例を擧げて見れば優婆塞戒經には

先づ父母に供養すること能はず、又妻子を惱まして以て困苦して布施するものは假名の施にして義の施と名けず。斯の如き施は憐愍なく報恩を知らずと名く。

とある。親子となり兄弟となり夫婦となるのは唯だ此の世だけの緣ではない、久しい前の世からの緣が熟して斯る特別の關係が結ばれたものと見なければならぬ。斯る特別の關係の結ばれたる者同士は、普通一般の世間の人よりも特に深き恩愛を互ひに感じなければならぬ。

地より珍寶を積みて上二十八天に至り、悉く以て人に施すとも、父母に供養するには如かず。

と末羅末經にあるのも此の意に外ならぬのである。平等の慈悲心を以て一切の人に接しなければならぬのは勿論であるが、平等といふ中に前後遠近の別は立てられなければならぬ。大學の中に

其の家敎ふ可からずして能く人を敎ふる者は之れ無し。故に君子は家を出ずして敎へを國に成す。孝は君に事ふる所以なり、弟は長に事ふる所以なり、慈は衆を使ふ所以なり。

とあるが佛敎に於ても精神は同じことである。波斯匿王と其の夫人とが先づ其の女を敎へて佛に歸依せしめ、其の女たる勝鬘が其の夫たる友稱王を勸めて同じく佛に歸依せしめ、然る後に國中の者が皆佛に歸依するやうになつたといふは自然の順序といふべきである。波斯匿王夫妻

は人の親として能く其の道を盡したものであると共に、佛弟子としてまた能く其の道を盡した者と稱せらるべきである。

又勝鬘夫人が其の父母の教へに從つて、佛に歸依するやうになつたのも眞に感ずべきことである。長阿含經に人の子たるの道を說いて五事を數へた中に

父母の爲す所に恭順して逆はず。

とある。又善生子經にも子たるの道を五つに分つて擧げた中に、

誡を解し供養を爲し、父母を歡ばしむべし。

とあるが、勝鬘の行ひは眞に此等の教訓に能く一致したるものといふべきである。但し如何に父母の心に違ふまいと思つても、自身に法を思ひ道を重んずる念が篤くなければ、斯くまで深く佛に歸依することは出來なかつたであらう。勝鬘は流石に父母の正しい性質を受けて、未だ佛法に歸依せざりし以前より直く正しき本性を具へて居たので、此の良き機會に於て直ちに賴もしい佛弟子となることが出來たのである。法華經の壽量品には眞に佛弟子と稱せらるべき人について

衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず

とあるが、勝鬘の如きは正しく其の人であつた。其の說いた所が永く吾等に大なる利益を與ふることも更に不思議では無い

如來の妙色身は世間に與に等しきもの無し。無比にして不思議なり。是故に今敬禮したてまつる。如來の色は無盡なり、智慧も亦復た然り。一切の法は常住なり。是故に我歸依したてまつる。心の過惡と及び身の四種とを降伏して已に難伏地に到りたまへり。是故に法王を禮したてまつる。一切の爾炎の智慧自在にして、一切の法を攝持したまふことを知る。是故に今敬禮したてまつる。過稱量を敬禮し、無譬類を敬禮し、無邊法を敬禮し、難思議を敬禮したてまつる。哀愍して我を覆護し、法種をして增長せしめ、此の世及び後生、願はくは佛常に攝受したまへ。我久しく汝を安立す。前世已に開覺せり、今復た汝を攝受す、未來生も亦然り。我已に功德を作しき、現世及び餘世是の如き衆の善法あり。唯だ願はくは攝受せられんことをと。

爾の時に勝鬘及び諸〳〵の眷屬、頭面に佛を禮したてまつる。佛衆中に於て卽ち爲に授記したまはく、汝如來の眞實の功德を歎ず。此の善根を以て、當に無量阿僧祇劫に於て、天人の中に自在王と爲るべし。一切の生處に常に我を見ることを得て、現前に讃歎せんこと今の如く異ることなからん。當に復た無量阿僧祇の佛を供養し、二萬阿僧祇劫を過ぎて當に佛と作ることを得て、普光如來應正遍知と號すべし。彼の佛の國土には諸〳〵の惡趣、老病衰惱、不適意の苦無く、亦不善惡業道の名無けん。彼の國の衆生は色力壽命、五欲の衆具皆悉く快樂にして、他化自在の諸天に勝らん。彼の諸〳〵の衆生は純一大乘にして諸有の善根を修習する衆生皆彼に集らんと。勝鬘夫人受記を得る時、無量の衆生、諸天及び人、彼の國に生れんと願ふ。世尊悉く〳〵記したまふ、皆當に往生すべしと。

此の段に於ては勝鬘夫人が佛の功德を讃歎し、續いて佛によつて授記せられたことが述べられてある。此の讃歎の語を能く讀んで見ると、勝鬘夫人が『佛とはいかなるものなるか』といふことを能く知り、佛に對して絕對の歸依を捧げて居たことが明かに分るのである。既に能く佛を知れば有らゆる善き行ひは其の中より生み出さるべきである、吾等は幼年の時から『善いことをせよ、惡いことをしてはならぬ』と敎へられて居るけれども、然らば善とは何ぞやと自ら心に問うて見ると、兎角シツカリした答へが出來ぬやうである。若し善の何ものなるかを明かにせずして、たゞ善を行はんと努むるといふは實に心細い次第といはなければならぬ。獨逸の哲人カントは自己の心に確信なくして善を行ふともそれは單なる『習慣的善行』であつて『道德的善行』ではないといつた。又それは『他律的のもの』であつて『自律的のもの』では無いといつた。いかにも此の說は尤もである。自ら固く信ずる所なくして、たゞ幼い時からの習慣に隨つて爲したことが世の爲にもなり人の爲にもなつたとしても、それはたゞ偶然の良い結果を得たといふに過ぎぬ。吾等の善行が此に止つてはならぬ。吾等は是非とも『善とは何ぞや』といふことを根本的に知り、確信をもつて善行に勵むべきである。佛敎に於ては善といふことを如何に說かれてあるか。之を經論に就て調べて見ると、菩薩瓔珞經には

第一義諦に順じて起るを善と名け、第一義諦に背きて起るを惡と爲す。

とある。第一義諦とは佛の覺られたことをいふのである。佛の覺られたのは卽ち絕對の眞理である。法華經の方便品に

唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。

といふのが卽ちそれである。佛は絶對の理を覺り、之を其の身に行ひ、又之を吾等の爲に說き示されたのであるから、之に順ふと違ふとによつて善惡の別が立つわけである。それで大乘義章の中には明かに、

理に順ふを善と名け、理に違ふを惡と名く。

といつてある。法界次第に

善とは理に順ずるを義と爲す、倒を息めて眞に歸するが故に。

とあるのも要するに同じ意である。天台大師の摩訶止觀には

善く實相に順ずるを名けて道と爲し、實相に背くを非道と名く。

とあるが、實相とは卽ち佛の覺られた所に外ならぬのであるから、要するに人の道は佛の御心に一致することを其の根柢としなければならぬわけである。佛の敎へらるゝ所に從つて行へば卽ち絶對の理に一致し、人生の眞意義にかなふのであるから、其の行ふ所は盡く周圍の人々に益を與へ、周圍の人々の幸福を增すことになるに違ひない。唯識論に

能く此の世と他の世との爲に順益するが故に名けて善と爲す。

とあるは卽ち此の意である。唐の妙樂大師は天台のいつたことを更に敷衍して、

一には順を以て善と爲し背を以て惡と爲す。次には著を以て惡と爲し達を以て善と爲す。

といつた。順といひ背といふのは理に順ずると理に背くとである。著といふは自己の私心に執著すること、達といふは私心を去つて、眞理に通達することである。

以上の諸說を綜合して見ると要するに絶對の眞理に一致することが善であるが、その絶對の理は唯だ佛のみの證悟したまへる所であるから、吾等は絶對に佛に歸依し、佛の敎へられた所を能く解し能く信じ、また能く之を實行することによつて初めて眞の善を行ずべきものである。孔子は

苟くも仁に志さば惡きこと無からん。

といつたが、苟くも佛を知り佛を信ずるものは自ら善に近づき惡に遠ざかり得べきである。勝鬘夫人が其の夫の友稱王を感化し、やがて其の國中の男女を皆感化して共に大乘の敎へを實行するに至らしめたといふのも、其の根本は自ら佛の貴きことを知つたのに在る。釋尊は勝鬘が佛の功德を讃歎するを聞かれて大に之を嘉し、『汝如來の眞實の功德を歎ず』と仰せられた。佛

は固より人生の有らゆる差別を超越して居らるゝのであるから、如何に毀られても之が爲に瞋りを發せらるゝ筈もなく、如何に褒められても之が爲に悅ばるゝことも無い筈である。然るに勝鬘夫人が佛を讃歎したのに對して斯くまで歡喜の情を表せられたのは、佛御自身のために悅ばれたのではなく、勝鬘その人の爲に悅ばれたのである。佛の貴さを能く知つて、之を讃歎するほどに其の信解の力の進んだ人は、必ずや能く佛の敎へを實行して、一歩より一歩と凡夫の境界を離れ佛の境界へ進み得べきである。此の如き人が多くなれば此の娑婆世界も漸く淨土に近きものになり得べきである。故に佛は之を悅ばるゝわけである。又此の如くにして佛の境界へと進んで行く人は、結局に於ては佛と同じき智慧を具へ、佛と同じき慈悲を具ふるやうになれるのであるから、佛は豫め之を洞見して、此の人に授記せらるゝのである。授記とは『後には必ず佛になる』といふことを認められたことである。

但し佛になることを認めらるゝといつても、今直ちに佛になるといふ意ではない。『今のその心を變へずに、今後永く修行を續けて行けば終に佛の境界に到達する』といふことを告げらるるのである。それで此の經文には『無量阿僧祇の佛を供養し、二萬阿僧祇劫を過ぎて當に佛となることを得て』云々といつてある。非常に長い歳月の間、努力に努力を重ねてから佛の境界に到達し得るといふのである。供養といふことに就ては前にも一通り述べた通り、たゞ飲食衣服香華等を供ふるのは唯だ形式上の供養にすぎぬ。眞の供養は佛法の普く世に弘まるために力を盡すことで、此處に無量の佛に供養するとあるのも無論其の意味である。佛の貴い敎へを世に弘めて多くの人を救護することに努めて居る間に、自身の智も德も次第に進んで、結局は佛と等しきものになれるのである。されば授記せらるゝのは畢竟大なる奬勵を與へらるゝことである。努力に努力を重ねなければ何も完成せぬのである。書經の中には『九仞の功を一簣に缺く』といふことを戒められてある。九仞の高い山を築いて、其の將に成らんとするに及んで心が緩み、わづかに一簣の土を運ぶことを怠るならば、其の山は完成せずして久しい間の努力は空に歸するのである。心の緩みが凡ての失敗の元であるから、深く之を戒めなければならぬのである。されば孔子の言にも

譬へば山を爲るが如し、未だ一簣を成さずして止むは吾が止むなり。

とある、自己を完成せしむるものは唯だ自己の努力のみである。而も自己を完成せしむることが世の爲にも人の爲にもなるのであるから、吾等は決して努力を怠つてはならぬのである。佛の授記を得たものは必ずや之に感激して『やがて佛の境界に到達し得るまでは決して修行を怠

るまい』といふ大決心をしたことであらう。此の決心が何よりも貴いのである。

○如來の妙色身　佛の端嚴なる御姿のことである。それは佛の具へたまへる御德の自然現はれたものに外ならぬ。それを三十二相とか或は八十種好とかいつてあるが、其等はたゞ重なる點をあげていつたのに過ぎぬので、實際佛の御姿は何れの部分でも貴く美しく仰がれぬ所はなかつたであらう。○不思議　佛ならぬ者には佛の智慧や佛の慈悲を測り知ることの出來る筈はない。隨つて其の御姿に現はれた所を見ても唯だ不思議といふより外はないのである。○色は無盡　凡て形にあらはれたものを色といふのである。佛の御姿に就て三十二とか八十とかの點をあげて讃歎して見ても、それは唯だ重な點を數へたにすぎぬ。實際佛の御姿に現はれたる美しさ貴さは無盡であり無量である。○智慧も亦　佛の具へたまへる智慧は固より無盡であり無量である。佛は無限の人々の心情欲望等を一々に照し見て少しも違ふことなく、其等に一々最も適切なる敎へを與へらるゝのである。是れ皆其の無量の智慧の發現に外ならぬものである。○一切の法は常住　此處に法といふのは凡ての『存在するもの』のことである。卽ち此の宇宙間に於ける一切の事物を指していふのである。吾等の眼前の事物は時々刻々に變化して止まぬのであるから、いかにも無常に感ぜらるゝのであるが之を達觀すれば其の無常なる中を一貫して常住不變の理が存するのである。例へば盈ちた月が缺けて行くのを見れば、まことに無常であるけれども、盈ちた月は必ず缺け、缺けてしまへば又漸くに盈ちて行く。此の盈虛の變化は千萬年を通じて少しの狂ひもなく反覆せられるのである。之を明かに知るものは無常の中を一貫して常住の理の存することを認め得べきである。佛の敎へは此の事を實に徹底的に說き示されてある。○心の過惡　貪欲とか瞋恚とかいふやうな諸種の煩惱のことである。○身の四種　地水火風のことである。此の身は地水火風の四種のものが集つて出來て居るのであるが、此の肉體があれば種々の欲望も起るのである。併しながら心の持ち方一つで其の種々の欲望を制して行くことは出來るのである。○難伏地　地とは其の境界のことである。佛には如何なる者も打克つことは出來ぬのであるから、佛の境界を稱して難伏地といふのである。○法王炎　佛のことである。佛は自在に法を說きたまふが故に、佛を稱して法王といふのである。○爾煩惱が除かるゝに隨つて智慧が光りを放つて來る。されば爾炎とは煩惱を除き盡したる境界と見るべきである。○一切の法を攝持　一切の法といふのは一切の人の境遇事情等のことである。攝持とはそれを能く呑み込んで吾がものとすることである。佛が一切の人に皆適切なる敎

へを與へらるゝのは、其の人々の境遇事情等をよく知り悉して居らるゝからである。○過稱量　何者とも比較し計量することの出來ぬものは佛の智慧である。○無譬類　佛の洪大なる智慧は如何なる譬喩を用ゐても形容し盡すことは出來ぬ。又佛と比類し得べきものは世間に絶えて無い。○無邊法　佛の說きたまふ所の法は無量無邊にして、一切衆生を饒益せらるゝのである。○難思議　佛の偉大なることは吾等の心を盡しても思議し難き所である。○我を覆護し　勝鬘は今大乘の敎へに歸依し、修行を勵まうといふ志を立てたのであるから、佛がなほ之に加護して其の志を遂げしめられんことを祈るのである。○法種をして增長せしめ　法種とは智慧の力や慈悲の力をいふのである。勝鬘は佛と同じやうに洪大無邊なる智慧の力や慈悲の力を具ふるに至らんことを望むのである。○攝受したまへ　攝受とは佛の御力の中へ勝鬘を取り容れて、之に加護を與へらるゝことをいふのである。○我久しく　此より『未來生も亦然り』といふまでの四句は釋尊の答へたまふ所の語である。○汝を安立す　安立とは保護を加へらるゝことである。佛は前世より既に勝鬘に保護を加へて居られたといふのである。○前世に已に開覺　前世に於て佛は既に勝鬘の知見を開き、勝鬘をして種々の惑を除くことを得しめたといふのである。○未來生も亦然り　現世に於ける修行のみでは、勝鬘が如何にすぐれた機根をもつた婦人であつても佛の境界に到達することは出來ぬ。故に佛は未來世に於て續いて之に加護を與へられ、未來に於て佛の境界に到達することを得しめらるゝのである。○我已に　此より『唯だ願はくば攝受せられんことを』といふまでの四句は勝鬘の語である。○已に功德を作しき　功德をなしたといふのは佛を讃歎したことである。佛を讃歎し得るものは卽ち佛の化導を贊くべき心を起すのであるから、一切衆生のために貴き佛法を弘むることに全力を注ぐやうになるのである。されば佛を讃歎することが有らゆる功德の本となるわけである。○衆の善本あり　佛を信じ佛の敎へを奉ずるならば其の心が全く淸淨になるから、有らゆる善事を爲すべき力が此の心の中から生み出さるべきである。これが萬善の本である。○授記　佛より記別を與へらるゝことを授記といふ。別といふは『分別』の義である。佛弟子の中で殊に優れたる者に對して『汝はいつ迄も今の心を改めずして修行を勵むならば、後日に斯く斯くの功德を積んで佛と成るであらう』と委しく說き示さるゝのを記別といふのである。○此の善根を以て　能く佛の功德を知つて之を讃歎するものは、やがて自身も佛と等しき功德を積む身となり得べきである。○無量阿僧祇劫に於て　阿僧祇とは無數の義である。劫とは長時といふ意である。要するに非常に多くの歲月を積んで修行を重ねた末に於てといふ意である。○自在王　智德共に具はり天人共

に仰ぐ所となることである。○常に我を見ることを得　佛は固より常住不滅である、故に深く佛法を信ずるものはいつも佛と共に在るの想を爲し、いつも悦びに充ちて活きて行けるのである。○普光如來應正遍知　普光といふのは此の佛の名である、其の智慧の光りが普く衆生を照すの意をあらはすのである。如來應正遍知とは如來、應供、正遍知を略していふのである。佛の十號といふものがあつて、佛の具へたまふ所の一切の德を十大別して呼ぶものであるが、其の中に於て根本的のものが此の三種の名である。第一に如來といふは佛の常住不滅なる本性のことで、如とは『常に』といふ意である。佛は常に吾等の中に在すので、之を知らぬのは吾等の智慧が足らぬからである。次に應供といふは『一切衆生の供養を受くべき者』といふ意である。佛は一切衆生に大恩があるのであるから、固より其の供養を受くべき者なのである。第三に正遍知といふは佛の智慧が正しく一切の事柄の眞相を照し見て少しも差はぬことである。○諸の惡趣　地獄界、餓鬼界、畜生界等をいふのである。此等の世界は惡業の報として趣く所であるから之を惡趣と呼ぶのである。○色力壽命　色とは容貌のことである。此の國に生るゝ者は姿も美しく力も强く壽命も永いといふのである。○五欲の衆具　眼耳等の五體を樂しますべき凡ての美しいものが皆具はつて居るのである。○他化自在　欲界の最上層に在る天であつて、此の天に生るゝものは常に極まりなき歡樂を享くると考へられて居る。○純一大乘　皆悉く大乘の教へを信じ、常に大慈悲の心を以て一切衆生に接することを志とするものである。○彼の國に生れんと願ふ　皆勝鬘夫人を範として修行を積みたいといふ念を起したのである。○皆當に往生すべし　既に至心を以て勝鬘に倣はんことを求むる以上は、必ずや後には勝鬘と同じやうな智慧をも德をも具へ得るであらうと、佛が之を認められたのである。

此より所謂正宗分に入るのであるが、先づ其の最初の一段は勝鬘夫人が佛を讃歎し奉ることが主となつて居るので『歎佛眞實功德章』と名けられて居る。此の夫人の語は簡にして能く意を悉したるものといふべきである。彼の無量義經の劈頭に於て諸菩薩が佛を讃歎したる語は、佛の佛たる所以を說き悉して遺憾なきものであるが、此の勝鬘の語はそれよりも至て簡單であるけれども、其の大體に於ては能く彼と一致して居る。彼の諸菩薩は

皆是れ法身の大士ならざるは莫し。戒定慧解脫解脫知見の成就せる所なり。云々

とある程の大德の人々である。然るに勝鬘は佛法に歸依してまだ久しからぬ身を以て彼の人々と同じやうに佛の佛たる所以を能く解し得たのは眞に驚くべきことである。至心を以て求めさ

へすれば必ずしも久しい歳月を費さずして正しき信解が得らるゝものに違ひない。

若し法を聞くことを樂ひて厭足すること無ければ不可思議の法を悟る。（華嚴經）

といふは決して僞りではない。此の事は吾等の如き初歩の者に大なる勇氣を與ふる、まことに有難き實例である。

さて勝鬘の第一に擧げたのは佛の御姿の極めて氣高いことである。其の語に『無比にして不思議なり』とあり、また『無盡なり』とある通り、佛の御姿は一點として美しく氣高からぬ所はないのであるが、其の主要の部分を擧げたのが三十二相とか八十種好とかいふものである。（八十種好とは八十種の好相といふ意）要するに佛の具へらるゝ德が自ら外貌にあらはれたものに外ならぬので、『法界次第』に

體に此の三十二相を現じて以て法身の衆德圓極なるを表し、見る者をして愛敬して勝德有らしむ。

とあるので能く其の意が悉されて居る。されば佛の御姿を仰ぎ見るものは自ら其の感化を受けて、心が淨く安らかになるのである。佛の說法はまことに貴いものであるが、其の無言の感化も亦極めて大なる力である。無量義經の中に

能く衆生をして歡喜して禮し、心を投じ敬を表して慇懃なるを成ぜしむ。

とあるは此の事である。斯く端嚴微妙なる御姿を仰ぎ見るものは、共に佛の具へたまへる洪大無邊の智慧が其の外貌に現はれたものなることに想ひ到つて、愈々深き歸依の念を生ずべきである。

されば勝鬘は之に續いて『智慧も亦また然り』といつたのである。佛の智慧は深く且廣きこと何者も之に比すべきで無い。まことに無量壽經に

如來の智慧の海は深廣にして涯底無し。

とある通りである。佛が此の如き洪大なる智慧を具へらるゝまでには種々無量の難行苦行を積まれたのであるが、佛はそれを少しも惜む所もなく打明けて吾等の爲に說きたまひ、吾等をして共に凡夫の境界を離れて一歩一歩と佛の境界へ近づき行くべき途を得しめたまふのである。無量義には此の事を稱へて

世尊往昔の無量劫に、勤苦して衆の德行を修習し、我人天龍神王の爲にし、普く一切の諸の衆生に及ぼしたまへり。

といつてある。此の洪大なる智慧をもつて天地萬有を照し見て『一切の法は常住』であること

を明かにし、之を吾等のために說き示されたのが卽ち大乘の敎へである。勿論佛は吾等に此の常住の理を說き示さるゝに先つて、無常といふことを反覆して說かれた。

世間種々の法は一切皆幻の如し。（華嚴經）

といひ、若くはまた

水流れて常に滿たず、火盛にして久しく燃ゑず、日出て須臾にして沒し、月滿ちて已に復た缺けぬ。尊榮豪貴の者の無常なることまた是に過ぎたり。（罪業應報經）

といふが如き語は經典の中に夥しくある。是れは吾等凡夫があまりに周圍の事物に執著し、相爭ひ相鬪うて互ひに苦を增し罪を重ねて居るのを見て、之に反省を與へんがために說かれたものに外ならぬのである。實際此の世の中は無常であつて、如何なるものも久しき存在を保つことは出來ぬ。併しながら更に深く之を見れば、其の無常なる中を一貫して常住なるものが確かに存することを明かにし得るのである。海の水も河の水も流れ來り流れ去つて暫くも止まらぬけれども、此の天地の間に水といふものが絕えて無くなることは決して無い。如何に多きな物を焚いても、其の火は燃えすぎれば卽ち消ゆるのである。併し此の天地の間に火が全く無くなることは決してない。出た日は沒するけれども、其の沒した日は又出るので、日その物は限りなく循環して決して消え去ることはない。盈ちた月は缺けて行くけれども、缺け終れば又盈ちて行き、月その物が消えて無くなることは無い。尊榮豪貴の者は久しく續かぬけれども人の努力の結果は決して朽ちず亡びずに相集つて人類の進步發展の基となつて居るのである。

自然界にせよ人間界にせよ、一面から之を見れば無常であり、變化極まりなきものである。一見から之を見れば常住不變の理が之を一貫して居る。然るに凡夫は其の無常なる一面を常住なるものゝ如くに見て、之に執著して居るから苦痛と罪惡とが益々多くなつて行くのである。佛は之に對して深き哀愍の念を起したまひ、之を覺醒せしめて其の苦惱の中より脫出せしめんが爲に無常を說かれたのである。而も一切の事物の無常であることを諦め得たる者に對しては、更に進んで其の無常なるものゝ中を一貫して常住不變の理の存することを大觀せよと敎へらるゝのである。孟子は其の弟子が『同じく人でありながら或は大人となり或は小人となるのは何故であるか』と問へるに答へて、

其の大體に從へば大人と爲り、其の小體に從へば小人と爲る。

といひ、更に之を說明して

心の官は則ち思ふ。思へば則ち之を得、思はざれば則ち得ざるなり。天の我に與ふる所のものを比し、先づ其の大なる者を立つれば、其の小なるものは奪ふこと能はざるなり。此れ大人たるのみ。

といつた。若し吾等にして能く常住不變なるものに着眼し、永遠不朽の事に力を用ゆるに至れば、眼前の小き利害得失を爭つて罪を重ね苦を增すことは決して無かるべきである。佛は一切の事物に就て其の常住不滅なる所以を大觀せられ、又之を吾等に敎へて吾等をして共に煩惱の生活より解脫することを得しめらるゝのである。故に勝鬘は『我歸依したてまつる』と讃歎した。

既に佛の智慧の洪大無邊なることを知れば、此の如き智慧を具へらるゝまでの努力の貴きことに想ひ到らなければならぬ。因て勝鬘は續いて『心の過惡と身の四種とを降伏』せられたことを稱讃したのである。心の過惡を降伏するといふのは一切の煩惱を掃ひ盡すことである。煩惱によつて自ら種々の苦を受くるのみならず、又他人に累を及ぼすべき種々の惡業を作るのである。故に優婆塞戒經には

一切の煩惱は是れ我が大なる怨なり。何を以ての故に。是の煩惱によりて能く自他を破ればなり。

といつてある。而も煩惱なるものは際限もなく起つて來るものであるから、之を掃ひ盡すのは實際容易の業ではない。涅槃經に

菩薩は深く煩惱は猶ほ大海の如しと觀ず。深くして底を得難きが故に名けて海と爲し、邊を得べからざるが故に名けて大と爲す。

とあるが如くである。此の如き煩惱を除き盡すには非常に大なる努力を要すべきこと勿論である。次に身の四種とは地水火風のことであるが、身の四種を降伏するといふのは此の肉體の爲に少しも累はされぬやうになることである。此の身に屬する所の眼耳鼻舌等の作用が常に外界の刺激に應じて起り、之によつて吾等の心はいつも外界の事物に惹かれ、いつも動搖を受くるのである。觀普賢經に

身はこれ機關の主なり、塵の風に隨ひて轉ずるが如し。

とあるは此の事である。併しながら心の力が眼耳等の一切の働きを制して、所謂六根淸淨を得るに於ては、外界より何等の累ひをも受けぬのである。佛は久しく難行苦行を重ねて、此等一切の障礙を制服せられ、何者も佛に累を及ぼすことは出來ぬのである。それ故に佛の境界を稱

して『難伏地』といふのである。

斯くして佛は洪大なる智慧を成就せられたのである。心が煩惱の爲に蔽はれて居る間は、宛も鏡の面が曇つて居るやうなもので、一切の物の姿を正しく映すことは出來ぬが、其の曇りがスツカリ拂はれてしまへば、此の明鏡の面には一切の姿が有りのまゝに映るのである。佛の智慧を以て照し見らるゝ時には、一切衆生の心に念ひ身に行ふ所が皆有のまゝに分る筈である。

法華經の法師功德品に

是の世界內外の一切の諸の衆生、若は天龍及び人夜叉鬼神等、其の六趣の中に在る所念の若干種、法華を持つの報をもて一時に皆悉く知らん。

とあるのも、此の法華經を信ずる者が佛と對しき智慧を具ふるに至るべきことを說いたに外ならぬのである。(六趣といふのは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六界のことである。)佛は一切衆生が如何にして善惡の業を爲し、如何に其の報を受くるか等の一切の事を皆明かに照見せらるゝが故に、一々之に適切なる敎へを說いて之を敎化し之を救護せらるゝので、佛を稱して『法王』といふのである。彼の無量義經の中に、

遍く一切の衆の道法を學して、智慧深く衆生の根に入りたまへり。是故に今自

在の力を得て、法に於て自在にして法王と爲りたまへり。

といひ、更に

能く諸の勤め難きを勤めたまへるに歸依したてまつる。

といつてあるのは卽ち此の事である。勝鬘も亦『法王を禮したてまつる』といつた。

次に『一切の爾炎の智慧自在にして』云々とあるのは、此の『法王』といふ語を更に敷衍したので、要するに佛の智慧と慈悲とを讃歎したものである。既に一切衆生の心の中を明かに照し見られたのであるから、彼等を敎化し救護せんが爲に敎へを說かるゝことになるのは、自然の順序である。それは所謂大慈大悲である。慈悲の伴はぬ智慧といふものは決して無い。それは宛も熱の伴はぬ太陽の光線といふものが絕對に無いのと同じことである。『一切の法を攝持したまふ』とあるが、一切の法といふのは一切衆生の境遇事情等をいひ、攝持とは其等を盡く佛の胸中に收めらるゝことをいふのである。之によつて救護の作用が生れて來る。佛の法を說かるゝのを車輪を絕えず回轉するに譬へて、法輪といふのであるが、無量義經には之を稱して

衆生の心業に隨順して轉じたまふ。

といひ、更にまた

法輪轉ずるに時を以てしたまふに歸依したてまつる。

ともいつてある。今勝鬘は佛が普く一切衆生を救護せんがために出たまへることを知つた。一切衆生といふ中に親疎遠近の別の有らう筈は無い。勝鬘はまだ佛に歸依して日の淺いものであるが、佛は決して之を疎外せらるゝこと無く、永く之を敎へ之を護りたまふべきである。それで續いて『哀愍して我を覆護し』云々といつたのである。

此の勝鬘の語の中に於て特に注意すべきは、『法種をして增長せしめ』とあることである。法種とは『法を成就すべき種』のことである。佛の境界に達することである。法を成就するとは卽ち覺を得ることである、卽ち佛の境界に達することである。佛の境界に到達するには智慧の力が具はらなければならぬ、又慈悲の働きが具はらなければならぬ。誰も皆佛性を具へて居るといつても、努力しなければ其の佛性はいつ迄も開發せらるゝこと無くして已むのである。佛性を開發するのには修行を重ねなければならぬ。修行を重ぬるといふのは能く佛の敎へを學び、又能く之を自分の身に實行することに外ならぬ。されば涅槃經には三因佛性といふことが說いてある。三因佛性といふのは先づ吾等は皆本來佛性といふものを具有して居て、如何に煩惱が多く起つても、此の貴い本性を滅し盡すことは出來ぬ。これが吾等の佛と成るべき種子であるから之を正因佛性といふのである。併しながら本來此の如くに貴い本性をもつて居るばかりで之を養つて長せしむることに努めなければ、何の用をも爲さぬのである。之を養つて長せしむるには佛の敎へを學んで智慧を磨かなければならぬ。能く學んで智慧を成就したのに名けて了因佛性といふ。了とは卽ち成就の義である。既に佛性を學んで能く之を信解しても、之を實際に行つて見なければ自得することの出來るものではない。佛の御心を以て吾が心とし、世のため人の爲に力を盡すことによつて初めて貴い佛性が充分に開發せらるゝので、之を緣因佛性といふ。緣とは吾等の日常に遭遇する一切の事をいふのである。吾等は此の緣を空しくせずして善根を積み、一歩より一歩と佛の境界に近づいて行くべきである。勝鬘のいつたことは卽ち佛の敎へを學び又之を實行して智慧の力も發達し、慈悲の働きも充分に出來るやうになりたいとの意である。斯くてこそ眞に佛弟子と稱せらるべき者である。

勝鬘は之を勤むべきことを佛に對して誓ひ、又佛の永く自分を加護せられんことを願つたのであるが、それに就て『此の世及び後生』といつたのも亦深く注意すべき點である。佛性が開發せられて一切の煩惱が全く無くなつてしまへば卽ち佛なのであるが、それは固より容易のこ

とではない。努めて怠らなければ智慧も進み德も高くなるには相違ないが、それが完全無缺になり、絶對無限の力が具はらなければ佛とはいはれぬのである。されば如何に智德共に優れた菩薩でも佛に對しては絶對に歸依の意を表するのである。彼の無量義經に出て居る大菩薩達でも、釋尊に對しては

大なる哉大悟大聖主

と歎じ、

稽首して思議し難きに歸依したてまつる。

といつた。以て佛の及び難きを知るべきである。されば勝鬘が如何に機根の優れた人であつても、現世に於ける五十年や六十年の修行によつて佛の境界に到達し得られやうとは固より思ひも寄らぬことである。さりながら吾等の生命は此の世に限られたものでなく、未來永恒に續くものである。又吾等が努めて已まなければ、終に佛の境界に到達し得べきことは、佛の明かに認めらるゝ所であるから少しも疑ふべきではない。されば吾等は『今より始めて來世までかけて吾等の努力を續けやう。佛の境界に到達するまでは、如何なることがあつても吾等の努力を止めまい』と固く自ら誓ふべきである。法華經の寶塔品に

是則ち勇猛なり、是則ち精進なり。

と讃められたのは、此の如き決心をもつた人のことであらう。今勝鬘が此の決心を語つたのは、吾等の共に範とすべきものである。

以上に於て勝鬘は佛の絶大の功德を讃歎し、又佛に對する深き歸依の意を表して居るのであるが、佛の之に答へられたる語は至て短いものであるけれども、まことに重大なる意義をもつて居る。佛は『我久しく汝を安立す』と仰せられ、更に言を續けて『前世既に開覺せり。今また汝を攝受す。未來生も亦然り』と仰せられた。是れは實に不可思議なる語である。勝鬘は父母の示教によつて初めて佛に歸依する念を起したのであるが、其の父母でさへもツイ此頃佛に歸依したものであつて、『法を信ずること未だ久しからず』といつてある。況して勝鬘は昨今の歸依者にすぎぬ者である。然るに佛の仰せらるゝ所に依れば決して昨今の師弟關係ではなく、前世から既に師弟であり、又未來までも師弟であるといふことである。此の不可思議なる關係に就て明かなる解釋が下されなければ、佛の仰せらるゝことは一切虚妄となつてしまふであらう。此の事に就ては釋尊が種々の經典の中に於て種々に説明を與へられて居るのであるが、就中法華經に於ては最も明かに

一切世間の天人及び阿修羅は、今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。然るに善男子、我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佗劫なり。

といひ、更にまた

我常に此の娑婆世界に在りて說法教化す。また餘の處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。

といつてある。那由佗といふも又阿僧祇といふも無量の大數のことである。阿耨多羅三藐三菩提といふは『無上正徧知』と譯すので、卽ち佛の具へたまふ所の智慧のことである。

釋尊は迦毘羅の國王の子として生れ（此の國の王は代々釋迦族である。）人生の眞の意義に就て疑惑を起し、其の疑惑を解決せんがために出家して難行苦行を積み、その結果として伽耶城外なる菩提樹の下に於て成道せられたものであると誰も皆思つて居た。而して後數十年に亘つて說法教化せられ、其の說くべきことを說き盡された後には必ず入滅せらるべきものと誰も思つて居たのである。然るに釋尊は自ら『久遠のむかしより我は佛であつた。我は常に此の娑婆世界に於ても、また他の世界に於ても、絕えず教化を續けて居た。今の說法教化は此の常住不斷の働きの一部分にすぎぬ』と明言せられたのである。此の事を打明けらるゝに當つては特に

汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。

と告げられたのである。誠諦とは眞實にして決して差はぬことをいふので、釋尊自ら斯く仰せられたのであるから、此の事は決して疑へぬわけである。尙ほ法華經の方便品に於ては、釋尊の說かるゝことが絕對の眞理であるといふことを力說せられて、

十方佛土の中には唯だ一乘の法のみ有り、二も無く亦三も無し。

とある。卽ち釋尊の說かるゝ所は凡ての佛の說かるゝ所に一致して居て少しも異る所はないといふのである。それは釋尊も其の他の佛も畢竟するに皆唯一の佛の現はれたものに外ならぬからである。

此の事に關しては後に至つてなほ委しく此の經の本文の中に說かれてあるから、今は其の概略だけをいふに止めて置かうが、前の序說の中にもいつた通り、先づ吾等は唯一絕對の佛の實在を認めなければならぬ。此の唯一絕對のものを種々に解釋して、種々の說が昔から立てられてあるが、之をたゞ『力』とか『實在』とか、乃至は『原理』とか見るのと異つて、之を『佛』と見る時には、是れは絕對の大生命であつて、凡てのものを活かし、凡てのものを護り、凡て

のものを榮えさせる働きが之に具はつて居るものと考へなければならぬのである。卽ち吾等の周圍の凡ての物と共に、此の中に吾等の身を托し、此の貴い力に護られて存在して居るものと思はなければならぬのである。されば智度論の中に

佛の大慈大悲は眞實に最大なり。

とあるのも、釋迦牟尼佛とか阿彌陀佛とかいふ佛のことをのみいつたものとは見ず、唯一絕對の佛が吾等を護り吾等を榮えしむる力をいつも具へたまふことを大慈大悲と稱して然るべきである。此の大慈大悲の佛が特に此の娑婆世界に在る所の吾等を哀愍せられ、特に人の姿となつて此の地上に降誕せられたのが卽ち釋迦牟尼佛である。それは宛も天上の太陽より發する所の光線が此の地上の凡ての物を照し、凡ての物を生育せしむるのと同じことなのである。吾等は此の太陽を『吾等のための太陽』として仰ぎ貴んでよいのであるが、此の太陽の光線の照す所は決して此の地上にのみ限らるゝものでは無く、普く此の宇宙間の凡ての物を照すのである。併しながら如何なる所に於て如何なる物を照しても、元來一つの太陽から出た光線であるから同樣の色と同樣の光りとをもつて居る。唯一の佛の現はれたる諸佛（其の中には釋迦牟尼佛も無論含まるゝのであるが）の教へらるゝ所が畢竟一であるといふのも之と同じ理なのである。

此の理を更に委しく說いたものが所謂本迹の說である。本とは本體をいひ、迹とは其の現はれたる姿をいふのである。譬へば或る一人が道を步いて行く間に、その道には數多くの足の跡がつくのであるが、此の多くの跡は皆是れ一人の足の跡である。此の足の跡は一人の步んだ方角を示して居る。又一輪の月が空に輝けば、海にも河にも池にも皆其の影がうつる。此の萬水の影は皆是れ一輪の月の影である。一人の足の跡であるから、如何に多くても其の形は一つである。一輪の月の影であるから海にも河にも池にも皆同じやうに映るのである。吾等は吾等の庭の池に映つた月を見て、凡ての海や河に映る月も之と同じ姿であると考へて少しも間違ひはない。吾等が釋尊の教へに絕對に歸依して誤りがないといふのも亦それと同じ理である。吾等は釋尊の教へを信解して之に違はぬやうに心懸けて居さへすれば、釋尊の教へらるゝ所は卽ち一切の佛の御心と一致して居るものであるから、一切の佛が必ず吾等を護つて下さるに違ひないのである。法華經に

我卽ち歡喜す、諸佛も亦然なり。——寶塔品

とあるは實に此の意である。我とは釋尊、諸佛とは十方三世の諸佛である。それは盡く皆唯一絕對の一佛の現はれたものに過ぎぬから、釋尊の嘉せらるゝ所は卽ち諸佛の共に嘉せらるゝ所

なのである。

諸佛の慈悲は何れも絶大のものであるが、就中釋尊は特に此の娑婆世界に住する吾等を敎へ、吾等を救はんが爲に此の世界に降誕せられたのであるから、吾等は此の大恩に對して特に深く感謝しなければならぬ筈である。吾等は釋尊を通して唯一絶對の佛を仰ぐのである。吾等が釋尊の恩に浴するのは卽ち唯一絶對の佛の恩に浴して居るわけである。此の關係を名けて本迹の關係といふのである。吾等が迹佛たる釋尊の化導を受けて居るのが、卽ち本佛たる唯一絶對の佛の化導を受けて居る所以なのである。僧肇が註維摩經の序に

本にあらざれば以て迹を垂るゝこと無く、迹にあらざれば以て本を顯はすこと無し。本迹殊なりと雖も、而も不思議は一なり。

といつたのは大に味ふべき言である。釋尊は今より二千數百年前に初めて印度に降誕せられたのであるが、佛の化導が此の時に始まつたのではなく、其の以前から世間に於て說かれたる種々なる敎へは何れも佛の說法の一部分と見るべきもので、壽量品には此の事を

所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず。

といつてある。而も釋尊の說きたまへる所は、其の以前の種々なる敎へに比べて最も勝つて居る。何れの敎へでも皆それ〴〵に長所をもつて居るけれども、釋尊の敎へのみが完全無缺である。されば釋尊以前の敎へは皆釋尊の此の世に出現して敎へを與へらるゝための準備として役に立つものと見做さるべきである。言を換へていへば、釋尊の出現があつたればこそ其の以前の敎へがそれ〴〵に意義を有するに至つたと申すべきである。

以上は敎へを與へらるゝ佛の方のことであるが、更に其の敎へを受くる所の吾等の方のことをも考へて見なければならぬ。佛敎に於ては三世を一貫したる生命といふことが敎へられてある。吾等の生命は現世にのみ限らるゝものでなく、過去より未來にまで通ずる永遠のものであつて、現世の生活は此の永き生活の一部分であるといふのである。斯ういふ說は動もすれば『現世は假のものであるから重んずるに及ばぬ』といふやうに誤解され易いが、決してそんなものでは無い。現世に於ける善惡一切の業が皆其の報を永く後に遺すのであるから、現世に於ける行ひを最も愼まなければならぬ筈である。涅槃經に

善惡の報は影の形に從ふが如し、三世の因果循環して失はず。

と說かれ、無量壽經に

天地の間には五道分明にして恢廓窈窕浩々茫々たり。善惡の應報として禍福相

承け、身自ら之に當り誰も代る者なし。

と說かれたのは實に之が爲である。此の世に於て佛の敎へを學ぶべき機會を與へられたのは再び値ひ難き貴き緣である。今日これを空しうしては、後に悔ゆるとも及ぶべきではない。

斯く三世を一貫したる生命を認むる時には、前世に於ける善惡の報が現世に及ぶことをも無論信じなければならぬ。吾等は現世に於て努力して敎へを學び道を行じ、前世よりの惡報は現世の善行によつて之を滅し、前世よりの善報は現世に於て更に之を長ずるやうに勵まなければならぬのである。今此の勝鬘夫人の如くに非常に優れたる機根を有し、其の父母より敎へを受けて直ちに深く佛に歸依するやうになつたのは、前世よりして多くの善根を積んで居たものに違ひない。釋尊が之に對して『久しく汝を安立す』といひ、また『前世既に開覺せり』と仰せられたのは卽ち此の意である。勝鬘が前世に於て多くの善根を積んだのも、實は佛の敎化によつたものであるといふのである。まことに是れは深き師弟の緣である。勝鬘は此の世も後世も佛の敎へを受けたいと願つたのであるが、前世からの深い緣が後に至つて絕えやう筈は萬々ない。されば釋尊は『今また汝を攝受す。未來の生も亦然り』と仰せられた。勝鬘たるもの此の大恩に感激せざるを得ぬのは勿論のことである。法華經の信解品に於て、迦葉は佛の大恩を稱へて

世尊は大恩ましまします、希有の事を以て憐愍敎化して我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。

といつたが、勝鬘の感激の情も恐らくそれに劣らぬものであつたであらう。

さて佛恩の洪大なのに感じたものは如何にもして此の洪大なる恩に報じたいといふ願を起すべきであるが、佛は有らゆる力を具へたまふのであるから、報恩のために佛に對して一事をも爲すことは出來ぬのである。されば佛恩に報せんと思ふものは一切衆生を敎化することに力を盡すことによつて、其の報恩の願を果すべきのみである。佛はたゞ一切衆生のためにのみ心を勞したまふのである。されば こそ涅槃經の中には

一切衆生が異の苦を受くるのは悉く是れ如來一人の苦なり。

といつてある。若し佛の敎へに歸依して、淺ましい凡夫の生活を離るゝものが一人でも多くなれば、それが佛に取つては何よりの悅びである。故に此の貴い敎へを世に弘むることに力を盡すのが卽ち佛恩に報ずべき唯一の途となるわけである。彼の迦葉等は佛恩の辱きに感ずると共に、此の貴い敎へを世に弘むるために必ず努力すべきことを誓つた。勝鬘夫人も亦同じやう

な決心をしたのである。其の事は此より後に勝鬘の說く所によく現はれて居る。此の勝鬘の感化を受けたものは又之に感激し、此の恩に報せんがために此の貴い敎へを世に弘むることに力を盡したに違ひない。此の如き努力が集つて所謂廣宣流布の機運を作つて行くのである。

以上の如く勝鬘が佛の功德を讃歎する事が終つて、それに續いて勝鬘に對する授記となるのであるが、授記とは前にもいつた通り、未來に於て佛と成るべきことを承認せらるゝことである。此の授記といふことは、大乘の經典の中には屢々見らるゝ所であるが、何れの場合に於ても『今よりなほ多くの善根を積んで怠らなければ……』といふ條件がついて居るのである。されば授記せられたものは大なる希望を與へらるゝと共に、又今より大に努力すべき責任を負はされたわけである。同じく佛の敎へを受けた者の中にも其の機根がなほ下劣であるために佛の眞の御精神が分らぬものも少くない。又佛の御精神の在る所は間違はずに解し得ても、其の之を信ずる力の未だ足らぬために、必ず之を實行しやうといふ決心のまだ充分につかぬ者もある。されば人々が皆佛性を具へて居るとはいふものゝ、其の佛性を遺憾なく開發して、佛の境界にまで到達し得らるべき見込みのある人は至て少いものである。智度論には

菩薩の大心を發すと、魚の子と菴樹の花と、三事は因の時多くして、果を成ずる時は甚だ少し。

とある。菴樹とは菴羅樹のことであるが、此の樹は夥しく花が咲くけれども、多くは果を結ばずして落ちてしまふのである。魚の子は多けれども生育して魚となるのは至て少く、菴羅樹の花も果を結ぶは至て少い。大乘の敎へを學んでも大心を起すものは至て少い。大心とは『必ず佛に成らう、それ迄は必して努力を止めまい』といふ大決心のことである。若し多くの人の中に斯る大心を起して、いつ迄も其の努力を續け得べき者があれば、佛は之に對して『今の其の心をいつ迄も持ち續けて、善根を積むことを怠らなければ後には必ず佛の境界に到達し得らるゝであらう』と告げらるゝのである。是れ卽ち授記である。

授記せられたものは心に大歡喜を生じて、必ず努力を續くべきことを誓ふのは勿論のことであるが、他の者も亦其の心に大なる悅びを感ずるのである。共に佛の敎へを受けて居る者の中に一人でも『後には必ず佛となるべき見込みがある』といふことを許されたのであるから、『自分達も今より大に勵んで怠らなければ、同じやうに授記を得るであらう』といふ大なる希望が生じたわけである。之に過ぐる悅びのあらう筈は無い。彼の舍利弗が法華經の譬諭品に於て授記を得た時には

大衆舍利弗の佛前に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て心大に歡喜し踊躍すること無量なり。各々に身に著たる所の上衣を脱ぎて佛に供養したてまつる。

とある。而して此時に諸天子等は

大智舍利弗今尊記を受くることを得たり。我等も亦是の如く必ず當に作佛して、一切世間に於て最尊にして上有ること無きを得べし。

といつたとある。今此の勝鬘夫人の授記を見た人々も亦此と同様の悦びを感じ、皆勝鬘を範として今より修行を積まんことを願つたとある。さて此より進んで『十大受章』に入るのであるが、是れは頗る長い一段であるから、之を二分して先づ其の前半を掲ぐることにしやう。

爾の時に勝鬘受記を聞き已りて、恭敬して十大受を受く。(一)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、所受の戒に於て犯心を起さず。(二)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、諸の尊長に於て慢心を起さず。(三)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、諸の衆生に於て恚心を起さず。(四)世尊我今日より乃し菩提に至るまで、他の色身及び外の衆具に於て嫉心を起さず。(五)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、内外の法に於て慳心を起さず。(六)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、自ら己が爲に財物を受畜せず、凡て受くる所有れば貧苦の衆生を成熟せしむるが爲にせん。(七)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、自ら己が爲に四攝法を行ぜず、一切衆生の爲の故に無愛染心、無罣礙心を以て衆生を攝受せん。(八)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、若し孤獨幽繫疾病、種々の厄難困苦の衆生を見ては、終に暫くも捨てず、必ず安穩ならしめんと欲し、義を以て饒益し、衆苦を脱せしめて然る後に捨てん。(九)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、若し捕と養と諸の惡律儀と及び諸の犯戒とを見ては、終に棄捨せず、我力を得ん時、彼彼の處に於て此の衆生を見ては、應に折伏すべき者は之を折伏し、應に攝受すべき者は之を攝受せん。何を以ての故に。折伏攝受を以ての故に法をして久住せしむればなり。法久住すれば天人充滿し惡道減少し、能く如來所轉の法輪に於て而も隨ひて轉ずることを得。是の利を見るが故に救攝し

て捨てず。(十)世尊、我今日より乃し菩提に至るまで、正法を攝受して終に忘失せず。何を以ての故に。法を忘失する者は則ち大乘を忘る。大乘を忘るゝ者は則ち波羅蜜を忘る。波羅蜜を忘るゝ者は則ち大乘を欲せず。若し菩薩にして大乘を決定せざる者は則ち正法を攝受するを得ること能はず。所樂に隨ひて入らんと欲するに、永く凡夫地を越ゆるに堪忍せず。我是の如き無量の大過を見、又未來に正法を攝受する菩薩摩訶薩の無量の福利を見るが故に此の大受を受く。

此の十大受は大乘を學んで佛の境界に達するまでの間に必ず之を實行して、過失なからんことを期する所の十ケ條の誓約である。其の第一より第五までは自己の行爲に就て過誤なからんことを期するのである。其の第六より第九までは他人を利益し教化するに就ての最も重要なる心得である。而して其の第十は大乘を學ぶに就ての根本的の心得であつて、自ら上の九ケ條を收束するやうになつて居る。大乘の戒には攝律儀戒と攝衆生戒と攝善法戒との三大別があるが、此の十大受は能く其の精神に一致して居る。『十大受を受く』といふは此等の條件を吾が必ず守るものとして領掌し誓約する意味である。攝律儀とは自己の言行を愼んで佛の定められたる規律に違はぬやうに努むるの意である。攝衆生とは一切衆生を教化して共に佛法に歸依せしむる意である。攝善法とは自己の言行を佛法の根本精神と一致せしむべく勵むの意である。聖德太子の『勝鬘經義疏』に

第一は(卽ち一より五まで)自行を以て本と爲し兼ねて化他を顯はす。第二は(卽ち六より九まで)化他を以て宗と爲し仍て自行を明す。第三は合せて自行と化他とを明す。卽ち具さに大士の行を擧ぐること明なり。

とあるは、簡にしてまことに能く十大受の相互關係を悉されたる語である。他を化せんとするには先づ己を正うしなければならぬのであるが、他を化せんとする大志が無ければ自己を完成せんとする努力は起らぬものである。要するに自己の爲と他人の爲とは渾然融合して一となるべきである。それが眞の菩薩行である。聖德太子の攝政として四十九ケ年間に御實行になつた所は實によく此の十大受の精神と一致して居る。以て太子が如何に此經を重んぜられたかを窺ふべきである。

佛と成るといふのは實に洪大なる理想であるが、此の洪大なる理想を實現せんとするには極めて細心なる注意が必要である。譬へば大きな寶玉に小さな疵があつても眞の寶とはならぬ如

くに、たとへ智も德も具はつて居るやうに見えても、一點の過があれば未だ佛として許さるべきものでは無いのである。然るに大乘を學ぶ人が往々にして志を高遠なる所にのみ馳せて、細心の用意に於て缺くる所のあるのは歎くべきことである。漢の高祖の臣樊噲が鴻門の會の時に主君の身に危難の加はらんことを憂へ、竊かに脱れて歸らんことを勸め、高祖が『それでは項羽に對して無禮になるであらう』といつたのに對して『大行は細謹を顧みず』といつたのが後世になつて非常に有名な語になつた。是れは戰亂の世に於ける一武將の言であつて、道を學ぶ者の訓とすべきものでは無い。細謹を顧みぬやうでは眞の大行は成し得られぬのである。佛敎を學ぶ人の中にも往々にして『細謹を顧みず』といふ考への人のあるのは耻づべきの至である。今勝鬘が受記を聞き已り、恭敬して十大受を說いたといふのはまことに貴いことである。『汝は後に必ず佛となり得べきものである』といふ釋尊の一言は勝鬘の心に非常に力强く響いたに違ひない。之を聞いて其の心に極めて大なる悅びを感ずると共に、『佛と成るべしとの御許しを受けながら、今より後の言行に少しなりとも過失があつて、折角の御許しを無にするやうなことが起つてはならぬ』と考へ、肅然として自ら恐るゝ所があつたであらう。玆に於て恭敬して十大受を說くのである。

○乃し菩提に至るまで　菩提とは覺の義である、菩提に至るといふのは卽ち佛智を得ることである。○所受の戒　佛の定められたる凡ての戒を必ず守らうと誓つたことである。○犯心を起さず　破戒の行をせずとも、心が其の戒に背くやうでは眞に能く戒を守るものとはいはれぬ。心がいつも佛戒と一致するやうになつて、初めて眞に能く戒を守る者といひ得べきである。○慢心を起さず　いつも恭敬の心を以て之に對して居ることである。自己より上位に在る人の過を數へて不遜の念を生ずるが如きは凡夫の事である、佛弟子たるものが假にも斯る念を起してはならぬ。○諸の衆生　此處では未だ佛法に歸依せぬ者、卽ち凡夫の境界を脫し得ぬ者のことをいふのである。○恚心を起さず　凡夫は佛法の貴きことを知らず、往々にして佛法の流布を妨ぐるやうな事をさへするものである。併しながら大乘を學ぶ者は決して彼等を憎まず、彼等の愚痴なのを哀愍して、いかにもして之を敎へ導いて佛法に歸依する心を起させやうとして常に力を盡すのである。○他の色身　他の人の姿形のことである。他の人が如何に美しい容貌をもつて居ても之に對して嫉妬の念を起すまいといふのである。○外の衆具　其の人の衣服とか裝飾品とか、乃至は家屋とか器具とかをいふのである。なほ廣義にいへば其の地位身分勢力等も『衆具』といふ中に含ませることも出來るであらう。凡て他の人が此等の點に於て吾より勝

つて居ても之に對して嫉妬の念を起すまいといふのである。○內外の法に於て慳心を起さず　人に布施するに當つて之を惜む心を起すまいといふのである。內とは心のこと、外とは物のことである。吾が知る所を人に敎へて人の惑を解くのは卽ち吾が內に蓄ふる所を施すのである。吾が財物を與へて人の貧を救ふのは卽ち吾が外に蓄ふる所を施すのである。前者を法施といひ後者を財施といふ。此の二種の施を爲すに當つて慳悋の念を起さぬことを誓ふのである。○成熟せしむるが爲に　唯だ財物を與へて其の一時の急を救つてやるのみならず、彼をして安んじて其の生活を續け得るやうにしてやるのである。○四攝法　人に布施して、其の感謝の念を起せるを緣として之を敎へ導き、佛法に歸依せしむるを『布施攝』といふ。人の惱めるを見て之を慰めいたはり、之を緣として彼を導いて佛法に歸依せしむるを『愛語攝』といふ。吾が行ひによつて世間に利益を與へ、之を緣として人を導いて佛法に歸依せしむるを『利行攝』といふ。人と共に住み共に働き、其の親愛の情を緣として彼を導いて佛法に歸依せしむるを『利行攝』といふ。尙ほ此の事に就ては後に至つて委しく說明するであらう。○無愛染心　自分が人の爲に善事を爲しても、自ら之を恃んで人に誇るやうな念を起さぬことである。○無厭足心　如何に善事を爲しても尙ほ自ら之を以て足れりとせず、更に多くの善事を爲さんと念ずることである。○無罣礙心　敎へを弘むるに當つて、其の敎ふる所に誤りがあれば其の敎へは充分に流布せずして終るものである。無罣礙心とは卽ち完全を期する心をいふのである。○衆生を攝受　一切の人を敎へ導いて、共に佛敎の中に入らしむることである。○孤獨　幼くして親を失つたものを孤といひ、老いて子を失つたものを獨といふのである。○幽繫　牢獄の中に繫がれて居る者のことである。○暫くも捨てず　之が爲に救濟の方法を講ぜずして其の儘に打棄て置くことは決してせぬ。○義を以て饒益し　正しき方法を以て其の困苦を救ひ、安穩ならしむるのである。不正なる方法によつて人を惠むとも、それは眞の恩惠とはならぬ。○捕と養　鳥や獸を捕へて賣ることを職業とする者。及び鳥や獸を飼ひ、それを殺して賣ることを業とする者である。○惡律儀　佛戒に背けるやうな惡き業を日常の定まれる職とする者のことである。○犯戒　佛戒を犯して之を改むる念なき者のことである。○棄捨せず　他人が罪を犯せるを見て其の儘に棄て置くのは慈悲心が足らぬのである。必ず之を敎戒して其の過を改めしめなければならぬ。○力を得ん時　人を敎ゆべき實力の具はらん時といふ意である。自分の實行し得ぬことを人に對して說いても人は決して從ふものではない。○彼彼の處　何れの處に於てもといふ意である。慈悲心があれば、如何なる場合でも人の過を犯したのをその儘にして置くことの出

來るものでは無い。○折伏すべきもの　彼の爲す所が道に反して居れば、之を責めて必ず之を改めしむるのである。○攝受すべきもの　彼の爲す所に少しでも善い所があれば之を認めてやり、更に善を積むやうに奬勵するのである。○法をして久住せしむ　佛法は最も貴いものであるが、之を實行する人がなければ切角の貴い教へも埋もれてしまはなければならぬ。攝受折伏の二つの道によつて佛法を世に弘め、之を信解し又實行する人が世に絶えなければ、法は久しく世に住するわけである。○天人充滿し　天上界及び人間界に生を受くるは善を積みたる報と考へらるゝのである。○惡道減少し　地獄、餓鬼、畜生等を惡道といふ。惡業を積んだ報として此等の惡道に生を受くるのである。故に佛法が普く世に弘まつて、惡業を積む者が減少すれば、惡道に生を受くる者も減少するわけである。○如來所轉の法輪　佛が絶えず法を說いて一生衆生を敎化することに力を盡さるゝのを、車輪が回轉してやまぬに比し、法輪を轉ずるといふのである。○隨轉することを得　佛の化導を贊くるために力を盡すことをいふのである。佛の說きたまへる所を更に敷衍して普く世に說き弘め、一切衆生をして悉く佛法に歸依せしむるために力を致すのが卽ち菩薩道である。○救攝して捨てず　一切衆生を救うて佛法に歸依せしめ、永く捨てぬのである。○正法を攝受して　佛の說かれたる敎へを正法といふこともあるが、此處では其の意ではなく、法とは『實在』の意である。正法とは絶對の眞理のことである。正法を攝受するとは卽ち絶對の眞理を體得することをいふのである。○終に忘失せず　勝鬘はまだ絶對の眞理を體得したものではない。併し必ず其處まで到達し得べき自信を得たのであるから、『後には必ず絶對の眞理を體得し、決して退轉することの無いやうにする』とて其の理想を語つたのである。○大乘を忘る　大乘は菩薩の道を敎へたものである。菩薩の道とは一切衆生を救護し敎化するために力を盡すことである。然るに自ら絶對の眞理を體得することに全力を打込むことの出來ぬものは、一切衆生を救ふだけの智慧と德とを具ふることの出來やう筈はない。○波羅蜜を忘る　波羅蜜といふのは梵語で、漢譯しては『到彼岸』といひ或は『度』といふ。迷へる境界を此岸といひ、悟れる境界を彼岸といふので、迷ひを脫して悟りに入ることを到彼岸といふのである。或は之を河を渡り切つて向ふの岸へ達したといふ意で『度』とも譯すのである。大乘の敎へを實行しなければ、決して悟ることは出來るものでは無いのである。○大乘を欲せず　大乘の世に弘まることを欲せぬといふ意である。自分が凡夫の境界を脫して次第に佛の境界に近づいて行く悅びを味ひ得た者は、世間に此の悅びを知らぬ者の多いことを非常に悼ましく思ふから、如何にもして大乘の敎へを世に弘めて此の悅びを多くの人に頒ちたいといふ

ことに想ひ到るのである。自分が迷つて居る間は大乘の世に弘まることを切望する氣の起るものではない。○大乘を決定せざるもの　大乘の經典をたゞ多く讀んでも、それで大乘の精神が分るものではない。能く其の教へを味ひ又自身に少しなりとも之を實行して見て、得る所がある者にして初めて大乘の精神が分るのである。そこで愈々精を勵まして修行を續くるやうにもなる。○所樂に隨ひて入らんと欲するに　所樂とは其の心に願ひ求むることをいふのである。自分の心の底には佛法を學んで煩惱を脱したいといふ要求が誰でも動いて居るのであるが、それを自分で氣附かずに空しく毎日を送るものが極めて多い。然るに何等かの機會に於て此の事に自ら氣附いたものは、佛教を信ずる者の中に入つて新しい生活を送りたいと熱望するやうになるのである。○永く凡夫地を越ゆるに堪忍せず　如何に佛教を學んでも佛の眞の御精神を解し得ず、枝葉の問題にのみ囚はれて居るものは、いつ迄も凡夫の境界を離れ切ることが出來ぬのである。○無量の大過　切角佛教を學びながら、いつ迄も凡夫のまゝで居るといふのは大なる不幸といはなければならぬ。○菩薩摩訶薩　大乘を學んで佛の境界に到達せんことを理想とし、いつ迄も努力を怠らぬものを菩薩といふ。菩薩とは菩提薩埵を略したので、菩提とは「覺」の義、薩埵とは人のことである。されば正しき覺を得べく努力する人を菩薩と稱すべきである。

次に摩訶薩は摩訶薩埵の略で、摩訶とは大の義である。それで摩訶薩を譯して『大士』といふ。即ち大なる志をもつて居る人といふ意である。後には必ず佛となつて、一切の人を救ひたいといふのであるから、此より大なる志はないわけである。○此の大受を受く　此の十ヶ條の實行を誓ふのである。

此の十大受の說は勝鬘經の特色の一と見らるゝもので、大乘の教へを學ぶ者は誰も皆よく心得て置くべき事と思はれる。先づ第一は佛戒に就ての考へ方であるが、戒には大乘戒と小乘戒とがある。此の二種の戒は佛が戒を與へらるゝ趣意に於てちがひがある。隨て戒を守るに就ての心得に於ても等差が生ずるわけである。小乘戒の方は「汝等は皆凡夫であつて常に煩惱に役せられて居るのであるから、其の煩惱を打拂つて淸淨なる心とならなければならぬ」といふ趣意で說かれたものである。大乘戒になるとそれよりも更に積極的で、「汝等は修行次第では佛とも成り得べきものである。佛と成るべきものが其の行ひに少しでも缺點があつてはならぬ。故に努めて其の缺點を除いて智を磨き德を積み、萬人を教化し得るやうなものになるべきである」といふ趣意で說かれたものである。されば小乘戒を聽いたものは「自分等は凡夫であるから、大に戒めて過失の少いやうにしやう」といふ氣になる。大乘戒を聽いたものは『自分等は一點

の過失もないやうな立派な者になつて、世のため人の爲に大に力を盡さなければならぬ」と自ら勵むやうになる。今吾等が大乘戒と小乘戒を比べて見ると、其の戒の條目に於ては別段かはりの無いやうなものも隨分多いが、其の根本精神に於て差があるのである。例へば同じく『殺すなかれ』と戒めらるゝのでも、小乘戒の方では『凡て他の者の生命を斷つといふことは大なる罪である』とのみ說かれてあるが、大乘戒になると『汝等は人を救ひ人を活かすために力を用ゆべきものである。然るに人を殺すといふのは、汝等の平常學ぶ所の精神と根本的に相反するではないか』と戒めらるゝのである。

それ故に能く大乘戒を學んで能く之を守る者は、世を濟ひ人を導くところの大なる力を具ふるやうになれるのである。梵網經には戒の大切なることを說いて

此は是れ佛の行處なり。智者能く思量せよ。

とある。更にまた

計我著相の者は是の法を信ずること能はず。滅盡取相の者も亦下種の處に非ず。

とある。計我とは自己一身の利害得失のみを考へて居ることである。著相とは差別相に執著するといふことである。差別とは自他を差別し損得を差別することである。されば著相とは『自分さへよければ他人はどうでも構はぬ』といふ考へをどうしても捨てられぬ者のことである。此の如き利己的の者には佛の戒を守る心は起らぬのである。次に滅盡といふのは世間の物事に一切心を止めぬことである。此の世は假の世であるから、どうなつても構はぬと考へて居ることである。取相とは此の如き人生觀を固執して改めぬことである。斯ういふ人は世間がどうなつても宜いといふのであるから、世を救はうとか人を幸福にしてやりたいとかいふ心が無い、卽ち慈悲心の缺けた人である。是も下種の處ではないといつてある。下種とは田畑に種を播くやうに、敎へを與へることをいふのであるが、此の如く人生を冷やかに視て居る人には佛の大乘の敎へを信ぜしむることがむづかしいといふのである。さて其の次に

菩提の苗を長じ、光明世間を照さんと欲せば應に靜かに諸法の眞實の相を觀察すべし。

とある。菩提とは智慧のことで、菩提の苗を長ずるとは卽ち智慧を開發せしむることである。而して其の智慧の光りをもつて世間を照して、世間の多くの苦み惱めるものを救ひ得るやうな身となりたいと思ふならば靜かに諸法の眞實の相を觀察せよとある。諸法とは天地間の萬有をいふのである。吾等人類も、吾等の周圍の事物も皆此の『諸法』といふ中に含まれて居る。靜

かに一切の事物を觀察して見ると、此の天地の間に一物として孤立するものは無い。日の光りや清い空氣や、水や土に養はれて草も木も發育するのであるが、其の木の葉も草の葉も皆酸素を吐いて其の周圍の空氣を淨める働きをして居る。日の熱に招かれて海や河の水は蒸氣となつて虛空へ上つて行くが、やがて又雨となつて降りながら空中の汚れを洗ひ、又地中へ入つて草木の種を養ふのである。人々も國の力に護られて毎日を安らかに送つて行けるが、又人々の働く力が集まつて國の繁榮を作るのである。凡そ此の天地間に孤立するものは一つも無く、皆相依り相扶けて其の存在を保つのである。存在するといふことは實に『共存する』といふことである。

斯う考へて來ると一身の利害得失のみを計量するのは勿論間違つたことであるが、さりとて獨り一身を潔くして世俗の外に超然として立ち、世の多くの人の苦み惱んで居るのを冷眼視して居るのも決して正しいことではない。佛の吾等に與へられたる大乘戒は斯る兩極端を匡すのに最も大なる力となるものである。其の一二の例をいへば、大乘戒の中で『快意殺生戒』とか『故心妄語戒』とか、或は『放火損生戒』とかいふのは自己の欲望を遂げんが爲に累を他に及ぼすことを戒められたものであるが、『貪財惜法戒』とか『不救存亡戒』とか、乃至は『慢人輕法戒』とかいふのは他人に對して冷淡であつて、慈悲心の缺けたのを戒められたものである。故に戒が能く守られて行けば、自然と人々が佛の大慈悲の心を吾が心として世に立ち人に接するやうになるわけである。されば梵網經に持戒の肝要なることを說いて

是故に諸の佛子、宜しく大勇猛を發し、諸佛の淨戒に於て護持すること明珠の如くすべし。

といつてあるのである。今勝鬘のいふ所の『所受の戒』とは勿論此の大乘戒のことである。勝鬘は今日より大乘の修行を積んで佛の境界に到達するまで決して大乘戒に背くやうな心を起すまいと誓つたのである。

此處で特に注意すべきは『犯心を起さず』といふことである。犯さぬのは勿論であるが、たゞ犯さぬといふだけでは無い、犯さうといふ心を起すまいと誓つたのである。汚れた行ひを愼むことは勿論大切であるが、其の行ひに汚れた所が無くなつても、其の心の底まで淨くなるのにはなほ更に多くの努力を要するのである。たとへ一言一行盡く佛戒に背かぬやうになつたとて、それで安心することは出來ぬ。心の底から佛戒と一致するまで努めなければならぬのである。吾等の周圍の事情は限りなく變化するものであるから、心の底に少しでも汚れた點がある

と、今まで幸にして一も汚れた行ひをしずに過して來ても、亦何等か特別の事情に誘發せられて、汚れた行ひをせまいものでも無い。何より大切なのは心の持ち方である。中庸に

君子の及ぶ可からざる所は其れ唯だ人の見ざる所か。

とあるのも、要するに其の心が能く正道に合するものにして初めて眞の君子であるとの意である。今勝鬘は佛戒を守るのは勿論のこと、之に背くやうな心さへも起すまいと誓つた。此の如くであれば必ずや其の周圍の人々にも大なる感化を與へ、共に正しき道に嚮はしむることが出來るであらう。梵網經に

廻して以て衆生に施し、共に一切智に向はしめん。

とあるのが大乘戒を守る者の理想であるが、勝鬘の如きは必ずや此の如き理想を實現することが出來たであらう。

十大受の第二は『諸の尊長に於て慢心を起さず』といふことである。慢心とは輕慢の心で、卽ち恭敬の心と相反するものである。凡ての尊長に對して常に恭敬の心を起さぬといふのは易きに似て頗る難いことゝ思はれる。孔子も

君に事ふるに禮を盡せば人以て諂へりと爲す。

と歎息した。上に居る人の缺點を見つけ出して語りあふのが俗人の常であるから、孔子の如く恭敬の念の厚い人を却て諂諛の者の如くに評したのであらう。今此處には唯だ諸の尊長とあるが、之を大別すれば二種となる。其の一種は學德等に於て吾よりも長ぜる者である。其の二は地位職業若くは年齡等に於て吾よりも長ぜる者である。其の第一のものは卽ち吾が師たり先輩たる人々であるが、たとへ學德に於て長ぜる者といへども、佛でない限りは多少の缺點のあるのは免れ難いことである。それ故に若し其の缺點を數へ立つることになれば何人も完全な人といふものは無くなるであらう。さりながら學識にせよ乃至は德行にせよ、人より長ずるまでになるには非常なる苦心努力を積んだものであるから、其の苦心努力に對しては充分に尊敬の念をもたなければならぬ。又其の人の世を導き人を化する點に於ても充分に之を尊敬しなければならぬ。

又人の長所を認めて之を尊重する者はたゞ之を尊重するだけで無く、自身も之に倣はうとする念を起すから、結局自身が進歩して行くのである。之に反して他人の短所のみを數へて居る者は、自身の心にも更に向上發展を望む念が無くなつて行くものである。唐の韓退之が『原毀』といふ文の中に

古の君子は其の己を責むるや重くして以て周く、其の人を待つや輕くして以て約なり。重くして以て周きが故に怠らず。輕くして以て約なるが故に人善を爲すことを樂しむ。

といひ、更に進んで當世の人の態度を批判して

其の人に於けるや曰く、彼は是を能くすと雖も其の人稱するに足らず。彼は是を善くすと雖も其の用稱するに足らずと。其の一を擧げて其の十を計らず、其の舊を究めて其の新を圖らず、恐々然としてたゞ其の人の聞ゆる有らんことを恐る。是れ亦人を責むること已に詳ならずや。

といひ、斯くては自己も決して進歩するものではないと斷じて

未だ其の己を尊くするを見ざるなり。

といつたが、此の言は今の世にも甚だ適切に思はれる。勿論人の上に立つて人を教へ導くとか或は人に對して道を說き教へを傳ふることを業とする者は、常に嚴しく己を責めて過失の無いやうに努め『自分の實行し得ぬことを人に對して說くのは、極めて耻づべきことである』と考へなければならぬ。さりながら人の下に屬して其の指揮を仰ぐとか、或は又人の教へを受くるとかいふ場合には、たとへ其の人に幾多の過失があつても其の指示するところ、其の教說するところに貴ぶべく重んずべきものがあるならば、深く之に感謝して、教へられた所を必ず實行しやうといふ心をもたなければならぬのである。斯くして益を求めて已まぬによつて、自分が進歩するのである。

次に地位や年齡等の關係に於て自分の上に在る者に對して之を尊重することは、社會の秩序を保つために必要なのは申すまでも無い。殊に君父の恩の重いことは何物も之に比すべきものは無い。親が無ければ自己は無い。又一國を統治する帝王がないならば、國民たるものは一日と雖も安らかに其の生を保つことは出來ぬ。故に佛は

慈父悲母長養の恩によつて　一切男女皆安樂なり。慈父の恩高きこと山王の如く、悲母の恩深きこと大海の如し。——心地觀經

とも又

國に君なきは猶ほ體に首無きが如し、以て久しく立ち難し。——自愛經

とも敎へられ、此等の恩を知ることが凡ての善業の根本であることを說いて

恩を知る者は生死に在りと雖も善根を壞らず、恩を知らざる者は善根斷滅す。

——大方廣不思議境界經

ともいはれたのである。其の他社會の重要なる地位に立つ人は、何れも其の努力によつて多くの人の幸福を增進する働きをして居るのであるから之を尊重しなければならぬ。但し時としては才能もなく德行も無くして僥倖によつて重要なる地位を占めて居るものも無いことはない。此の如き者に對しては如何なる考へをもつべきであるか。

それにも皆輕慢の念を以て臨んではならぬのである。吾が日本は特別に貴い國體であるから、吾が國の皇室は全く別であるが、世界には帝王でありながら德の足らぬ者も決して稀ではない。さりながら佛敎の思想からいへば、苟くも國王たるものを輕んじ侮るべきではない。人の生命は現世に限られぬものであるから、前世に於ける善惡の業が皆其の報を現世に生ずるものと見らるゝのである。されば國王と生るゝ者は前世に於て十善を修したものと考へられて居る。其の他尊榮豪貴の家に生るゝもの、何れも前世に於ける善業の報であると考へて來れば、之を輕んじ侮るべきではない。但し人の上に立つ者が誤つた行ひをすれば其の下に立つ者が皆其の禍を受けなればならず、又其の人自身も後には必ず其の報を受くべきであるから、之を諫めて其の非を改めしむるやうに心を盡すのは極めて親切なることである。上の人の意を迎へて其の援助保護を求むるといふのは最も卑しい心である。されば

慈無くして詐はり親むは是れ彼が怨なり。——涅槃經

と戒められてある。唯だ自分より上に在る人の缺點を數へて之を非難し、之を世間に吹聽するのは『自分は彼の下に在るけれども、實は彼より人物に於て勝つて居る』といふことを說くことになつて、甚だ卑劣なる業である。尊長に對して決して慢心を起さず、若し其の人に過失があれば親切に之に忠告するのが佛弟子たる者の取るべき當然の態度でなければならぬ。

十大受の第三は『諸の衆生に於て恚心を起すまい』といふことであるが、此の衆生といふのは勿論未だ佛法の何ものなるかをも知らぬ者、卽ち凡夫を指して居るのである。凡夫を相手として佛の正法を弘むるのは實に容易な業ではない。如何に熱心に說いても全く振返つて見やうともせぬ者がある。或は嘲る者もある罵る者もある。甚しきは種々の迫害を加へんとするものさへある。之を盡く忍ぶといふことは容易でないが、併し佛は如何なる惡人にも、如何なる愚者にも佛性の具はつて居ることを認め、如何なる者でも導き方によつては皆佛の境界に近づき

得べきものであると仰せられた。斯る貴い佛性を具へて居ながら、之に氣附かずして惡業を重ねて居るといふのはまことに憫むべきものである。故に之に對して瞋恚の念を生ぜずして、唯だ哀愍の念を生ずべきである。法華經の中に出たる不輕菩薩が如何なる人に出逢つても『我深く汝等を敬ふ』といつて之を禮拜したといふのも、要するに彼等が皆貴い佛性を具へて居ることを自覺させたいといふ大なる慈悲心から出たものである。苟くも佛弟子たるものは誰も皆斯ういふ心をもたなければならぬ。

又彼等に對して教へを說く場合でなく、普通の交際をして居るのでも、凡夫といふものは利己心の甚だ强いものであるから、優しくすれば必ず横暴なことをする、嚴しくすれば必ず怨みを懷くのが常である。孔子が

之を近づくれば則ち不遜なり、之を遠ざくれば則ち怨む。

といつたのは眞に凡夫の常態を能く悉されたる語である。朱子が之に註して

唯だ莊以て之に臨み、慈以て之を畜へば則ち二者の患無し。

といつたのも極めて適切である。吾等が道を修め教へを聽くのは、吾等自身のためでは無く、之を以て世を益し人を益せんとするが爲であるから、如何なる小人に對しても決して瞋恚の念を起すことなく、たゞ深く之を愍んで之が教化と匡正とに力を盡さなければならぬ筈である。太賢といふ人の『梵網經古迹記』には常に三事を念じて居れば、決して瞋恚の念は起らぬといつてある。それは

一には、此人の心性はもと清淨であるが、無明の酒に醉ひ煩惱の鬼に憑かれて此の如き所作をなすので、まことに愍むべきものであると思ふこと。

二には、元來自分は衆生の爲にせんとの本願を立てたのであるから、生死の大苦すら畏れてはならぬのである。況してや此の如き小苦は固より忍ばなければならぬと思ふこと。

三には、一切衆生には皆恩がある。此人も自分のために何等かの役に立つて居るにちがひない。其の恩を忘れて妄りに瞋りを發してはならぬと思ふこと。

勝鬘夫人の心も必ず此の如くであつたであらう。吾等も常に之を心に銘記して居たいものである。

十大受の第四は他人の『色身及び衆具』に對して嫉妬の念を起すまいといふのである。色身

に對する嫉妬といふのは他人の容貌が自分よりも優れて居るのを妬むことである。衆具といふのは衣服調度とか住家とか庭園とかをいふのであるが、更に汎い意味でいへば其の人の地位とか身分とか勢力とかいふ類のものを含むと見て宜いわけである。苟くも吾より優れたる者に對しては其の事の大小を問はず、之を讃歎するのが當然のことである。又他人が幸福であれば共に之を喜んでやらなければならぬ筈である。然るに凡夫の習ひとして自分より優れたもの、或は自分より幸福に見える者に對しては兎角に嫉妬の念を生ずるのである。聖德太子の憲法第十四條に固く嫉妬を戒められて

群臣百寮嫉妬有ること無かれ。我現に人を嫉めば人も亦我を妬む。嫉妬の患は其の極まりを知らず。

とあるが眞に適切なる訓戒である。嫉妬の念が强くなつて來れば、如何なる方法手段を講じても、他の人の幸福を妨げ、他の人の地位なり勢力なりを奪つて自ら快しとするやうになる。斯くして妨げを受けた者は又其の復讐のために有らゆる方法をもつて一方の幸福を奪ひ地位勢力を奪はうとする。斯る爭鬪の結果が世間一般に恐ろしい慘害を及ぼすことは古來から極めて多くの實例がある。實に太子の仰せられた通り、嫉妬の患は極限のないものである。太子はなほ之に續いて

智己に勝れば則ち悅ばず、才己に優れば則ち嫉妬す。是を以て五百歲の後に乃ち賢に遇はしむるも、千載にして以て一の聖を待つこと難し。其れ賢聖を得ずんば何を以てか國を治めん。

と仰せられたが、いかにも其の通りである。互に他の缺點を數へて相排擠して居ては、才のある人も其の才を伸ぶることが出來ず、智のある人も其の智を働かすに由が無い。此の如き險惡なる空氣の中からは賢人も聖人も現はれて來やうわけは無い。孔子の言に

君子は人の美を成して人の惡を成さず、小人は之に反す。

とあるが、互ひに人の美を成す心を以て交はれば、世間を利し人々を幸福にするやうな事業も必ずや起つて來るであらう。大乘佛敎を學ぶものは固より志を此に存すべきで、梵網經の中には

菩薩は應に一切衆生に代りて毀辱を加ふるを受け、惡事は自ら己に向はしめ、好事は他人に與ふべし。

とあるが、彼の嫉妬によつて相排斥しあふものは此の心と正反對の心をもつて居るのである。

まことに深く慎むべきは娼嫉の念である。

但し世間には僥倖にして地位勢力を得、意氣揚々として居るものも決して少くない。さういふ者を見ると憤慨したくなるのが普通の人情である。併し誰でも自分が其の地位や勢力に相應する實力をもつて居るか否かは、或る程度まで自分でわかるものである。されば如何に外面を粉飾して居ても、その地位勢力を維持すべき實力の無いものは、自ら恐れ危ぶむの念があつて、常に其の胸中に平和が無いのである。此の如き生活は少しも羨むべきものではない。老子の言に

持ちて之を盈すは其の已むに如かず、揣りて之を鋭くするも長く保つべからず。
金玉堂に滿つるも之を能く守ること莫し。富貴にして而して驕れば自ら其の咎を遺す。

とある。器を手に持つて、それに水を滿たしても少し身を動かせば必ずこぼれる、いつ迄も水が滿ちて居るものではない。又鉛筆の先などを小刀で削つて鋭くすれば、すぐに折れてしまふもので、其の鋭い尖端がいつ迄も鋭くて居るものではない。實力の無いものが地位勢力を保つ有樣は正しくその通りである。唯だ之が爲に哀愍の情を生ずべきのみである。少しも之を憎んだり妬んだりするには及ばぬことである。世にも人にもよく知られずに獨り其の道を樂むのが眞の樂みである。昔の連句の中に(七部集の中のいづれかにあると思ふが)

門しめて默つて寢たる面白さ

といふのがある。此間の消息は唯だ道を樂む者のみの知り得べきものである。

十大受の第五は『內外の法に於て慳心を起すまい』といふのである。これは人に施す! 當つて決して慳悋の念を起さぬことを誓つたのである。內といふのは自己の久しい努力によつて得たる智識とか藝能とかいふ類のものである。外といふのは金錢とか物品とかのことである。要するに是れは財施と法施とをするに就ての心の持ち方をいふのである。人の苦み惱めるを見て少しも之が爲に心を動かさず、力を出して之を救はうともしない者は固より佛の御心にはかなはぬ者であるが、たとへ之を救ふにしても唯だ救つたといふだけではまだ佛の御心に一致したとはいはれぬ。之を救ふに際して少しでも救ふことを惜むといふ念なく、大なる悅びの心を以て救ふのが眞の菩薩行である。維摩經の中に『來り乞ふ者は吾をして善根を積ましむる者であるから、之に對して感謝すべきである』といふ意味のことが說かれてあるが、まことに貴い教訓である。俱舍論には布施が凡そ八種に分けてある。

一には隨至施。二には怖畏施。三には報恩施。四には求報施。五には習先施。六には希天施。七には要名施。八には心を莊嚴するが爲、心を賢助するが爲、瑜伽に資するが爲、上義を得るが爲の施。

第一の隨至施といふのは布施を求めて來るのを斷りかねて、心には好まぬながら據なく施すことである。第二の怖畏施といふのは、若し之を斷れば何等かの危害を加へられさうな恐れがあるので、已むを得ずして施すことである。第三の報恩施といふのは以前に受けた恩德に報ずるために喜んで施すことである。第四の求報施といふのは今施して置けば後に至つて必ず何等かの報酬が得られやうと考へ、後の利益のために施すことである。第五の習先施といふのは今迄の前例によつて、施すことの善惡は深くも考へずに施すことである。第六の希天施といふのは現世に於て善事を爲せば、來世は天上界に生れるであらうといふ希望を以て布施することである。第七の要名施といふのは布施をしたといふことが世間に普く知られて、名聲を博するであらうことの豫想をもつて施すことである。以上七種の布施の中で報恩施は稱揚すべきものであるが、其の他は何れも善根とはならぬものである。たゞ第八種の布施のみが眞に佛の御心にかなへる布施である。心を莊嚴するとは心に美しい德が具はること。心を賢助するとは心中の煩惱が自ら除き去られて、正しい智慧が具はるやうになること。瑜伽とは元來『物と相應ずる』といふ意であるが、それが轉じては『能く其の境に安んじて騷がずあせらぬ』といふ意になるので、禪定といふのと同義である。上義とは最上の境界といふ意で、卽ち佛の如き覺を得ることである。前にもいつたやうに常に布施をするものは、之によつて慈悲の念が愈々長じて來て、一切の煩惱が掃ひ去らるゝから、布施をする行ひの中に何にも換へられぬ滿足が含まれて居るので、他より報酬などを受くる必要は全くない。此の事をよく知つて布施行を樂むものは、佛弟子と稱せられて耻かしからぬものである。

併しながら普通の人情としては、たとへ施すにしても輕々しくは施したくないといふ念が起る。財產を積むのには必ず苦心努力が之に伴ふ。智慧を磨くとか學藝技術を學ぶとかいふのにも盡く皆多くの苦心努力を要するものである。それ故に斯くまで苦しんで蓄へたものを輕々しく人に施すのは惜いといふやうな氣が起るのである。唯だ佛のみは少しも惜まるゝことなく、久しく難行苦行を重ねて覺られた所を盡く打明けて吾等のために說かるゝのである。されば法華經の方便品には

自ら無上道、大乘平等の法を證して、若し小乘を以て化すること乃至一人に於て

もせば、我則ち慳貪に墮せん。此の事爲めて不可なり。

とある。證するとは卽ち悟ることである。自身が絶對の眞理を悟りながら之を人に傳へず、人にはたゞ淺い教へのみを與へて居るならば、それは法を惜むものであつて、大なる罪であると仰せられたのである。又大乘戒の中に於ては、物を與へたり法を說いたりするのを惜むのは大罪であるといつてある。例へば梵網經には

菩薩、一切貧窮の人の來り乞ふを見ては、前人の須むる所に隨ひ一切給與すべし。而るに惡心嗔心を以て乃至一錢一針一葉をも施さず。法を求むる者有るも、一句一偈一微塵許も說かず、而も反て更に罵辱するは、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

とある。波羅夷といふのは『不共住』の意である。此の如き罪を犯したものは他の佛弟子が共に住むことを許さず、絶對に之を排斥するといふのである。是れは全く財施や法施を斷つて、而も布施を乞ふものを罵り辱むるといふのであるから勿論重い罪には相違ないが、自分の心中に一點慳悋の念があると、此の如き罪を犯すやうにならぬとも限らぬのであるから、深く之を戒むべきである。又十住心論には

菩薩の身は應に藥樹の一切根莖枝葉を取ると雖も、而も我に由りて益を得たりと分別せざるが如くなるべし。

といつてある。吾等が病を治するために藥樹を用ゆる際に、その藥樹の根莖枝葉を盡く取つても、藥樹は默然として取るに任せて居る。一言たりとも『我によつて病を治し得たのを感謝せよ』などゝはいはぬのである。大乘の教へを學ぶ者は斯ういふ心にならなければならぬといふのであるが、まことに貴い教訓である。今勝鬘の志す所も此に在るのであらう。以上の五ヶ條は主として自己を愼むといふ點からいつたのであるが、以上は人に對する行爲に就ての誓ひで、それが四ヶ條ある。

卽ち十大受の第六は『一切の財物を自己のために貯へず、貧苦の衆生を成熟するための役に立てやう』といふのである。成熟するといへば彼等をして其の貧苦の境界を脫して、安穩に生を送り得るやうにしてやることであるが、是れはまことに容易ならぬ業である。貧しい者と一概にいつても其の中には種々の性質、種々の事情のものがあるのは勿論であるが、先づ十中の八九までは久しく貧苦の底に沈んで居ると其の心が甚しく損はれてしまひ、一時のことばかり考へて永久の計などは立てぬやうになるものである。されば其の貧苦を憐む人が無ければ世を

呪ひ人を呪ふのみであるが、時として財を施して其の貧苦を救つてくれる人があれば、一時の苦を脱し得たるに安心して其の他の事は思はず、與へられた物が無くなつてしまへば、又『誰か救つてくれさうなものである』と第二の救ひを待ち設けて居るのみである。人の情に感激して將來の努力を誓ふといふやうな者は始んど稀である。さればたゞ物質をもつて救ふのでは決して彼等を幸福にすることは出來ぬ。如何に施しても殆んど際限が無く、却て彼等の懶惰を奬勵するやうな結果になるものである。維摩經の菩薩品に、善德といふ長者の子が維摩のために戒められたことが出て居る。善德は其の父の命を受けて七日の間、多くの貧しい人に布施をしたのであるが、其の終りの日に維摩が來て

夫れ大施の會は汝が設くる所の如くにすべからず、當に法施の會を爲すべし。

といひ、法施の貴いことを細々と說いて

若し菩薩是の法施の會に住する者は大施主と爲す。

といつたとある。是れはまことに意義深き語である。徒らに多く物を施したのみでは眞の布施とはいはれぬ、物を與ふると共に必ず之に敎へを與へなければならぬのである。卽ち之に對して法施をしなければならぬのである。如何に心の正しい人でも時としては困窮することもあるから、物質によつて一時の急を救つてやることも必要であるが、一時的の救ひのみでは眞の慈悲ではない。是非とも其の一時的の救ひと共に彼等貧苦の者をして永久に安樂ならしむるやうな方針を與へてやらなければ、徹底した救ひ方ではない。それには種々の事が必要であらうが(又其の細いことは其の時々によつて多少異るべきであらうが)根本となるものは善き敎へである。彼等をして一時の安を偷まず、大に奮發して自ら動き自ら活きて行かうと思ひ定めさせるやうに、之を指導してやることが最も肝要である。勝鬘のいふ所の成熟とは蓋し此の事であらう。譬へば雜草が生えた時に鎌をもつて之を刈り去れば、一時其の葉が無くなるけれども、一雨降れば又芽が出て來るのである。若し之を根から拔き取つてしまへば再び生えて來る憂ひは無い。貧苦の葉を鎌で刈るのでなく、其の根を拔き去るやうにするのが卽ち『成熟』といふことの本義である。

次に十大受の第七は『全く己のためといふ心を去つて一切衆生のために四攝法を行ずる』ことを誓ひ、尙ほ之を行ずるために最も必要なる無愛染心と無厭足心と並に無罣礙心に就て說くのである。此の四攝法のことは前に略言したが、今少しく詳細にいつて置きたいと思ふ。此の四攝法といふのは多くの人を誘掖して、共に佛法を信ぜしむるための方法手段を四ヶ條に分けて

說いたものである。今まで佛法のことなどを殆んど考へて居なかつた者に、最初から『抑も佛法とは……』といふやうな調子で說き勸めても、容易に信心するやうにはならぬものである。先づ何よりも肝要なのは彼をして恩に感ずる心を起させることである。之が爲に四攝法といふことが案出せられたので、其の第一は布施攝である。或は財物を與へて人の貧苦を救ひ、或は人の難問題に當惑して居る時に其の相談相手になつて之が解決を圖つてやるのは皆布施である。或は人の勞役に助力をしてやるのも亦布施である。斯くして彼が感謝の念を起した時に、之を緣として佛法に歸依する心を起させるのが卽ち布施攝である。古の高僧碩德と稱せらるゝ人々が或は山野を跋涉して山を開き道を作り、或は橋を架し堤防を作りなどして多くの人に便益を與へたのは皆布施攝に外ならぬのである。多くの人が便益を得て其の恩に感ずれば、斯る大恩のある人のいふ事ならば必ず之を傾聽するから、隨つて佛法が其の地に繁昌するやうになるわけである。

第二には愛語攝である。愛語といふのは人の心の惱みを和げてやるやうな優しい言葉のことである。人は悲哀苦痛の甚しき時に於ては、たとへ其の悲哀苦痛を脫すべき方法が見出されないでも、之を他の人に訴へて、其の同情ある慰安の語を聽いたのみで、大なる力が得らるゝものである。韋提希夫人が其の子の爲に幽閉せられて悲哀の底に沈んで居た時に釋尊が之を訪うて慰められたので、夫人は全く其の悲みを忘れたといふことがある。是れは愛語の最も理想的なものであるが、吾等とても常に努めて居れば稍々それに近いことの出來ぬ筈はない。凡て人は得意の時よりも寧ろ失意の時に於て、眞面目に物事を考へるやうになるものである。されば愛語によつて慰められたのを緣として、之に佛法の貴いことを說けば、悅んで佛法に歸依するやうになれるのである。

第三は利行攝であるが、これは他の人のために役に立つやうな立派な行ひをして彼が感激の情を起した時に、之を緣として佛法に歸依せしむることである。佛敎の信仰の深い或る婦人が、嫁入りした先の夫を自分と同じやうな信仰者にしやうと思つて種々に苦心したけれども、其の夫は寧ろ無信仰を誇りとして居るくらゐの人であつたので、數年間の苦心も全く酬ゐられなかつた。ところが其の夫が或る時重病に罹つて醫師も到底むづかしいといふ程であつたが、其の妻が寢食を忘れて看護した爲に終に全癒した。此の時の健氣な行ひは其の近隣の人々まで感歎して已まなかつたくらゐであるから、夫たる者が之に感激せぬ筈はない。夫が其の妻の心盡しのほどを感謝した時に、妻はたゞ一言『イエ私の力ではありません、皆佛樣の御力です』

といつた。比の時から其の夫は妻と共に最も熱心なる佛教信者になつた。これは自分の親しく知つて居る事實であるが、此の如きは利行攝の模範ともいふべきものであらう。又子として其の親に信心を勸め、弟として其の兄に信心を勸むるといふのは餘程困難なことであるが、己の行ひを以て之を感激せしむる時には必ず其の目的を達することが出來るものである。法華經の妙莊嚴王本事品を見ると、王は最初外道に歸依して佛法を信じなかつたが、其の二子が母と心を併せて終に父王を感化し、熱心なる佛法の歸依者とならしめたことが記されてある。二子は父の前へ行つて種々の神變を現じたとある。

地に入ること水の如く、水を履むこと地の如し。是の如き等の種々の神變を現じ、其の父王をして心淨く信解せしむ。時に父子の神力是の如くなるを見て心大に歡喜し、未曾有なることを得、合掌して子に向ひて言く、汝等が師は是れ誰と爲す、誰の弟子ぞと。

地に入るとか水に入るとかいふと甚だ奇妙なことのやうであるが、要するに常人の爲し得ぬことが出來たといふ意である。言語のみを以ては子として其の父を動かすことは出來ぬが、實行を以てすれば之を動すことも出來るのである。斯ういふ例はなほ多くある。

第四は同事攝であるが、是れは特に必要なることである。同事とは自分が信仰をもつて居るからといつて世俗の人と離れず、世俗の人と共に住み共に交はり、漸々に彼等を感化して道に入らしむることである。吾は悟れるものである。汝等は迷へる者であるといふやうな態度で法を說いても、人は決して之に歸依するものでは無い。世俗の人を少しも隔てずして之と親しみ、故らに高遠なる理を說かず、日常の瑣事を語りあふ間に『君も吾もたゞ毎日を無意味に過すのはつまらぬことでは無いか、共に意義ある生活に入るために敎へを求めやうではないか』といふやうな態度で之を誘へば、次第に其の心が佛法に傾いて來る。プラトンの書の中に、久しく暗い洞穴の中に居た人が其の洞穴の外へ出て明るい日光の下に立ち、非常なる悅びを感じたことが書いてある。其の人は自分の幸福をよろこぶと共に彼の暗い洞穴の中に居る人々のことを思ひ出し、彼等にも此の悅びを頒たうと思つて再び暗い洞穴の中へ下り立ち、人々に向つて『共に光りの中に立たうではないか』といつて誘うたとある。佛法を弘むる者も此の態度でなければならぬ。自分獨り明るい所に立つて暗い洞穴を見下し、『サア早く此處へ出て來い』といつても何の効もない。是非とも自分が其の暗い中へ下り立つて人々を誘はなければならぬのである。

以上の四攝法は佛教を世に弘むるために最も大切なる方法として、昔から實行せられて來たことであるが、斯る方法を用ゐて佛教を世に弘むるのは唯だ專ら『一切衆生の爲』といふ念に出るものである。若し少しなりとも自己の爲といふ念が其處に混じて來ると、切角の努力も大なる功德を生ずることが出來ぬのである。『衆生の無邊なるも度せんと誓願す』といふのは、苟くも菩薩道を行ぜんと志すものゝ常に心に期すべきことであるが、此の志がありさへすれば如何に多くの善事を爲しても、決してそれを以て自ら足れりとすること無く、益々以て自ら勵み自ら努むべきである。故に此の四攝法を行ずるに就て無愛染心と無厭足心と無罣礙心とをもたなければならぬといふ事になるのである。

〔茲に謹んで講述者の不注意を御詫び申さなければならぬ。前に出した經文の中に『無愛染心無罣礙心を以て』とのみあつてその中間に『無厭足心』といふ一語を脱したまゝ印刷に附してしまつた。他の事とはちがひ、大切な經文を斯く麁末に取扱つたのはまことに大なる罪である。此の事について陳謝すると共に今後此の如き過失を再びせぬやうに精々注意するつもりである。〕

此の三者の第一は無愛染心である。愛染といふは自己若くは自己の周圍の者の長所とか美點とかに執著して、之について得意の念を起し、世間に對して之を誇り示すことである。吾等が如何に善事を行じたといつても、佛の大慈悲に比すれば固よりいふに足らぬものである。それを自ら恃みとして人に誇り示すやうな念を生ずる時は、若し人が之を認めぬに於ては必ずや憤慨し怨望するやうにもなるであらう。斯くては切角の善事が却て罪を作る元ともなるわけであるから、深く之を慎まなければならぬ。西郷南洲の遺訓に人を相手にせず天を相手にすべし』とあるのは、世によく知られて居るが、それに續いて

天を相手にして己を盡し人を咎めず、我が誠の足らざる所を尋ぬべし。

とあるは流石に達人の語である。苟くも佛法を世に弘めんとする者は固より是れだけの覺悟がなければならぬ。又智度論の中には愛染心の害を說いて

自法に愛染するが故に他人の法を毀訾す。

とある。是れは現今の宗教界などには殊に適切なる訓戒である。勿論各自が其の信ずる所を貫くのに熱心であることは結構であるが、それと同時に自分の信解が果して完全なものであるか、或は佛の御本意を取りちがへて居る點がありはせぬかと常に自ら反省することも極めて必要である。此の反省が足らずして自己の勢力を張ることにのみ熱中する結果として、種々の紛

爭を生じた例は實に夥しくある。栂尾の明慧上人が『今の世の佛法が果して佛法ならば、佛法ほど淺ましいものはあるまい』と歎息したといふのも無理ならぬことである。今此處に佛法を世に弘むるために必要なる第一の條件として無愛染心を擧げられたのは眞に適切なることである。

第二には無厭足心である。是れは如何に多く善事を行つても之を以て自ら足れりとせず、更に進み求めて已まぬ心であつて、前にも度々いつた通り菩薩たるものは皆斯くあらねばならぬのである。菩薩を稱して摩訶薩といふが、摩訶薩とは『大なる心を有する人』といふ意である。智度論には之を說明して、

此の人の心能く大事を爲し、不退不還の大勇心の故に摩訶薩埵と爲す。

とある。又嘉祥大師の法華經疏には十地論を引いて、

大に三種有り、願大に行大に、衆生を度すること大なり。

とある。此の如くに大なる心をもつて大乘を學び、必ず佛の境界に到達せんことを期するのであるから、如何に多くの人を敎化して、如何に多くの人に崇敬せられても、更に之を以て足れりとせぬのである。たとへ大乘を學んで自ら得る所あり、又世に立ち人に接する間に幾多の善事を爲し得たりとも自ら之を以て足れりとする念が起れば、それで進步は止つてしまふのである。戒むべきは自ら足れりとするの念である。孟子は齊人高子といふ者を戒めて、

山徑の蹊も間らく介然として之を用ゆれば路を成す。間らく用ゐざることを爲せば茅之を塞ぐ。今茅子が心を塞げり。

といつた。誰も步く者がなければ山間の小路には雜草が一面に茂つてしまふ。それと同樣に、進んで學ばうといふ念の無くなつた者の心の中には雜草が一面に生え茂つてしまふのである。無厭足心の大切なことを說かれたのは、大乘を學ぶものに取つて特に適切である。

第三に擧げられたのは無罣礙心である。罣礙とは敎へを世に弘むるのに障りのあることをいふので、其の障りを盡く除き去らうといふ心が卽ち無罣礙心である。聖德太子の義疏には此の三心を說明して

無愛染心とは謂く無貪心なり。無厭足心とは謂く無瞋心なり。無罣礙心とは謂く無癡心なり。

とあり、貪瞋癡の三毒を除くことによつて此の三心が成立つといつてある。是れは至つて簡單ながら大に味ふべき語である。若し貪る心があれば、自分が幾分なりとも世の爲人の爲に盡し

た際に、直ちに其の報として名譽とか地位とか權勢とかを得たいと思ふやうになるから決して無愛染心は成立たぬのである。又若し瞋る心があれば、自分の努力を世間の人が認めぬやうな場合に忽ち瞋恚の念を生じて其の努力を中止してしまふから決して無厭足心は成立たぬのである。終りに愚癡の心が無くなつて無罣礙心が成立つといふのは殊に精到なる觀察と申すべきである。愚癡とは卽ち智慧の足らぬことである。智慧の足らぬものは佛の大乘の教へを學んでも佛の御心の在る所を完全に解することが出來ず、私意を交へて解する所が多くなるのは據ないわけである。斯く私意を加へたことを世間に對して說き弘むるならば、充分に世間の人を利益することが出來ぬから、自然其の教へも充分に流布せずして終らなければならぬ。是れは佛弟子として最も戒めなければならぬことである。吾が說く所は佛法なりと稱しながら、佛の御本意に一致せぬことを聊かたりとも交へて說くのは、人を欺き佛を欺くもので、まことに輕からぬ罪である。孔門の高足たる曾子も

吾日に吾が身を三省す。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。習はざるを傳ふるか。

といつた。傳ふるとは孔子の說を世間の人に說き傳ふることである。習ふとは充分に習熟して、師の意の在る所を明かにすることである。其の努力が足らずして、萬一師の說を誤り傳ふることがあつてはならぬと自ら戒めて居るとの意である。今無罣礙心とあるのも亦それと同じ意である。飽くまでも深く究め精しく思ひ、佛の御本意のある所を明かにし得て後、之を世に傳へんことを期するのである。斯くすれば其の法は必ず普く世に弘まつて多くの人々に洪大無邊なる利益を與へ得るであらう。

次に十大受の第八は『世間の一切の苦み惱める者を正しき方法を以て救濟せんこと』を誓ふのである。慈悲の念が心の中に充滿して居れば、必ず其の行爲に現はれなければならぬ。若し困苦窮厄に在る者を眼前に見ながら之を打棄て置くものは、自ら慈悲心の足らぬことを證する者といふべきである。『終に暫くも捨てず』とあり、また『必ず安穩ならしめんと欲し』とあるは卽ち其の慈悲心の自ら溢れて救濟の行爲となることを示せるものである。此の條に於て最も注意すべきは『義を以て饒益する』といふことである。義を以てするとは正しき方法に依ることをいふのである。たとへ彼を憫れむ心があつて之に救濟を與へても、其の方法が正しくなければ、却て彼に累を及ぼし彼の不幸を增すことになるから、深く此の點に注意しなければならぬ。例へば熱病に罹つて快癒に向ふものは非常に食慾が盛になるが、その時多く食へば必ず身

を害するから、醫師は嚴しく之を戒むるのである。併し稚い兒などは聞き分けが無く泣いて食物を求むるので、教養の足らぬ母親などはツイ愛情に惹かされて食物を多く與へ、その爲に愛兒を死に陷れた例さへ少からずある、世間の人を救護する者はいつも斯る過失を嚴しく戒めなければならぬ。貧しい者にたゞ物を與へて、それで完全に救ひ得たと思ふのは誤りである。救ひの手の吾に及ぶのを待ち設けてのみ居て、自ら努力して其の窮境を脱出しやうと考へぬものも世間には隨分多い。之を教へ之を戒めて自ら發憤努力せしむることに力を用ゐず、たゞ漫然と之に物を與ふるのは慈悲の心の足らぬ者の爲す所である。人をいたはるのみが慈悲ではない、人を戒むることが大なる慈悲であることを思はなければならぬ。涅槃經の中に

慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり。能く糾治せんは是れ護法の聲聞にして、眞の我が弟子なり。彼が爲に惡を除くは卽ち是れ彼が親なり。

とあるのは、佛の正法を弘むるために奮闘する場合の心得として說かれたことであるが、その他の場合にも亦應用せらるべき金言である。『衆苦を脫せしめて、然る後に捨てん』といふやうに、一時の急を救ふのでなく、永遠のことを考へてやるのが眞の慈悲である。姑息の愛に陷つて永遠の事を誤らぬやうに深く意を用ゆべきである。

十大受の第九に於ては先づ『不正なる業を以て活計を立てゝ居る者と、佛戒を犯して改むることを知らぬものを必ず教誨して改心せしめやう』とある。其の不正なる業の例として捕と養と擧げてあるが、凡て殘忍なる職業とか、世間に害を及ぼし多くの人に迷惑をかくる如き職業は皆此の『惡律儀』といふ中に含まるゝのである。大乘戒の中には『惱他販賣戒』といふのがあつて、人を惱まして利益を收むる一切の業を嚴しく禁ぜられ、自ら之を爲すのは勿論、人を助けて之を爲さしむるのも亦大なる罪であると說かれてある。また瑜伽論の中には『六種の活命』といふことが出て居る。活命とは卽ち職業のことで、此の六種は正しき職業であるといふのである。それは

一には農を營む。二には商賣す。三には牧牛す。四には王に事ふ。五には書算計數及び印を習學す。六には所餘の工巧業處を習學す。

といふのである。此の中に『印』とあるのは一種の宗教上の儀式であつて、要するに此の第五は學問教育或は宗教を專門とすることである。而して第六は工業其他種々の藝術を專門とすることである。是れは二千餘年前の印度のことであつて、今日は全く時勢がちがひ、世間も著しく複雜になつて居るから、正しき職業の數も勿論夥しく多くなつては居るが、其の『正しい』

といふことの根本の精神は變らぬ筈である。即ち多少なりとも世を益し人を益し社會の進歩を促し得べき業を擇むべきことを主として說かれたものである。

又優婆塞戒經には事業によつて得たる利益を如何に處分すべきかに就て懇ろに說いてある。其の文には

優婆塞戒を受けて先づ世事を學び、既に學びて通達せば、如法に財を求めよ。若し財物を得ば應に四分と作すべし。一分は應に父母と己が身と妻子眷屬とに供すべし。二分は應に如法の販轉を作すべし。餘の一分を留めて藏積せよ。

とある。優婆塞とは世俗の男子のことであるから、先づ佛前に誓つて必ず佛戒を守るべき決心を爲し、それより世事を學ぶのである。世事とは職業に必要なる準備教育のことである。その修行が出來てから專門の職業に就くのであるが、それには『如法に』といふ條件がついて居る。如法とは正しき道に從ふことである。不正なる方法によつて利益を收むることは斷じてならぬのである。さて其の利益を四分して、その四分の一は生活費に宛て、四分の二は資本金の中へ繰り入れ、殘りの四分の一を貯蓄せよといふのである。此の割合などは時代によつて變化すべきこと勿論であつて、今日此の敎へを墨守するには及ばぬことであるが、佛敎に於て生活問題が閑却されなかつたことを證するものとして大に興味があらうと思ふ。

兎も角も不正な職業に從事するものは常に大なる罪を作つて居るのであるから、之を戒めて其の不正を改めしむることは大なる慈悲といふべきである。それに續いて『諸の犯戒』とあるのは佛戒に背ける一切の不正の行爲を指していふのである。前からも度々いつた通り、佛が戒を立てられたのは吾等の本性を充分に究められ、又吾等が罪を犯し過を作るに至れる有らゆる事情を究められ、吾等をして一切の過誤より脫して正しき人生を送らしめんが爲であるから、若し佛戒に背いた行ひをする者は自分の一生を無意義なものにしてしまふのみならず、周圍の人々に多くの累を及ぼすもので、是れは重大なる罪である。犯戒の者が多くある間は此の穢土がいつ迄も穢土であつて、淨土に近づくことは出來ぬである。故に佛が世に出て法を說かれた る大慈悲に感激し、少しなりとも此の恩に報じたいといふ心を起したものは、他に犯戒の者あるを見た時に之を打棄て置くことなく、力を盡して之を諫曉し、疾く其の過を改めしむべきである。若し此の如き努力を惜んで、犯戒の者を世間に跋跨せしめて置くならば、それは佛法の流布すべき道を塞ぐものであるから深く之を愼むべきである。前に引いた涅槃經の文の續きに

能く呵責する者は是れ我が弟子なり。駈遣せざる者は佛法の中の怨なり。

とある。呵責するとは他人の過失を責めて改めしむることである。駈遣するとは彼を排斥して其の反省を促すことである。呵責するのは眞に親切な心から出ることで、佛の御心と一致するものであるから之を『我が弟子なり』といはれたのである。駈遣せぬのは親切の心が足らぬものであつて、佛法の流布を妨ぐる結果となるから之を罪として斷ぜらるゝのである。

斯く多くの人の過失を責めて改めしむるのは至つて大なる功德であるが、それを實行するに就て『我力を得ん時』と特に斷つてあるのに注意しなければならぬ。自ら救ひ得ずして人を救ふことの出來るものではない。自ら實行し得ぬことを人に勸めても、人は決して之に從はぬ。されば三慧經には

人自ら意を伏すること能はずして、反りて他人の意を伏せんと欲す。能く自らの意を伏せば他人の意を伏すべし。

と戒めてある。又法句經にも

若し多少聞くことありとも、自ら大なりとして以て人に驕らば、是れ盲の燭を執るが如し。彼を照せども自ら明ならず。

といつてあるが、まことに痛切なる訓戒である。孔子が門人子張の問に答へた語にも

多く聞きて疑はしきを闕き、愼みて其の餘を言へば則ち尤寡し。

とある。自ら信じて疑はぬことでなければ、人に對して語るべきではない。人を救はんとするものは常に自ら顧みて其の力の足らざらんことを恐るべきである。此の戒愼の念が弛めば世をも人をも益することが出來なくなるものである。

次には世間の人に對して攝受と折伏とを並び行ふべきことが說かれてある。攝受とは他の人の行爲の中に善いことがある場合に、充分に其の價値を認め、益々其の善を長じて行くやうに之を奬ましてやることである。折伏とは他の人の行爲の中に善からぬことがある場合に、嚴しく之を責めて、直ちに之を改めしむるやうに力を盡すことである。此の二つの方法は相反するが如く見ゆるけれども畢竟大なる慈悲心の發現したるものに外ならぬのである。されば天台大師の摩訶止觀には

與奪途を異にすと雖も、俱に利益せしむ。

といつてある。與とは彼の爲す所を肯定すること、奪とは彼の爲す所を否定することである。與も奪も共に彼を正しき道に入らしむる爲であるから、共に彼を益せんとの心に出るものであるといふのである。惡を止むるは卽善を長ぜしむる所以であるから、兩者は畢竟一に歸すべき

ものである。譬へば雜草を刈り取ることによつて良き苗を長ぜしむるが如きものである。嘉祥大師の『勝鬘經寶窟』の中に此の攝受と折伏との關係を說いて

剛强なるは應に伏すべし、伏して惡を離れしむ。柔軟なるは應に攝すべし、攝して善に住せしむ。故に折伏攝受と名く。

とある。剛强なるとは煩惱が多くて我執の强いことである。柔軟なるとは我執をすてゝ正しい敎へに歸伏する事である。佛の說法は要するに攝受と折伏との二つの方法以外には出ぬのである。

特に此の折伏といふことに就て注意しなければならぬのは、それが大なる慈悲心の發現であるといふことである。如何なる惡人も憎むべきではない。惡を積み罪を重ぬるのは畢竟其の智が昏くして正しき道を辨へ知らぬがためであるから、たゞ哀愍すべき者であつて、決して憎嫉すべきものではない。但し其の惑の甚しきものは、之に諭して其の過失を改めさせやうとしても容易に自ら反省しやうとはせぬのである。故に彼が反省を促すために之を嚴しく叱責することも亦已むを得ぬ場合がある。其の叱責の烈しいのは、彼をして改悟せしめんといふ慈悲心の强いためなのである。彼の不動明王の如きは忿怒身と稱せらるゝのであるが、それも慈悲心の現はれたものに外ならぬので、希麟音義には

忿怒身を現ずるは大悲を起すに由つて威猛を現ずるが故なり。

と說明してある。若し少しなりとも憎嫉の念が交るならば折伏ではなくて、單なる攻擊になつてしまふから、佛の御心には全くかなはぬ事になるのである。

されば折伏し得る人は固より攝受し得る人でなければならぬ。人の長所を認めて之を奬勵し益々其の善を長ぜしむるだけの慈悲心もあり度量もある人が、言を勵しくして折伏すれば其の折伏に大なる力がある。人の善を認め得ず、人を容るゝの量無き人が唯だ聲を高くして人を責めても、それは折伏としての効果を收むることの出來るものではない。例へば日蓮上人の如きは其の一生涯殆んど折伏のみを以て終始したのであるが、自ら其の折伏を行ずるに就ての心事を語つて

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流るべし。

といひ、

鳥と蟲とはなけども涙落ちず、日蓮はなかねども涙ひまなし。

といひ、其の折伏は慈悲の心から出たものであるといふことを明言して居る。又常に法華經の不輕品に記されたる不輕菩薩の心を以て自分の心とするのであるといつて居る。不輕菩薩は途

で何人に出逢つても恭しく之を禮拜して、いつも

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以は何。汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といつたとある。是れは人々に反省を促さんがためである。何人も皆貴い佛性を具へて居るのであるから大乘の教へを學び菩薩としての行を勵みさへすれば、後には必ず佛の境界に到達し得べきものである。然るに此の事に氣がつかず、佛法を學ぶことを知らずして毎日を空しく過して居る爲に、いつ迄も凡夫の境界を脱することが出來ぬのである。故に不輕菩薩は彼等に覺醒を與へんがために先づ之を禮拜して彼等が皆貴い佛性を具へた者であることを知らしめ、次に彼等に菩薩道を勵んで共に皆佛の境界に進むやうにと心懸け、切角具へ得たる貴い寶を空しくせぬやうに勸めたのである。日蓮上人の折伏もそれと全く同一の精神に出るものである。たゞ不輕菩薩は恭しく禮拜し、日蓮上人は烈しく呵責し、その形に現はれた所が全然相反するやうに見えるのは、全く時勢がちがふからである。されば日蓮上人は自ら

日蓮と不輕菩薩とは位の上下はあれども同業なれば、彼の不輕菩薩成佛したまはゞ日蓮が佛果疑ふべきや。

といつたのである。此の意を察せずして唯だ日蓮上人を、自ら一宗を開かんがために諸宗を攻撃したものゝ如くに見るのは誤れるの甚しきものである。又上人の教へを奉ずると稱する人々の中に、人の善を認めて之を奬勵し之を保護してやるだけの愛情と度量と無くして、唯だ他宗の攻撃のみを事とする者の往々にして見えるのは痛惜すべきことである。

此の攝受と折伏とが並び行はれて居れば、人々が皆惡を止めて善に就き、過を改めて正しき行を勵むやうになるから、「法が久住する」といふことになるのである。久住するとは永久に榮えて衰へず泯びぬことである。法華經の寶塔品には、釋尊が其の說法に就ての苦心を語られて後に、

是の方便を以て法をして久しく住せしむ。

とあり、更に

諸の佛子等、誰か能く法を護らん。當に大願を發して久しく住することを得しむべし。

とある。如何に貴い教へでも久しく世に行はれなければ、多くの人を濟ふことは出來ぬ。故に佛は此の久住といふことに就て非常に苦心せられたのである。其の佛の御心を以て吾が心とし、

法をして久しく世に住せしむるために努力することが卽ち菩薩の勤めであつて、華嚴經には

菩薩は能く三寶をして斷絕せざらしむ。

とあるが、三寶とは佛法僧である。此の三寶を斷絕せざらしむるには如何にすべきかを說かれてある中に、

一切の大願を稱讃し、因緣の門を分別演說し、勤めて六和敬の法を修習す。

とある。大願とは一切衆生を救護したいといふ願である。一切衆生を救護することは固より諸佛の志であるから、苟くも佛法を學ぶものは自ら此の事に志すと共に、之を稱讃して普く世に勸むべきである。但し斯る志を立つても之を貫くには大なる勇氣を要することである。故に過去に於ける種々の事實を擧げて、佛法の弘通のために力を盡す功德の尊大なることを明かにすることが必要である。因緣を細かに說くといふのは卽ち此の事である。又斯る大事は一人や二人の力で到底成就し得べきものではないから、多くの人の協力一致が極めて必要である。六和敬を修習するのは之が爲である。和敬とは互ひに敬心を以て和合するのである。共に貴い佛法に歸依する者である以上は互ひに相敬重すべきは勿論である。蕪太の句に

うつくしや月の中なる盆の人

といふのがある。是れは盆踊りの景趣を詠んだものである。盆踊りに集る男女の姿や形はそれぞれに異ふけれども月の光りの中に立つて手振りを揃へて踊つて居るところを遠くから見ると、何れも皆美しく見ゆるのである。佛法の信仰を同じくする人々も亦其の通りである。賢愚老幼の別はあつても同じ佛の御光りの中に立つ者であるから互ひに貴くも美しくも見ゆる筈である。和衷協同といふ中にも種々の類がある。名利のために相和するものが世間には多いが、此の如きものは一朝利害關係が相反する時は、忽ちにして讐敵となるのである。主義のために相和協するものは頗る賴もしい者であるが、それでも主義主張の變つた爲に昨日までの親友と手を分つたといふ例が世間には隨分ある。唯だ佛の絕對なる御力の下に和協する者のみは、其の信仰の退轉せぬ限りいつまでも相和して行ける筈である。併しながら世間が非常に複雜であつて、吾等の信心を退轉せしむべき種々なる刺激が絕えず來るのであるから、此の和敬の生活を永く持ち續くるために、いつも互ひに此の六事を心に銘して居ることが敎へられてある。それが卽ち六和敬なるものである。其の六和敬といふのは、

一に身和敬。二に口和敬。三に意和敬。四に戒和敬。五に見和敬。六に利和敬。

である。一に身和敬とは佛を禮拜し、其の他有らゆる儀式作法を同じくすることである。此の

如くして久しきを經る間に、いつとは無しに和合一致の美しい氣風を作り成さるゝのである。二に口和敬とは共に經を讀誦し、共に佛を讃歎する等のことを永く續けて居ることである。凡て聲は耳より入つて心を動すものであるから、斯くして久しきを經るうちに自ら各自の心が融和して來るのである。三に意和敬とは同じ佛を信じ、同じ教へを奉じ、互ひに貴いと感じたことを誇りあつて其の心の一致を期するのである。人々の性質氣風はそれ〴〵に異るけれども、互ひに信を同じくして居る以上は、久しき間に自ら一致和合して來べき筈である。四に戒和敬とは共に佛の定められたる戒律を守つて違はぬやうに努むることである。佛の戒律は吾等の私心を除くために立てられたものであるから、共に戒を守つて 共に私心を去ることに努めて居る以上は、必ずや和合一致の美しい氣風が出來て行くべきである。五に見和敬とは佛教の教義に就て常に語りあひ質しあつて、其の見解の一致を期することである。斯くして互ひの見解が一致して來るに隨ひ、獨り佛教の教義のみならず、世間百般の事物に對する見解も亦自然と一致するやうになるべきである。六に利和敬とは互ひに得る所の物を分つて共に其の益を受くるやうにすることである。此の六和敬といふことは大體同じ僧房に住する者のために制せられたものであるから、利和敬といふのは多くの信者から受けた布施を僧房の一同が公平に分けることを指すのである。併し此の精神を以て世間の事をも處して行けば必ず和合一致の良い氣分を長ずることが出來るであらう。例へば一の工場内に於てする仕事には種々の差があり、又其の人々の地位にも種々の差があるけれども、皆同じ事業のために努力するのであるから、得たる所の利益も出來るだけ公平に分配して一同の滿足するやうに計らふべきである。其の他有らゆる共同生活をするものが此の六和敬の精神を守つて行けば必ずや圓滿平和なる生活が出來るであらう。

さて華嚴經の中に三寶を斷絶せざらしむるに就ての心得を說かれた中に、以上の三ヶ條の外に更にまた三ヶ條が擧げられてあるが、是れ亦頗る有益なる教訓である。それは

衆生の田の中に佛種子を下し、正法を護持するに身命を惜まず、大衆を統理して疲るゝことなし。

といふのである。第一は田の中に穀物の種子を下すやうに、一切の人の心の中に佛と成るべき種子を植ゑつくることである。佛と成るのには是非とも大乘を學んで菩薩の行を勵まなければならぬのである。されば大乘の教へを普く世に弘むるために力を盡すのが卽ち佛種子を下す所以である。但し大乘の教へを弘むるに當つて若し佛の御精神と一致せぬやうなことを說くなら

ば、たとへ其の教へが世に弘まつても、世の人に眞の利益を與ふることは出來ぬのであるから、次には『正法を護持する』と特に斷つてある。併し前からも屢々いふ通り、世間の人は兎角自己の欲望を滿足せしむることのみを求むるものであるから、其の意を迎へて『此の教へを信ずるものには必ず幸福が與へられる』といふやうに說くものは直ちに繁昌する。『汝の心中より一切の煩惱を掃ひ去れ』といふやうな教へは兎角繁昌しにくいものである。されば、正法を世に弘むるものは或は罵詈せられ或は嘲笑せられ、時としては恐ろしい迫害にあふことさへあるであらう。それを覺悟しなければ正法を弘むるといふ大事に當ることは出來ぬのである。それで『身命を惜まず』といふ覺悟を要するといふのである。

身命を惜まぬといふのは單に『いつでも死ぬ』といふだけの事ではない。身命は誰にも最も大切なものであるから、身命を惜まぬといふ以上は其の他のものは一切惜まぬといふ決心の出來る筈である。日蓮上人の佐渡から其の弟子達への消息の中に

身命に過ぎたる惜きものゝ無ければ、是を布施として佛法を習へば必ず佛となる。身命を捨つる人、他の寶を佛法に惜むべしや。又財寶を佛法に惜まんものまさる身命を捨つべきや。

とあるがまことに道理ある言である。身命を惜まぬ覺悟がある以上は、名譽も財產も地位も勢力も法を弘むるためには惜むに足らぬと覺悟して居る筈である。然るに法の爲には身命を擲つと揚言して居る人の中に、往々にして地位を爭ひ勢力を爭ふことのみに沒頭して居る者のあるのは不思議なことである。是れは眞に身命を法の爲に捧ぐる覺悟がなくて、たゞ口に說くにすぎぬ者である。此の如き徒が多いので、眞の正しい教へが世に弘まらぬのである。

終りに『大衆を統理する』といふのは佛法を信ずる者の協和一致を謀ることに外ならぬのであるが、これは實際容易な業ではない。同じく佛法を信ずる者の中にも、出家の人もあり在家の人もある。男女老若の差がある。貴賤貧富の別がある。其の人々の性質氣風等が皆それ〴〵に異ふのである。勿論如何なる人でも眞に佛に歸依し眞に佛の御精神が分つて來れば、和合一致して此の貴い教へを世に弘むるために盡すに違ひないが、其處まで到達し得る人は決して多くない。多くの人は佛法を信じながらも、其の心の底にはなほ種々の煩惱が蟠つて居るのであるから、時として私意私心に動かされて相爭ふを免れぬのである。それを調和し統率して行くのが先輩たる人の責任であるが、その苦心努力は一方ならぬものである。此の大なる責任を負うて少しも疲れぬといふは信心堅固なるものでなければ出來ぬ事である。如何なる困難を冒し

ても佛法の弘通に努めやうといふ大決心があつて初めて爲し得べきことである。

勇猛精進し志願して倦むこと無し。――無量壽經

とは實に此の如き人をいふのであらう。

以上は法の久しく住するといふことに因んで、大乘を學ぶ者の共に深く心に銘すべき所を擧げたのであるが、斯くして法が久しく世に住するに於ては『佛の轉ぜられたる法輪を隨ひて轉ずることを得』とある。卽ち佛の敎化を贊けて佛恩に報ずることが出來るのであつて、此に勝れる悅びはないわけである。吾等は人の身を受くること難きが上に、人となつて佛法にあふことは更に難いのである。佛の御名を聞くことさへ無くて死んで行くものが凡ての人類の大多數である。然るに幸にして佛の大乘の法を學び、更に此の貴い法の世に弘まるために聊かなりとも貢獻し得るといふことは、得難き中の最も得難きものと考へなければならぬ。雜阿含經の中には有名なる盲龜と浮木の譬喩がある。大海の中に浮び出たる盲目の龜があつて波に隨つて漂うて居る。然るに此の大海に又唯一の穴のある浮木があつて、波のまゝに流れて行くのであるが、風の起る度に波が高まるから、此の浮木の漂うて行く方角は更に定まらぬ。此の盲龜が果てもなき大海の中に於て浮木にあひ、其の穴の中に身を托することが有り得るであらうか。釋尊は此の譬喩を說いて阿難に問はれたが、阿難は『兩者の相遇ふことは有り得べからぬ事である』と答へた。釋尊は重ねて『しかし此の盲龜と浮木とは或は相遇ふこともあるであらう。吾等が再び人の身を受くることは更にそれよりも難からう』と仰せられ、

是故に汝等今當に勤めて方便して增上の欲を起し佛法を學ぶべし。

と諭された。增上の欲とは絕えず進步したいといふ希望をいふのである。たとへ多少知り得た る所があつても、佛に比すれば固よりいふに足らぬものであるから決して之に滿足せず、益々勤め學んで止まぬのが眞の佛弟子の志である。勝鬘の志す所も必ず此に在つたのであらう。

勝鬘の說いた十大受の最後は『正法を攝受して決して忘失せぬこと』である。此の正法といふ語は多くの場合に於て『佛の說きたまへる正しき敎へ』といふ意味であるが、此處では更に深い意義を含んで居るものと解すべきである。若し單に佛の敎へられた所を忘れまいといふだけのことであれば、十大受の第一の中に既に其の意が含まれて居る。佛の戒を盡く持つて之に違はぬものが佛の敎へられた所を忘れて居やう筈はない。此處に正法を忘失せぬといふは、大乘を學んで能く至極の理を體得することを志とするのである。佛の說かるゝ所は單なる言說でなくて、其の自ら覺り得たる所を說かるゝのである。佛は久しく難行苦行の數々を重ねたる末

に絶對の理を覺られたので、それが卽ち『正法』なるものゝ內容である。旣に絶對の理を覺られたのであるから、天地萬有の眞相を明かにして、人間生活の眞相を究め盡して居らるゝわけである。さればこそ吾等のために貴き佛法を說いて、吾等の共に嚮ふべきところを明かに示されたのである。觀普賢經の中には

此の方等經は是れ諸佛の眼なり。諸佛は是に因つて五眼を具することを得たまへり。佛の三種の身は方等よりして生ず。

とある。方等經といふは卽ち大乘の經典のことであるが、此處にいふ所は經典その物のことでは無く、此の經典の中に於て說き示されたことをいふのである、それは卽ち絶對の理に外ならぬのである。佛が佛となつたのは此の絶對の理を體得された爲であるから、是れ佛を生み出したものであるといふのである。今此處に『正法を攝受する』といふのは斯る絶對の理を體得することを志とすることである。

聖德太子の勝鬘經義疏の中に此の文を說明してあるが、是れはやゝ難解の說であるけれども、大乘を學ばんとする者のために頗る參考となることであるから、之を引用して見やうと思ふ。それには

旣に正法を攝受するといふは是れ八地以上の行なり。……今勝鬘は七地に在りて不忘といふは、但だ八地以上を得んと願ふが故に、正法を攝受するの心暫くも敢て忘れずといふなり。敢て自得して忘れずといふには非るなり。

とある。是れは菩薩行を勵む者が漸く進んで終に佛の境界に到達するまでの間を十大別して十地と稱するので、其の七地といふは遠行地といふのである。是の地位に到れば一切衆生に對して大悲心を起し、いかにもして自分の力を以て之を救護し之を敎化し、一切の苦を脫せしめんといふ念が極めて盛であつて、彼の聲聞とか緣覺とかいふ者の境界（卽ち世俗の外に立つて獨り淨らかに過したいといふ考へをもつて居る者）とは全く超越して居るのである。遠行とは遠く聲聞緣覺の境界を超出したいとの意である。

此より進んで八地となれば名けて不動地といふのである。此の地位に到れば一切衆生の境界を精しく觀察して、之を救護し敎化すべき働きに就て充分の工夫を積み、佛の化導を贊くべき力が具はるのである。斯うなれば漸く進んで佛の境界に到達し得べき見込みが充分に立つて居るから、不動といふ名がつけられたのである。正法を攝受するとは此の境界より以上のことである。第七地の者は其の志はあつても未だ其の力が之に伴はぬわけである。今勝鬘は大乘に就

て能く信解し得た者ではあるが、まだ修行の日が淺いから一切衆生を救護するに就て遺憾なきだけの力は具はらぬのである。唯ださういふ境地に達したいといふ理想を有し、又それだけの努力を積んで行けるといふ自信は充分もつて居る。それで『正法を攝受して忘失せぬ』といふことを理想として說いたわけである。正法を攝受するとは絕體の理を體得することであるから言を換へていへば諸佛の得られたと同じ覺を得ることである。一たび斯る境地に達した以上は決して退轉することは無いから、それで『忘失せず』といつたのである。

既に天地萬有の眞相を知り、又人生の眞の意義が明かになれば、一切衆生を救護し敎化するために力を盡さずには居られぬわけである。一切衆生は皆貴い佛性を具へて居る。何人も皆佛の境界に到達し得べきものである。然るに之を自覺すること無くして徒らに煩惱に役せられ、罪を作り過を重ねて自ら惱み、又其の周圍の人々に累を及ぼして居るのである。之が爲に哀愍の念を起さずには居られぬ。譬へば久しく闇黑の中にうごめいて居た者が一たび光明に充ちた所に立てば自ら大なる悅びを感ずると共に、以前の自分と同じやうに闇黑の中にうごめいて居る者が多いのを知つて、彼等をも何とかして自分と同じやうに光明の中に立ち得るやうにしてやりたいと思ふわけである。佛菩薩の大慈悲心は此の如きものである。釋尊が

我佛眼を以て觀じて六道の衆生を見るに、貧窮にして福慧無し。生死の險道に入りて相續して苦斷えず。……是の衆生の爲の故に而も大悲心を起しき。――法華經方便品

と仰せられたのは此の事である。獨り釋尊のみならず、絕對の理を體得したる者は皆此の如き大慈悲心を起さずには居られぬのである。

一切衆生は共に佛性を具へて居るから、學んで忘らなければ共に皆其の佛性を開發せしむることを得て、共に皆佛の境界に到達し得べき筈である。彼の不輕菩薩が何人に逢つても之を禮拜して

汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。――法華經不輕品

といはれたといふのも此の意に外ならぬのである。但し佛の境界に到達するのには『菩薩の道を行じて』といふことが必須の條件となつて居る。菩薩の道を敎へられたものが卽ち大乘の敎へである。大乘を學ばずしては何人も其の具有せる佛性を充分に開發せしむることは出來ぬのである。小乘の敎へも亦佛の說かれたものであるから貴いものには相違ない。小乘の修行だけでも決して無用といふことは無い。各自に具へ得たる佛性を開發せしむるために相當の力にはな

つて居る筈である。併しそれではまだ充分ではない。譬へば朝顔の種を地中に埋めて之に水を注ぎ、之を暖い日の光りに當てゝ置けばやがて芽を生じ、その芽から蔓が延びて來るのであるが、是れだけではまだ滿足ではない。其の蔓から葉を生じ美しい花を開くやうになつて初めて朝顔の種を播いたかひがあるわけである。若し蔓が延びたところで滿足して、水をやることも止め、日の光りもさゝぬ所へ引込めてしまへば決して美しい花は開かぬ。佛法を學ぶ者も亦此の如くである。小乘を學んだ者が更に進んで大乘を學び菩薩行を勵むならば、其の小乘を學んだことが大に役に立つのであるが、若し小乘を學んだのに滿足して、それより以上の修行をしなければ切角佛法を學んだかひは無いわけである。隨つて佛の世に出て法を說かれたる御精神にもかなはぬわけである。

勝鬘が『正法を攝受することを忘失するものは大乘を忘れ波羅蜜を忘るゝものである』といつたのはまことに尤もである。波羅蜜とは卽ち菩薩行のことであるが、自ら大乘を學んで菩薩行を勵むと共に、一切の人に勸めて共に大乘を學ばせ共に菩薩行を勵ませやうといふ大決心をするのには、是非とも佛が世に出て法を說かれたる根本の精神をよく辨へなければならぬのである。其の根本のところが分らなければ自ら德を成ずることも出來ず、普く世間を益することも出來ぬ。此の如くであれば『大乘を欲せず』といふ結果になる。大乘を欲せずとは、大乘の普く世に弘まることを欲せぬといふ意である。たとへ大乘の貴いことを知つても、是非とも此の貴い法を世に弘めたいといふ熱心が足らなければ、眞に菩薩道を行ずるものとはいはれぬのである。華嚴經には

菩薩は諸〳〵の衆生の惡業を造作して重苦を受け、此の障を以て佛を見たてまつらず、法を聞かず僧を識らざるを見て慈悲心を起し、諸〳〵の惡道の中に於て衆生に代りて種々の苦を受けて衆生を解脫せしむ。菩薩は衆生に代りて苦毒を受くるに、精勤して之を捨てず避けず驚かず怖れず退かずして、疲るゝこと無し。

とあるが、是れ程の大決心があつて初めて佛の境界に到達し得らるゝといふ自信も得らるゝのであらう。勝鬘の志すところも亦此に在るのである。以上で十大受は終つたが、更に諸人が共に勝鬘と所行を同うせんことを發願したことを述べ、それより三大願に移るのである。

法主世尊、現に我が爲に證したまへ。佛世尊現前に證知したまふと雖も、而も諸〳〵の衆生は善根微薄にして或は疑網を起さん。十大受は極めて度し難きを以ての故に、彼或は長夜に非義をもて饒益して安樂を得ず。彼を安んぜんが爲の

故に、今佛前に於て誠實の誓を說く。我此の十大受を受けて說の如く行せば、此の誓を以ての故に大衆の中に於て當に天華を雨らし天の妙音を出すべし。是の語を說く時、虛空の中より諸〳〵の天華を雨らし妙音を出して言く、是の如し是の如し。汝が所說の如き、眞實にして異ること無しと、彼の妙華を見及び音聲を聞ける一切の衆會、疑惑悉く除きて喜踊すること無量なり。而して發願して言く、恒に勝鬘と與に常に共に俱に會して、其の所行を同じうせんと。世尊悉く一切の大衆其の所願の如くならんと記したまふ。

以上を以て『十大受章』を終るのであるが、此の末段に於ては勝鬘が今まで說いた十大受を必ず實行せんことを誓ひ、それに感應があつたので大衆も皆之を信じ、共に勝鬘を範として此の十大受を實行せんことを約したのである。如何に多く學び博く識つても自ら之を實行しなければ何の用にも立たぬ。又如何に高い理想をもつて居ても、自ら必ず之を實現すべき覺悟がなければ畢竟空想になつてしまふ。勝鬘の說いた十大受は、大乘を學ぶ者の心得としてまことに至れり盡せりとも稱すべきものであるが、之を實行するには多くの困難がある。然るに勝鬘は必ず之を實行せんことを誓つたのである。その誓ひには誠實の心が籠つて居たから天も之に感應し、佛も之を認められたわけである。是れは極めて貴いことである。華嚴經には

但だ多く聞くを以て能く如來の法に入るにあらず。人の美饌を設くるも自ら餓えて食せざるが如く、人の藥を善くするも自ら疾を救ふこと能はざるが如く、他の寶を數へて自ら半錢の分無きが如く……法に於て修行せずして多く聞くも亦是の如し。

とあり、智度論には

但だ能く勤行すれば、縱ひ復た寡聞なるも亦先ちて道に入る。

とあるが、何よりも大切なのは實行である。勝鬘夫人はまだ妙齡の一婦人であつて、而も佛を信ずるやうになつてから未だ至つて日が淺いのであるが、其の信心が至つて深く且篤いために能く大乘の深意を解し得て十大受を說き、又必ず之を其の身に實行せんことを誓つたのである。此の經の末の方を讀むと勝鬘夫人は其の夫たる友稱王を感化して共に大乘を信ぜしめ、又國中の人を感化して共に大乘を信ぜしむるに至つたとあるが、これは全く夫人が佛の敎へを能く解し能く信じ、又能く之を實行した爲と思はれる。貴むべきは實行の力である。

○法主世尊　佛を稱して法主といふ。一切の貴い法は皆佛より出るものであるから佛を法の主と仰ぐのである。○我が爲に證したまへ　佛智を以て照し見らるゝに於ては、勝鬘夫人が必ず此の十大受を實行し得べきものであることを知らるゝであらう。故に佛の之を證せられんことを請うたのである。○善根微薄　彼等は未だ大なる善事を爲し得べきだけの自信をもたぬ故に勝鬘が十大受を說くのを聞いても、此の如き事が果して實行し得らるゝものであるか否かに就て疑惑を懷くのである。疑惑があれば自ら進んで之を實行しやうといふ勇氣は起らぬ筈である。○疑網を起さん　疑惑の念が起ると、宛も網に包まれたものが動けなくなるのと同樣に、正しい分別が働かなくなつてしまふのである。○非義をもて饒益して　饒益とは『附け加へる』といふ意味である。自分の憶測を附け加へて判斷するから、正しいことが分らなくなるのである。○彼を安んぜんが爲　大乘の敎の深い意義を知らぬ人々に能くそれを知らせ、安んじて之を實行する心を起させんとするは、まことに勝鬘の大なる慈悲心である。○說の如く行せば既に十大受を說き終つたのであるが、徒らに說いたのみで之を實行しなければ空言となつてしまふ。勝鬘は必ず之を實行する決心である。佛は必ず勝鬘が之を實行すべきことを知らるゝに違ひない。故に勝鬘は佛前に於て此の誓ひを說き、此の事に僞はりが無くば、必ず奇瑞があつて之を證するであらうといふ希望を述べたのである。○是の如し　汝の言の如し、少しも僞りなしとの意である。○喜踊すること無量、此の奇瑞を見て、勝鬘のいふ所の空言でないことを知り、又自分等も必ず努めて止まなければ、その實行が出來るといふ自信を得たから、踊躍して大に喜んだのである。○常に共に　其の人々の機根はそれ〴〵に異ふから、それ〴〵に遲速の差はあらうけれども、努めて怠らなければ最後には皆共に菩薩の道を完全に實行し得るやうになれる筈である。『常』にといふのは『いつ迄も怠らずに』といふ意味である。○記したまふ　釋尊が之を認めらるゝのである。『今の決心が弛まなければ、汝等も必ず勝鬘と同じく、此の十大受を實行することが出來るぞ』といふことを認められたのである。

此の一節は以上說かれたる十大受に千鈞の重さを加ふるものとも稱すべきである。勝鬘は非常に機根のすぐれたる婦人であつたから、佛弟子となつて未だ久しい歲月も經ぬうちに、大乘の深義を充分に辨へ知つて、自ら之を實行せんことを決心し、それに基いて十大受を說いた。此の人は必ず之を實行し得べき人に違ひない。釋尊は既に此の人に授記せられた。卽ち『今の其の心を持ち續くるならば、最後には佛の境界に到達し得らるゝであらう』といふことを認められたのである。是れ程の人であるから、其の一たび決心して佛前に於て說いたことの實行が出

來ぬ筈はない。併しながら勝鬘は自ら之を實行するを以て足れりとする者ではない。其の志とする所は自ら菩薩道を行ずると共に、多くの人々を誘うて共に菩薩道を行せしむるに在る。自ら最後に佛の境界に到達すると共に、多くの人々をして共に佛の境界に到達せしむるに在る。此の志あつてこそ初めて眞に大乘を學ぶ者といふべきである。法華經の化城諭品に、上方の世界の梵天王が佛前に於て種々の供養を爲した末に說いた偈の中に、

願はくば此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん。

とある。一切に及ぼしといひ、衆生と共にといふ所に、大乘を學ぶ者の志がよく現はれて居る。勝鬘の志とする所も亦勿論此に在つたのである。

さりながら勝鬘自身にもいふ通り、此の十大受は『極めて度し難き』ものである、之を遺憾なく實行することは頗る困難であるから、多くの人は之に對して疑惑を生ずるであらう。勝鬘の如き妙齡の婦人、殊にまだ佛弟子となつてから久しき歲月をも經ぬものが、果して之を實行し得らるべきかは、多くの人々の危ぶむ所であつたに違ひない。若し之を說いた勝鬘自身が之を實行し得ぬことなら、他の者が如何に努めても容易に實行し得られぬであらう。勝鬘は至て慈悲心の深い人であるから、多くの人々に斯る疑惑の念を除かせて、共に之が實行に力を盡させ、共に佛の境界に到達し得るやうにしてやりたいと念願したのである。故に釋尊に向つて改めて之が實行を誓ひ、又佛が之を承認せられんことを請うたのである。佛となれば無論洪大無邊なる智慧を具へて居らるゝのであるから、何人の心の底をも見透して、どれ程の決心があるか、どれ程の實行力があるかといふことを明かに知つて居らるゝ筈である。されば無量義經に於て諸菩薩が釋尊を稱へたる偈の中にも

智慧深く衆生の根に入りたまへり。

とある。勝鬘は固より能く此のことを知つて居るから、釋尊が自己の爲に證明を與へられんことを請うたのである。釋尊は勿論之を嘉納せられた。又虛空の中より妙華を雨らし、微妙の聲を以て『眞實にして異ることなし』といつたとある。是れは勝鬘の誠心が能く佛を動かし、又能く天地を動したることを證するもので、斯くして勝鬘その人も亦一層確乎たる自信を得たわけである。

此の天上よりの聲を聞いて深き自信を得るといふことは、此經以外にも其の例がある。例へば法華經の神力品にも十方世界の衆生が、此の娑婆世界に釋尊の出現せられたことを知つて大なる歡喜を感じたといふ。次に

卽時に諸天、虛空の中に於て高聲に唱へて言く、……國有り娑婆と名く、是の中に佛有す。釋迦牟尼と名けたてまつる。……汝等當に深心に隨喜すべし。亦當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし。

とある。之によつて十方世界の者が一層其の信を增し、共に娑婆世界に對して合掌して『南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛』と唱へたとある。是れは此の娑婆世界がやがて淨土と化すべきことを證するものである。是れは其の一例であるが佛によつて證せられ、また天上からの聲によつて證せらるゝといふは、必ず眞實にして違はぬといふことの確證であつて、之によつて人々の自信も亦幾倍か强まるわけである。充分なる自信をもつて居れば、出來難い事も必ず出來る。其の自信が足りなければ、決して大事の成就するものではない。孟子の中に記する所に依れば伊尹が殷の湯王の招聘に應じて出て仕ふるに先つて、

天の此の民を生ずるや、先智をして後知を覺さしめ、先覺をして後覺を覺さしむ。予は夫れ民の先覺なる者なり。予將に斯の道を以て斯の民を覺さんとす。予が之を覺すにあらずして誰ぞや。

といつたといふ。是れは伊尹が其の天職を最も强く自覺したことを示したのである。『予が之を覺すにあらずして誰ぞや』と自覺すると共に、伊尹は天が必ず自己を護つて、此の天職を果さしむのであらうといふ自覺をも得たに違ひない。伊尹が湯王の嗣子太甲に告げた言に

先王この天の明命を顧み、以て上下の神祇、社稷宗廟に承け、祇肅せざるなし。

とあるによつても、其の意中を推すべきである。古來よく大事を果し得たものは、皆此の如き自信を有するものである。

今勝鬘も此の感應を得てまた幾層か其の自信を强くしたことであらうが、多くの人々も之によつてまた大なる力を得たことは『疑惑悉く除きて喜踊すること無量なり』とあるによつて能く察せられる。それは勝鬘が既に授記を得たる上に、また十大受を必ず實行し得べきことを證せられたのを眼前に見たのであるから、自分達も努力次第で必ず菩薩行を行じて最後には佛の境界に到達し得らるべき見込みが立つたので、無量の喜びを感じたのである。法華經の譬諭品には、釋尊が舍利弗に對して授記せられることがある。而して其の次の信解品には迦葉等が深き歡喜の意を述べて居る。それは舍利弗が既に授記を得た以上は、自分等も必ず同じく授記を得べきことを知つたからである。舍利弗も迦葉も共に佛弟子であつて、共に聲聞（小乘の敎を

學んで覺を得た者）の中に於て重きを爲して居たものである。然るに舍利弗は迦葉等よりも機根が優れて居たから、先づ第一に授記を得た。迦葉等は舍利弗よりも機根がやゝ劣つて居ることはよく知つて居る。併しながら努めて怠らなければ必ず舍利弗の到達し得たる境界に、自分達も到達し得らるべき自信が得られたのである。其の譬諭品より前の方便品に於て釋尊は

一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。我が昔の所願の如き今已に滿足しぬ

と明言して居らるゝのである。されば迦葉等が最後には必ず佛の境界に到達し得らるべき自信をもつたのも、少しも不思議なことではない。それで迦葉等は大に感謝して

我等今佛前に於て、聲聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふを聞きて心甚だ歡喜し、未曾有なることを得たり。謂はざりき今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を得たりと。無量の珍寶、求めざるに自ら得たり。

といつた。之に續いて迦葉等も亦授記せらるゝことになつたのである。今此の勝鬘の十大受を說けるに對して種々の感應のあつたのを見て、多くの人々が歡喜したのも、全くそれと同じことである。以上を以て「十大受章」を終つて、「三大願章」に入る。此の三大願を實現することが出來れば、既に菩薩として最上の德を具へたものであつて、卽ち佛の境界に到達し得らるべきものである。故に釋尊は之を稱讃して、『此の三願は眞實にして廣大なり』といはれたのである。

爾の時に勝鬘復た佛前に於て三大願を發して、此の言を作さく、（一）此の實願を以て無邊の衆生を安慰せん。此の善根を以て、一切生に於て正法智を得ん。是を第一の大願と名く。（二）我正法智を得已つて、無厭心を以て衆生の爲に說かん。是を第二の大願と名く。（三）我攝受正法に於て身命財を捨て、正法を護持せん。是を第三の願と名くと。

爾の時に世尊卽ち勝鬘に記したまふ、三の大誓願は一切の色の悉く空界に入るが如く、是の如きの菩薩恒沙の諸願は、皆悉く此の三大願の中に入る。此の三願は眞實にして廣大なりと。

此の三大願はまことに菩薩の志とする所を說いて遺憾なきものといふべきである。語は至つて簡であるけれども、その意は極めて深い。釋尊が言を盡して之を稱讃せられたのも道理である。此の三大願は要するに洪大なる慈悲心の發露せるものに外ならぬ。今までにも既に此の事は充分に說かれてあるが、大乘を學ぶものは必ず一切衆生の爲にせんとの志を立つべきである。此の志が堅固であつてこそ、初めて有らゆる困苦を冒して其の修行を成就することも出來るのである。されば聖德太子の義疏にも、此の段を釋して

大士の懷を立つるは但だ自らの爲にはあらず、必ず先づ物の爲にすることを明す。

といつてある。物とは『自己以外の者』といふ意味で、卽ち一切衆生のことである。されば此の三願の第一は自ら佛智を得んとの願であるが、佛智を得ることは但だ一切衆生に救護を與へんがために外ならぬのである。それで第二の願に於ては之を承けて、普く衆生の爲に法を說かんことを願として居るのである。而して第三の願に至つては、永く此の貴き佛法を護つて、後生の人をして之に依ることを得しめんとの意を述べてある。眞に其の慈悲心の洪大なることを知るべきである。而して『無邊の衆生を安慰せん』といふまでには三大願の全體に就て概說し

『此の善根を以て』からが第一の願、『我正法智を』からが第二の願、『我攝受正法に於て』からが第三の願である。但し三願は相聯絡して居るから、三とはいふけれど畢竟一大誓願となるわけである。多くの佛は最初から佛であつたのではなく、皆菩薩の行を勵んだ結果として佛になられたのであるが、其の菩薩たりし時に種々の願を立てられた。藥師の十二願、普賢の十願、阿彌陀の四十八願の如きは皆それである。その他にもなほ多くの菩薩の願といふものがあるが其の旨とする所は此の勝鬘の三大願の外に出ることはない。故に釋尊は『皆悉く此の三大願の中に入る』と仰せられたのである。

○三大願　必ず之を完全に實行しやうと志すことを願といふので、法界次第には『滿足を志求す故に願といふなり』とある。勝鬘經法窟には『心に期するを願と爲す』とある。○此の實願

今より說かんとする三大願のことである。實といふのは眞實にして違はぬ意である。聖德太子の義疏に『實願とは必ず其の行を行ずるなり』といふので能く悉されて居る。○安慰せん

安慰とは其の心の苦を除くことである。一切の人は其の心に煩惱あるが爲に種々の苦を作るのである。大乘の敎を世に弘めて、彼等をして其の煩惱を根柢より除かしむるのが、卽ち彼等に眞の安慰を與ふる所以である。○此の善根を以て　善根といふのは卽ち菩薩行を積むことであ

る。それが佛智を成就すべき根源となるから之を稱して善根といふわけである。羅什は之を說明して『堅固の善心、深くして拔く可からず。乃ち名けて根といふなり』といつた。大集經には『善根とは所謂善法を欲するなり』とあるが、善法とは佛の覺り得られた所を指していふのである。○一切生に於て『何れの生に於てか』といふ意である。若し現世に於て佛智を具ふることが出來れば、此より大なる幸はないが、若し此の生に於てそれが出來なければ、幾度か生をかへて修行に修行を重ねて後、必ず佛の境界にまで到達せんことを期すべきである。○正法智　正法とは卽ち絕對の理のことである。絕對の理を覺られたものが佛である。されば正法智といふは卽ち佛智のことである。○無厭心を以て　一切衆生の爲に法を說いて倦まず怠らぬことである。たとへ若干の人を救ひ得たりとも、未だ救はれぬ者のある間は決して自ら足れりとせぬのである。○攝受正法　攝受とは之を學んで自得することである。佛の覺られた所を自身も覺つて、佛と同じやうに正智を具へ、佛と同じやうに一切衆生を救ふ力を具ふる身となるのが卽ち眞の攝受正法である。なほ之に就ては下の段に至つて、非常に詳密に說かれてある。○身命財を捨て『一切の困難を冒して』といふ意である。身命財に於て惜む心の無い人は卽ち執著を離れ盡した人である。執著を離れ盡した人は世間に對して何の求むる所もなく、唯だ世間の人を救護することのみを念とするのであるから、如何なる困難をも冒すことが出來る筈である。○正法を護持　佛の正法が永久に世に弘まるやうに力を盡して之を護るのである。佛菩薩は唯だ時を同うした人々のみを救はうとせらるゝのでは無い。自分の亡き後にも永く一切の人が救はるゝやうに貴い法を遺さるゝのである。○記して　之を承認せらるゝことである。○一切の色　色とは凡ての有形の物を總稱するのである。○空界に入る　所謂地水火風の合成する所のものは盡く虛空の中に包容せられて、一も漏るゝものは無いのである。○恒沙の諸願　恒河の沙の無限なる如き、無數の願といふ意である。如何なる願も此の三大願中に包容せられぬものは無い。大乘を學ぶものは誰も皆此の心を失はぬやうにしなければならぬものである。

苟くも大乘の敎を學ぶものは必ず願を立つべきである。願といふのは單なる希望ではなく、必ず其の實現を期するといふ大決心が之に伴つて居るのである。誰でも現在の狀態に滿足する者はない。必ず何等かの希望をもつて居る。然るに其の希望が往々にして、實現せられずして雲の如くに消えてしまふことがある。それは自ら信ずる所も足らず、又如何なる努力をしてなりとも此の希望を實現しやうといふ決心も足らぬ爲である。願といふのは必ず之を實現せざれば已まぬといふ堅固なる決心を含むものであるが故に、非常に貴いのである。天台大師の『摩

訶止觀』の中に

發願するとは誓ふなり。人に物を許すが如きも、若し券を分たざれば、物則ち定まらず。衆生に善を施すにも、若し心に要せざれば或は退悔せんことを恐れ之に加ふるに誓を以てす。又誓願無ければ、牛に御無きが如くにして趣く所を知らず。願來りて行を持するなり。

とある。願を立つることによつて自ら勵まして、能く善を爲すのである。日蓮上人の如きも法華經を日本國に弘めて、日本國の一切の衆生をして共に正しき信仰を有せしめんことを願としたので、たとへ生命を奪はれても此の精神は決して變ぜぬといふことを『開目鈔』の中に力說せられて、

其外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず。

といひ、又後年に至つて其の熱心なる信者、曾谷大田の二人に與へられた書中にも、

今兩人微力を勵まして、予が願に力を副へ、佛の金言を試みよ。

とある。佛に對して願を立て、佛の加護を祈つて佛法の普く世に弘まらんがために力を盡すのである。此の願力こそは偉大なる効果を生ずるものである。智度論には

佛界を莊嚴する事大なり、獨行の功德にしては成ずること能はず。故に要らず願力に須つなり。

とある。佛界を莊嚴するとは佛法を普く世に弘めて、此の世を淨土に化することである。これは非常なる大事であるから、佛前に誓願して佛の加護を請ひ、此の大事を必ず成就すべき決心をしなければならぬといふのである。

此の願といふものには總願と別願との二種がある。總願とは大乘を學んで佛と成らんことを期する者の必ず共に立てなければならぬ所の願である。然るに人々の境遇事情は皆それ〴〵に異るものであるから、同じく一切衆生を救護するために力を盡すとしても、其の力を盡す所の方法手段に至つては必ずしも一樣なるを要せぬ筈である。例へば醫師が多くの人の病苦を救ふことに力を盡すのも、政治家が國政に參與して國利を進め民福を增すことに力を盡すのも、慈悲の現はれたものとして同樣のことであるが、其の人其の人の專門によつて、其の力の盡し方はちがふわけである。それ故に『自分は特に斯ういふ事に力を盡さう』といふ決心をして、自分

に最も適當なる事に力を用ゐ、成るべく其の効果の多からんことを期すべきである。それが卽ち所謂別願である。されば別願は總願の應用的のものとも解すべきである。其の根本の精神は少しも變らぬけれども、其の事に現はるゝ上に於ては必ずしも一樣ではないのが當然である。摩訶止觀に

菩薩は生々に物を化す。須らく總願と別願とあるべし。

とあるのは此の意である。其の總願といふのは所謂四弘誓願である。弘とは『凡てに通じて』といふ意である。卽ち大乘を學ぶ所の凡ての人が皆此の四ヶ條の誓願を立つべきである。尤も密敎の方では五大願といふのを立つるのであるが、其の精神に於ては全く同一である。四弘誓願なるものは卽ち

衆生無邊誓願度。煩惱無數誓願斷。法門無盡誓願學。佛道無上誓願成。

である。(今日各宗に於て唱ふる所に、多少は言句の異同はあるが、其の意義に於て異る所はない。)先づ第一は一切の衆生をして苦を脫し、惑を去らしむるために力を盡さんことを誓願するのである。其の中には勿論善人もあり惡人もあり、智者もあり愚者もあるけれども、其等を凡て敎へ導いて佛法に歸依せしめ、共に覺を成せしむるやうに力を盡すのである。第二には自他共に心の中には種々の煩惱が蟠つて居るのであるから、之を盡く除き去らうと誓願し、自身にも努め又他の人々をも誘うて、共に此の事に力を盡さしむるのである。煩惱の數はまことに無量無邊であるけれども、佛の貴い敎へを能く信解する時には、其の限り無き煩惱は自ら消え去るべきである。譬へば空に日が出て空氣が暖くなれば一切の草の葉や木に葉に置かれたる露や霜が自ら消え去るのと同樣である。

第三には佛の說かれたる法を盡く學ばうといふ誓願であるが、是れは到底出來さうも無いことに思はれる。佛の五十年間に說かれたる法は其の量に於て實に夥しいものであるのみならず極めて多方面である。佛の說法を聽聞した人々は老若男女さまざまであつて、其の知識の程度に於ても著しい等差がある。佛は其等の人々に皆適切なる敎へを與へられたのであるから、其の中には一見して互ひに矛盾するやうに見えるものさへある。勿論其の根本の精神に於ては一致すべきであるが、それを一々に深く味つて、其の一致點を見出すといふには非常なる努力を要する。されば法門の無盡なるを皆學ばうといふ誓願は實現が不可能のやうにも思はるゝのである。併しながら必ずしも凡ての經典を讀まなければ佛の御精神が分らぬといふ筈はない。日蓮上人の如きは十二歲の時から三十二歲まで佛敎全體に亘つての研究を積み、一切經を盡く讀破

されたのであるが、而も『開目鈔』の中には、

一滴をなめて大海の潮を知り、一華を見て春を推せよ。……法華經の六難九易をわきまふれば一切經讀まざるに隨ふべし。

とある。海水の一滴を嘗めて其の鹹いことを知れば、海の全體が皆同じやうな鹹水であることは推察が出來る。梅の花が一輪咲いたのを見れば、春が既におとづれて來たといふことは分るのである。佛が特に魂を打込んで說かれた經を精讀して、其の精神が充分に解し得らるゝならば、佛敎とは如何なるものかといふことは確かに分る筈である。若しそれだけの機根もなく、又努力も足らぬ者が漠然として多くの經論を讀み續けて何十年を送つても、遂に得る所はないであらう。要するにこれは心の持ち方一つに依ることである。

第四の願に就ては今迄にも度々いつたことである。苟くも大乘の敎へを學ぶ者は、誰も皆結局は佛の境界に到達するといふ理想をもつて居なければならぬので、其の決心がつかぬ者は佛恩を辨へぬ者といふべきである。佛は一切の人を皆盡く佛界に到達せしめんとの大慈悲をもつて、大乘の敎を說かれたのである。それは前に引いた法華經の文によつて最も明かである。然るに此の貴い御心を無にして、自ら佛の境界に到達しやうといふ理想を捨つるといふは、忘恩の者といはなければならぬ。此の如き卑怯な者を梵網經の中には、

是れ佛性を斷ち道を障ふる因緣なり。菩薩の道を行ずるものに非ず。

といつて嚴しく責めてある。若し或る一人が必ず後には佛の境界に到達しやうといふ大決心をもつて修行を勵むならば、之に勵まされて同じやうな決心をする人も續々と出來るに違ひない。之に反して、『佛になることなどの出來るものでは無い。それは要するに空想にすぎぬ』といふ者が一人あると、それに引かれて修行を怠る者が多く出來る。それ故に一人が怠るといふことは、多くの人に對して『佛性を斷ち道を障ふる因緣』となるので、其の罪はまことに輕からぬものである。

此の如くに考へて來ると、四弘誓願なるものは、大乘を學ぶ者の必ず立てなければならぬ本願であることは明かである。密敎で五大願といふのも其の精神は、上にいふ通り此の四弘誓願と一致せるものであるが、『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』には、

道場に至りて先づ雙膝を地に着け、毘盧遮那佛及び八大菩薩を禮し、發露懺悔して五大願を發せ。

といつてある。其の五大願を說くに先つて、發露懺悔せよとあるのが大に注意すべき點である。

發露懺悔するといふのは、今までに犯し來つた罪を盡く打明けて告白し、再び斯る罪を犯さぬことを誓ふのである。吾等が罪を犯し過を重ぬるのは、吾等の心に煩惱が充ち塞つて居るからである。煩惱に役せられて毎日を送るのは眞に無意義なことであるといふ自覺が出來れば、此より心を改めて、全く新なる生活に入らうといふ決心がつくわけである。此の決心を告白するのが卽ち懺悔である。一切衆生を救護しやうとか佛道を究め盡さうとかいふ願を立つる人は、勿論凡夫の生活の無意味であることを自覺した人でなければならぬ。如何に多くの大乘經を讀んでも、斯る反省の足らぬものは、佛前に於て大願を立つることなどの出來やう筈はない。以上で總願のことは一通り明かであらうと思ふが、別願に就ては今此處に必要がないから省略して置かう。今勝鬘夫人の說いた三大願の如きも、總願に屬するものである。

此の三大願を說くに當つて、「必ず此の三大願を實行して、一切の衆生を安慰しやう」といつてあるが、これは前に擧げた「衆生無邊誓願度」といふのに當る語である。安慰するとは其の苦を除くことであるが、眞に一切衆生の爲に其の苦を除かうとすれば、之に敎へを與ふるより外はない。飢ゑた者に食を與へ、寒えた者に衣を與へても一時的の慰安にはなるけれども、決して永久的の慰安にはならぬ。衣食に乏しい者は固より苦痛を感ずるが、衣食の充分な者でも大概は滿足して每日を送ることは出來ぬ。貧賤は人の避くる所であり、富貴は人の求むる所であるが、富貴の人は多くの者に妬まれ怨まれて、片時も安穩ではない。要するに何人も其の境遇によつて滿足が與へられるといふことは無い。何よりも大切なのは心の持ち方である。如何なる境遇にも滿足し得るだけの心を、自ら養つて置かなければならぬ。それには是非とも道を學び敎へを求めなければならぬのである。故に人の爲に貴い敎へを說くことが卽ち、之に眞の安穩を與ふる所以であつて、之に勝れる功德は無い。維摩經の中には長者子善德といふ人が多くの人を集めて布施をしたことが出て居るが、その時維摩詰は此の善德に向つて、「衣食を施すのは眞の布施とはいはれぬと說き、

夫れ大施會は汝が設くる所の如くにすべからず。當に法施の會を爲すべし。

といひ、それより人に法を施すに就ての心得を委しく述べて、

菩薩是の法施の會に住する者を大施主と爲す。

といつた。今勝鬘が衆生を安慰せんといふのも要するに法施をしやうといふ決心を語つたのである。

其の三大願の第一は、菩薩道を勵むことによつて必ず佛智を具ふるに至らんことである。是

れが有らゆる善行の根本である。太陽から發する光線には必ず多量の熱が含まれて居る。其の熱が地上の凡ての物を養ひ、凡ての物を長ずるのである。佛の正法智よりして一切衆生を救護する所の作用の生ずるのも正しく其の通りである。佛が絶對の眞理を體得せられたのを『佛の實智』といひ、佛が種々無量の方便を以て一切衆生を敎化せらるゝのを『佛の權智』といふ。權智は卽ち實智の活用である。法華經の中には佛智を種々に形容してあるが、天台大師の『法華玄義』には之を說明して

前來二十種の智は權實の二智を出でず。經に如來は方便知見波羅蜜皆悉く具足せりといふが如きは、卽ち前來の諸〳〵の權智を總束せるなり。如來の知見廣大深遠なりとは、卽ち前來の實智を總束せるなり。

といつてある。實とは眞實にして差はず誤らぬことである。權とは卽ち方便のことである。佛の說法は一々に其の相對する人の機根に應じて、一々に皆極めて適切であるが、その種々無量の方便は皆其の實智よりして發するものである。天台大師のいつた通り、佛の智慧は廣大深遠にして一切の事物の眞相を知り、一切の人の心の中を能く照し見て居らるゝから、一切の人が如何にして種々の惑を起すかを能く見究めて居らるゝのである。隨つて其の種々の惑を如何にして除き得べきかといふことをも究め盡して居られるのである。それは宛も一切の病の根源を明かにし得たる名醫が、それ〴〵に適當なる藥を與ふるのと同樣である。

何よりも大切なのは自己の智慧を磨くことである。自己の智慧が足らずして、一切衆生を救はうと思つても、それは到底出來ることではない。譬へば三歲か四歲の小兒が往來で轉んで泣いて居るのを見れば、吾等でも直ぐにそれを扶け起して、其の母親の所まで連れて行つてやることが出來る。併しながら四十貫ほどの大男が往來に倒れて居るのを引き起して、何處かへ連れて行つてやらうと思つても、吾等のやうな體力では到底出來ぬことである。自分の力が足らぬのが何よりも悲しいことである。人を救はうとすれば、其の救ふだけの力を自分に具へて居なければならぬ。『中庸』の中に、

唯だ天下の至誠は能く天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育を知ると爲す。

とあるが、然らば如何にして此の如き洪大な作用が出來るのかといふことを說明して

君子の及ぶ可からざる所は其れ唯だ人の見ざる所か。

とあるは大に味ふべき所である。人の見ぬ所を戒愼して其の德を養ひ其の行を勵むのが、卽ち

天下の大本を立つる元となるのである。其の施す所の廣大無邊ならんことを望むならば、其の自ら養ふ所が深くして且厚くなければならぬ。無量義經の文は今までにも度々引いたが、其の『德行品』の中に於て、諸大菩薩は釋尊が種々難行苦行を重ねられたことを讃歎して

世尊往昔の無量劫に、勤苦に衆の德行を修習し、我が人天龍神王の爲にし、普く一切の諸の衆生に及ぼしたまへり。

といつて居る。此の事は吾等も能く考へなければならぬことである。

既に實智が具はれば、權智の之よりして發し來るべきは勿論のことである。されば第一の願に續いて第二の願の起るのは少しも不思議ではない。第二の願は一切衆生を教化せんことを願とするのである。それに無厭心といふことがいつてある。無厭心といふは倦まず怠らぬ心である。又いかに多くの人を教化し得ても、それを以て自ら足れりとせず、更に力を盡して休息しまいといふ心である。此の無厭心を生ずる根本が二つある。其の一は法を說くことを自己の天職とし、此の天職を果し得ることを深き悅びとするといふ念である。釋尊が拘尸那城外の河畔で御入滅になる時に須跋陀羅といふ老人が駈けつけて教化を請うた。その時に阿難等は『今釋尊は御入滅になるところである。今まで八十年の間少しも休まずに、唯だ一切衆生のためを思召されて法を說かれたのである。せめて御入滅の時だけは安らかにして置かなければならぬ。最期といふ時まで累ひをかけるには忍びぬ』といつて、彼の請を拒絕しやうとした。けれども釋尊はその事を聞かれて『自分が此の世を捨てやうとする刹那に、教へを求むる者が來るといふのは悅ばしいことである。』と仰せられ、彼の須跋陀羅といふ老人のために懇ろに教へを說かれたといふことである。是れはまことに釋尊の洪大無邊の慈悲の發露として仰ぐべき事實である。

併し如何に洪大なる慈悲心をもつて教へを說かれても、其の教へに多くの効果がないならば切角の慈悲心が無意味に近いものになるであらう。ところが佛は其の教化が決して無意味に終るものではないといふ確信をもつて居られたのである。今までにも度々いつた通り、一切衆生には皆佛性が具はつて居るのであるから、如何なる人でも其の機運が來て、其の緣が熟しさへすれば、必ず共に佛の貴い教へに歸依すべきものである。佛法に全く緣の無いといふ人は決して無い筈である。佛は此の事をよく見究めて居られるから、如何に多くの迫害が集つて來ても少しも悲觀せられず、如何に多くの人が佛教に對して冷淡であつても更に失望せられぬのである。法華經の涌出品には諸菩薩が釋尊を慰問して

世尊は少病少惱にして安樂に行じたまふや不や。度すべき所の者、教を受くること易しや不や。世尊をして疲勞を生ぜしめざるや。

と申したことがある。此の娑婆世界はまことに多事多難の所であつて、人の心も甚しく僻んで居る。此處で教化に力を盡さるゝ釋尊の御苦勞は實に一通りならぬものである。『世尊をして疲勞を生ぜしめざるや』といふのは全く尤もなる懸念である。然るに之に對する釋尊の御答へは

如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は化度すべきこと易し、疲勞ること無し。

といふのであつた。是れは事實とは相反して居る。化度す可きこと易しどころでは無く、多くの人々を教化するのには非常なる苦心努力を重ねられたのである。併し結局は何人も皆佛教に歸依すべきものであるといふことを見究めて居られたから、少しも疲勞を感ぜぬと仰せられたのである。此の確信あつて、初めて眞に無厭心を以て一切衆生のために教へを說くことが出來るのである。

此の如くに非常なる熱心を以て佛の正法を世に弘むるのは、極めて貴い事であるが、まだ此の外に今一つ大切な事がある。それは此の正法を護持するといふ大事である。護持するとは此の貴い教へが永遠に傳はるやうに、其の根柢を固くして置くことである。釋尊は末世の衆生に對して殊に哀愍の念をもつて居られたやうである。涅槃經には

譬へば人に七子有りて其の中の一子病に遇ふときは、父母の愛平等ならざるにあらずと雖も、而も病子に於て心偏に重きが如し。

とあつて、其の苦みの多い者を殊に哀愍せられるといふことが說かれてある。又大集經等の諸經を讀むと、釋尊は必ず末法の世の來るべきことを豫め洞見して居られたやうである。末法の世の『末』といふのは打ち消しの意味に使はれて居るので、『法のなき世』といふ意である。末の世になると世間が非常に複雜になり、人心が非常に險惡になつて、唯だ自己の欲望を充すことのみを考へて、その他のことは一切考へぬやうな者が多くなるから、道とか教へとかいふことは全く廢れはつるのである。それを末法の世といふのである。斯く人々が皆自己の利害のみを中心として物事を考へるやうになれば、勿論相爭ひ相鬪ぐことを免れぬ。個人と個人との間にも爭ひが繁くなり、團體と團體との間にも爭ひが繁くなる。國と國との間にも勿論爭ひが絕え間もなく起る。それで末法の世は『鬪諍堅固の世』と呼ばるゝのである。此の如き時代に於

ては殆んど凡ての人が道とか法とかいふことを顧慮せぬやうになるから、之を稱して『白法隱沒の世』ともいふのである。白とは正しいこと、黑とは不正なことに譬へるので、白法とは卽ち正法といふ意である。佛の正法が世に行はれぬことを白法隱沒といふのである。

釋尊は此の鬪諍堅固、白法隱沒の世の必ず來るべきことを豫め察して居られたのであるが、決して之が爲に失望せらるゝことなく却つて斯ういふ時代に大なる望みを屬して居られたのである。世間が平和であり安穩であれば、大概な人は深く物事を考へることもなくて、毎日を至て平凡に送つてしまふのである。然るに世間が非常に險惡になつて來ると、誰もボンヤリして毎日を送ることは出來なくなる。それで大多數の者は自己の欲望を達するためには方法手段を擇まず、極めて露骨に自己の勢力擴張に熱中するのである。斯ういふ人々の中に在つて、至て少數ではあるが、深く考へて見て『是れではならぬ』といふ念を起すものがある。斯ういふやうな狀態で爭ひあひ鬪ざあつて居ては、誰も皆不幸である。誰の心にも平和がない。何とかして此の淺ましい狀態の中から脫出しなければならぬと考へるものがある。それは勿論至て少數である。數百千人中に一人か二人である。併し斯ういふ人の考へは極めて眞摯であり、また極めて痛切である。併し如何に考へて見ても、自分達の力だけで、此の淺ましい狀態の中を脫出すべき見込みも立たぬから、そこで自分達よりモット立勝つた人の遺された敎へを學んで、それによつて新なる道を開拓して行かうといふ覺悟を定むるわけである。

此の如き人は末法の世の眞暗闇の中に一道の光明を投ずべき、貴き天職をもつて世に出た人である。其の道を學び敎へを求めんとする念は非常に熾烈なるものである。此の如き人は勿論最初に於ては至て少敎であるが、其の力が凝つて集まる時に、必ずや世間を動かすべき大なる勢力となるべきものである。佛は末法の世に至つて必ず此の如き人の出で來るべきことを洞見せられ、此の如き人の心の底より出たる要求に應せんがために、大乘の敎へを說き遺されたのである。法華經の藥王品に

我が滅度の後、後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絕して、惡魔魔民、諸天龍夜叉、鳩槃茶等をして其の便を得しむること無かれ。

とあるのは實に此の御精神を最も力强く言ひあらはされたものである。後の五百歲といふのは卽ち末法の世のことである。此の時に佛の貴い敎へが此の世界に弘まれば、世の中が根柢から變つて行くけれども、若し佛の敎へが弘まらなければ惡魔のやうな者のみが勢力を得て、世の中は永久に眞暗闇になつてしまふのである。それ故に必ず此の貴い敎へを世に弘めて、惡魔の